

令和 5 年度農山漁村振興交付金

農山漁村発イノベーション推進事業

(農福連携型のうち普及啓発・専門人材育成推進対策事業)

「認知度向上セミナー」

「交付金活用セミナー」

「農福連携フォーラム&マルシェ」

「農福連携技術支援者の集い」

<事業実績報告書>

2024 年 3 月 31 日



農都総研

株式会社農都共生総合研究所

目次

事業内容	3~4p
認知度向上 web セミナー(1回目)	5~9p
認知度向上 web セミナー(2回目)	10~15p
交付金活用セミナー	16~20p
農福連携フォーラム&マルシェ in 北海道	21~25p
農福連携フォーラム&マルシェ in 東北	26~30p
農福連携フォーラム&マルシェ in 北陸	31~35p
農福連携フォーラム&マルシェ in 中国四国	36~40p
農福連携フォーラム&マルシェ in 近畿	41~45p
農福連携フォーラム&マルシェ in 東海	46~50p
農福連携フォーラム&マルシェ in 九州	51~55p
農福連携フォーラム&マルシェ in 関東	56~61p
農福連携技術支援者の集い	62~65p
アンケート分析	66~73p
・セミナー・フォーラム申込者アンケート合算	67p
・フォーラム実施後アンケート会場比較・合算	68p~69p
・マルシェ購入者アンケート全会場合算	70p
・マルシェ出店者一斉アンケート	71p~73p
まとめ	74~77p

本アンケートを見る際の注意点

- ・申込者数、参加者数、アンケートには主催者・登壇者は含んでいない。
- ・セミナー及びフォーラム申込者のアンケートは、本事業のイベント募集をすべてオンラインで行っていることから、提出率はほぼ 100%である。しかし、各設問については回答が必須ではないため回答率にはばらつきがある。
- ・セミナー及びフォーラムの実施後アンケートもオンラインで行っているが、イベント実施後にアクセスすることは任意であるため、回答率は低い。無作為抽出によるサンプリングではないため全体を代表してはいない。
- ・マルシェ購入者アンケートは、各マルシェ会場で主催スタッフが購入者に直接声掛けをし、回答を得た。
- ・『「農福連携」街頭認知度調査』は、マルシェ会場やその周辺で、主催スタッフが無作為に通行人に声を掛けシール投票によって行った。

事業内容

「農福連携等推進ビジョン」で示された農福連携の課題である「知られていない」「踏み出しにくい」「広がっていかない」を解決する取り組みとして、認知度向上 WEB セミナーを 2 回、交付金活用 WEB セミナー 1 回、農福連携技術支援者の集い 1 回、フォーラム & マルシェを全国 8 都市で各 1 回、を開催した。

官民挙げて農福連携の取組を推進していくためには、農業と福祉の両分野に関係する人々の認知を高めることはもとより、広く国民の政策への理解が欠かせない。

これらイベントに向けた地域関係者への協力要請や集客といった準備活動において多くの説明機会が派生していくことの普及啓発に資する効果は大きい。

とりわけ本事業のフォーラム & マルシェは地方農政局の管轄地域を対象に都道府県を超えた広域から先進事業者が集まったことに特徴がある。

【認知度向上 WEB セミナー】

農福連携に関心を持ち始めた層を対象とし、わかりやすく親しみやすい形で農福連携の魅力を伝え、具体的な一歩を踏み出すことを促した。専門家による総論と福祉団体や農業者、企業等の当事者による各論で構成し、基礎的な内容や具体的な事例までがわかる内容とした。

【フォーラム】

開催地域における農福連携の取組としてノウフク・アワード受賞事業者を中心に「参考としやすい」多様なパターンの先進事例を紹介し、農福連携に参画する事業者の増加を促した。基調講演を依頼した先進事業者については事前調査を行った上で紹介動画を作成して講演の冒頭で放映した。開催地域の地方農政局の協力を得るなどして地方自治体関係者にも参加を呼びかけることで、農福連携に関係している行政関係者と民間事業者とが一堂に会する場ともなった。

【マルシェ】

フォーラム会場の近隣で同時開催した。開催情報を知って来場する関心のある人々だけではなく、たまたま通りかかった未だ農福連携という言葉すら知らない人々にも取り組みの意義や魅力に触れる機会を創出することを目的に、中心市街地の商業施設内や広場などの人の行き交う場所を会場に選定した。先進事業者の地域的広がりを見える化するためにフォーラムとマルシェに参加した事業者を紹介する『農福連携魅力物語 MAP』を作成し、フォーラム & マルシェのチラシの裏面に印刷したリーフレットを事前の広報活動やマルシェ当日の会場を中心に配布し啓発に努めた。

【農福連携技術支援者の集い】

前年度に続き 2 回目の集いを開催した。農福連携の研究者と、福祉、農業、企業、行政の各現場で農福連携に取り組む農福連携技術支援者が登壇し、農福連携を取り巻く情報と課題を共有するとともに、農福連携技術支援者間の交流を図った。

【交付金活用 WEB セミナー】

農山漁村振興交付金を利用して農福連携事業を軌道に乗せている農業者と福祉事業者からの実践報告と、農林水産省と厚生労働省の担当官から農福連携の取り組みを後押しする政策メニューの紹介を行った。

【オンライン特設サイトの開設】

各イベントの広報や記録、情報集約を目的としてポータルサイト『マイナビ農業』上に特設サイト『農福連携魅力物語』を開設した。

<https://agri.mynavi.jp/regional-agricultural-welfare-collaboration/>

【効果検証】

各イベントの参加者・出店者の募集時と実施後にアンケートを行い、実態調査や効果検証を行った。マルシェ会場では購入者アンケートや街頭認知度調査も行った。

開催日	イベント名	会場（所在地）
2023/7/25	農福連携 WEB セミナー （認知度向上 web セミナー①）	配信会場：ホテル東京ガーデンパレス 3 階 桂 （東京都文京区湯島 1-7-5）
2023/8/22	農福連携 WEB セミナー （認知度向上 web セミナー②）	配信会場：ホテル東京ガーデンパレス 3 階 桂 （東京都文京区湯島 1-7-5）
2023/9/8	農福連携フォーラム & マルシェ in 北海道	ASTY45 中研修室 1206 （北海道札幌市中央区北 4 条西 5-1）
		札幌駅前通地下広場 （北海道札幌市中央区大通西 3）
2023/9/22	農福連携フォーラム & マルシェ in 東北	SS30 第 1・2 会議室 （宮城県仙台市青葉区中央 4-6-1）
		AER2 階アトリウム （宮城県仙台市青葉区中央 1-3-1）
2023/10/12	農福連携フォーラム & マルシェ in 北陸	TKP 金沢新幹線口会議室 会議室 3A （石川県金沢市堀川新町 2-1）
		金沢駅東もてなしドーム地下広場 （石川県金沢市木ノ新保町 2）
2023/10/18	農福連携フォーラム & マルシェ in 中国四国	Central Forest 4 階ローズマリー （岡山県岡山市北区本町 6-30 第一セントラルビル 3 号館）
		イオンモール岡山 未来スクエア （岡山市北区下石井 1 丁目 2 番 1 号）
2023/10/26	農福連携フォーラム & マルシェ in 近畿	TKP ガーデンシティ京都タワーホテル 9 階 飛雲 （京都府京都市下京区東塩小路町 721-1）
		イオンモール KYOTO （京都府京都市南区西九条鳥居口町 1）
2023/11/8	農福連携フォーラム & マルシェ in 東海	ツドイコ名駅東カンファレンスセンター RoomD （愛知県名古屋市中村区名駅 3-21-7 名古屋三交ビル 2 階）
		オアシス 21 （愛知県名古屋市東区東桜 1-11-1）
2023/12/7	農福連携フォーラム & マルシェ in 九州	出島メッセ長崎 102 会議室 （長崎県長崎市尾上町 4-1）
		長崎浜屋 1 階アーケード （長崎県長崎市浜町 7-11）
2023/12/22	農福連携技術支援者の集い	千葉大学松戸キャンパス 100 周年記念戸定ヶ丘ホール （千葉県松戸市松戸 6 4 8）
2024/1/30	農福連携フォーラム & マルシェ in 関東	JP タワー ホール&カンファレンス カンファレンスルーム A （東京都千代田区丸の内 2-7-2 KITTE4 階）
		東京シティアイパフォーマンスゾーン （東京都千代田区丸の内 2-7-2 KITTE 地下 1 階）
2024/2/2	農福連携交付金活用セミナー	配信会場：ホテル東京ガーデンパレス 2 階 牡丹 （東京都文京区湯島 1-7-5）

アーカイブ動画一覧サイト

<https://www.notosoken.jp/noufuku/%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%95%E5%B9%B4%E5%BA%A6/#arcmovie>

農福がはじめてのあなたに。

参加費
無料農福連携
WEBセミナー

～農福連携のススメ～

参加
募集中

農福連携ってなに？

障害者等の就労の場の創出だけではなく、農業者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農業の維持・活性化等の効果があり、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを見せています。この機会に「農福連携」を知ってみませんか？

開催日時 2023年7/25(火) 13:00～16:00

応募期間 6/26(月)～7/21(金) ※応募者多数の際は先着順とさせていただきます。

場所 WEB開催 zoomURLは別途事務局よりご連絡いたします。

※リアルタイム視聴が難しい場合も、お申込み頂きますと、後日録画URLをお送りさせていただきます。

セミナー内容

農福連携に興味のある方々に向け、【総論】【福祉団体】【農業者】【企業等】の各観点から、講師による基礎的な内容や具体的な事例までがわかるWEBセミナーを開催します。

- 【総論】 農業と福祉の連携に関する展望 ～農福連携研究の視点から～
農研機構西日本農業研究センター 研究員 中本 英里氏
- 【福祉団体による取組】 農福一体のソーシャルファーム
埼玉福興株式会社(埼玉県熊谷市) 代表取締役 新井 利昌氏
- 【農業者による取組】 ネギ栽培で実践する組織的な農福連携
有限会社岡山県農商(岡山県岡山市) 代表取締役 板橋 良樹氏
- 【企業による取組】 16年目の挑戦 ココヨが取り組む農福バランス
ハートランド株式会社(大阪府泉南市) 代表取締役 水谷 亨氏
- 農林水産省からの情報提供
- ワークシート&フィードバック
本セミナーで得た知識を整理し、考えを深めるためのワークと、中本氏によるフィードバックの時間をご用意しております。

※セミナーの内容は予告なく変更する場合がございます。

受講対象 農福連携に興味のある方全般 農業者、社会福祉法人、
企業経営者・担当者等 どなたでもお気軽にご参加ください！

申込方法 申込はこちら


<https://forms.gle/m5DRaZvu78Phy4WA>

お問い合わせ先

株式会社農都共生総合研究所

TEL 03-3868-0889

E-mail noufuku@notosoken.jp

営業時間 10:00～18:00

※土日祝・年末年始を除く

講師プロフィール



農研機構
西日本農業研究センター
研究員
中本 英里氏

専門は農業経済、農業経営。農福連携の効果に関する調査研究を始め、学術研究の実績も多数あり。数多くの講演やセミナーの講師を務め、農福連携の普及推進に尽力している。平成25年には、ヤンマー学生懸賞論文大賞受賞、平成30年には、地域農林経済学会個別報告優秀賞を受賞している。



埼玉福興株式会社
(埼玉県熊谷市)
代表取締役
新井 利昌氏

「ソーシャル・ファーム」として、障害者やニート、罪を犯した者など、社会的に排除されやすい方々に対し、自立かつ主体的に活動できる場や居場所を地域内で提供しながら、地域を支える担い手として社会循環を創りだしている。



有限会社岡山県農商
(岡山県岡山市)
代表取締役
板橋 良樹氏

岡山県の農業生産法人。平成20年にNPO法人岡山自立支援センターを設立。青ネギ、ミニトマトの通年出荷をメインにさまざまな農産物の生産・加工・販売を行っている。障害者と高齢者を積極的に雇用しており、農福連携の発展に尽力している。



ハートランド株式会社
(大阪府泉南市)
代表取締役
水谷 亨氏

平成18年に設立したココヨ株式会社の特例子会社。特例子会社の農地所有適格法人としては日本初の取組事例である。令和4年度は、知的障害者5名・精神障害者2名を含む従業員17名が、養液栽培によりサラダほうれんそう等を通年で栽培。24時間コンピュータ管理を導入し、高品質な野菜を安定的に生産している。

主催：株式会社農都共生総合研究所



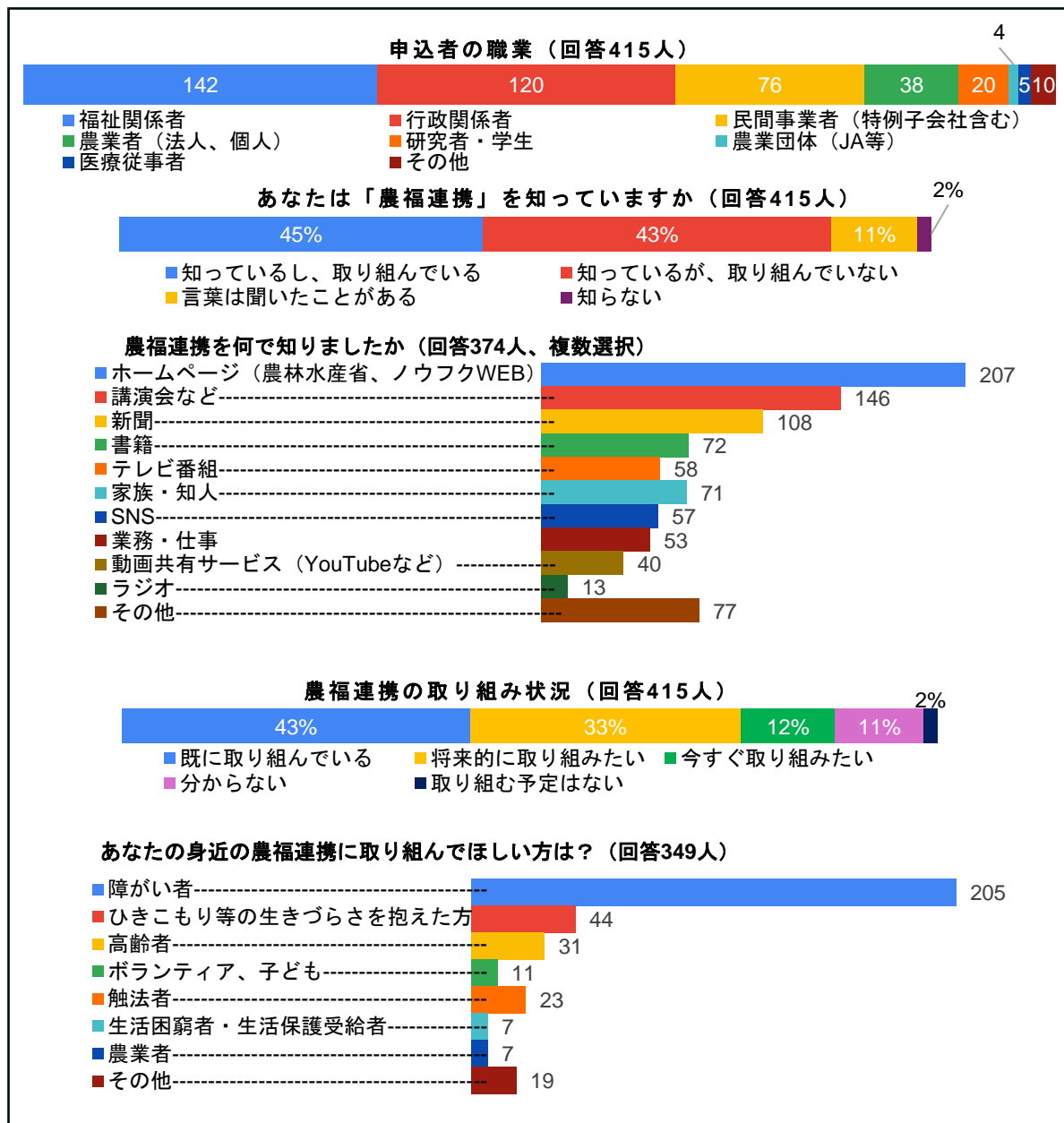
上段左から、農水（八巻課長補佐、福田調整員）、水谷氏、新井氏、下段左から、農都（川辺）、中本氏、板橋氏

認知度向上 web セミナー①

開催日時 2023年7月25日(火)13:00~16:00

申込数：415件

参加者数：296人



【総論】農研機構西日本農業研究センター 研究員 中本英里氏
「農業と福祉の連携に関する展望 ～農福連携研究の視点から～」

農福連携に期待される効果は、就労機会の創出だけでなく、障害者が一日当たり必要とする身体活動量が農作業の中で確保されることにもある。また、農作業直後はネガティブな感情の一部が緩和されたり、農園芸活動は生活の楽しみの一つとなったりすることもある。自然のある環境は精神的な休養にもつながる。農福連携は就労機会の確保だけでなく、身体・精神面への好影響にもメリットがある。農林漁業での法定雇用率達成割合は全体よりやや高く、ハローワークを通じた就労も増えている。職業としてみた場合の農業は、まだ別の視点で捉える必要もあるが、現地調査などでは、大変な仕事がある一方で遣り甲斐を感じる、という話をよく聞く。

【福祉団体による取組】埼玉福興株式会社（埼玉県熊谷市、ノウフク・アワード 2020 優秀賞）
代表取締役 新井利昌氏 「農福一体のソーシャルファーム」

仕事に合わせて人に指示をするのではなく、来た人に合わせて仕事を作っており、苦手なことはせずに、各々ができることを徹底している。苦手なことは他の企業と組むことで補っている。例えば白菜は、自分たちは栽培部分を担い、苦手な収穫作業を他の農業法人に任せて収益を分け合っている。農地は深谷ねぎの連作障害でねぎが作れない土地を使っている。新しく農業を始めると、ちゃんと作れる畑はまず手に入れないため、国や地域からの支援が欲しい。

埼玉福興では労働にのみ着眼するのではなく、人生をトータルで見て人を育てている。皆が働けるわけではないので、お茶を飲むことが仕事になるような、「働く」概念を切り替えていくことがこれからは必要だと思っている。自分たちの手でしっかり作れるものを作ること、大量生産・大量消費なしで成り立つ仕組みを自分たちで作ることを農福連携の役割として実践している。それは、おばあちゃんがいればおばあちゃんとやれるような農業のスタイルを作っていくことであり、多世代が活躍できる場を生み出している。地域の人たちとの交流から仕事はいくらでも作れる。有機的な人のつながりとしてのオーガニックを志向し、地元小学校や自然栽培パーティとのつながりをもっている。人のライフスタイルの中で農業をやる、困った人を支えるということをおしゃれに設えていくことが大事。そうすることによって社会の壁が壊れることを期待している。

【農業者による取組】有限会社岡山県農商（岡山県岡山市）
代表取締役 板橋良樹氏 「ネギ栽培で実践する組織的な農福連携」

農業は閉鎖的なところが多いので、障害者の方が社会との関わりを持ちにくいのが課題だと思っている。自分たちはスイーツ店にも障害者を配属することで、自分たちが作ったものをお客さんの顔を見ながら販売してもらい、障害者の方が働く喜びやものを作る喜びを感じられる職場にしていきたいと考えている。同時に、地域の方たちと交流する中で、地域の人たちに障害を持った人たちの理解をしてもらい、障害者の方も社会に出て活躍できるようにしていきたいと思っている。

これから農福連携に取り組まれる方には、雇用した障害者が十分に働いてくれなかったからといって雇用をやめるのではなく、特性に合っているか合っていないかが働きぶりに関係してくることも踏まえながら、長い目で障害者と接してほしい。

【企業による取組】ハートランド株式会社（大阪府泉南市）
代表取締役 水谷亨氏 「16年目の挑戦 コクヨが取り組む農福バランス」

水耕栽培は季節や天候に左右されない安定した環境であるため、以下のようなメリットがある。

- ① 日単位の緻密な生産計画が立てられ、安定した収穫が期待できる。例えば、サラダほうれん草は 50t/年、165kg/日の生産量。
 - ② 業務を単純作業に分割しやすく、手順の明確化もしやすい。そのため、作業工程の標準化・ルーティン化や、障がい者の特性に合わせた効率的な差配がしやすい。
 - ③ 成長する野菜を毎日間近で見ることのでき、やりがいを感じやすい職場を提供できる。
- 安心安全に就労するためには、見たらわかること、“一目瞭然”であるように工夫することが効果的である。そのため、作業方法や基準を徹底的に「見える化」している。例えば、1袋あたりの計量値を、いつでも見える場所に表示しておく。作業状況を貼り紙で表示しておく(殺菌中、など)。農作物の冷蔵庫内の置き場所を明確化、視覚化するなど

【農林水産省からの情報提供】農林水産省農村振興局都市農村交流課農福連携推進室推進班 調査員 福田修治氏

農福連携等推進ビジョンでは、農福連携に取り組む主体を令和元年から5年間、令和6年までに新たに3,000創出するとしており、直近の令和3年度末では1,392増加している。同ビジョンに基づき、農福連携を推進するために認知度の向上、取組の促進、取組の輪の拡大に向けて関係団体や関係省庁と連携して取り組んでいる。

①認知度の向上としては、ノウフクWEBによる情報発信、ノウフクJASをはじめとするノウフク商品の消費者向けキャンペーンやメディアを活用した戦略的プロモーションの実施。

②取組の促進としては、農業者、障害福祉サービス事業所の支援員、障害者本人の3者に対し、農福連携の現場で実践する手法をアドバイスする専門人材の育成(農福連携技術支援者)。また、農山漁村振興交付金(農福連携型)による農福連携に取り組む環境整備・経営発展の支援実施。

③取組の輪の拡大としては、各界の様々な関係者が参加するコンソーシアムを設置。コンソーシアムの活動の1つにノウフク・アワードがあり、全国で農福連携に取り組む団体・企業や個人を募集し、優れた取組を表彰。農福連携の全国的な横展開につなげることを目的として令和2年度より開催。

ワーク

参加者：農業の盛んな地域は交通の便が悪いので、農地近隣の福祉施設の住居確保が難しい。
板橋：町が積極的に協力してくれたことが役立った。耕作放棄地の増加や障害者の働く場所がないことは町の問題だったため、町は共同生活援助に使える住居を探してくれた。

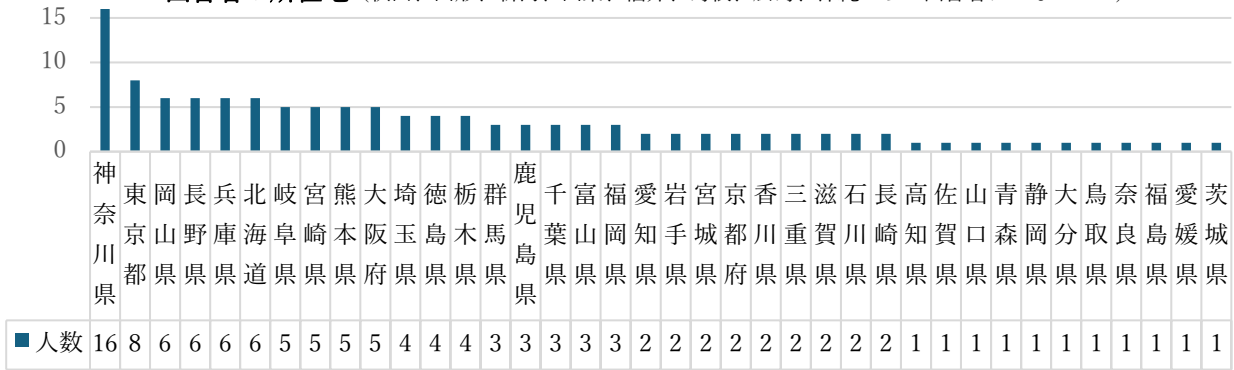
参加者：地域の作業所として知的障害者の方々と畑を耕作し作物を販売しているが、販売単価は下がる一方なので6次産業化を検討している。また、我々のもとに来る障害者の障害が重度化しており、農作業に取り組める方が減っている。農作業は障害が重度化すると難しい。

新井：病院や介護施設ではなく、埼玉福興のような場所でお茶を飲み、そのような場所を障害を持ったメンバーが作っていく。それが仕事になれば、一番良いと考えている。実際に藍染を作るなど、できることで、大量生産・消費に依らない商品を作っていくことを、焦ってすぐに商品化を求めめるのではなく、スタッフの意識がまとまるのを待ちながらやっている。周りに流されずにしっかりできることをやっていくのがよいと思ってやっている。

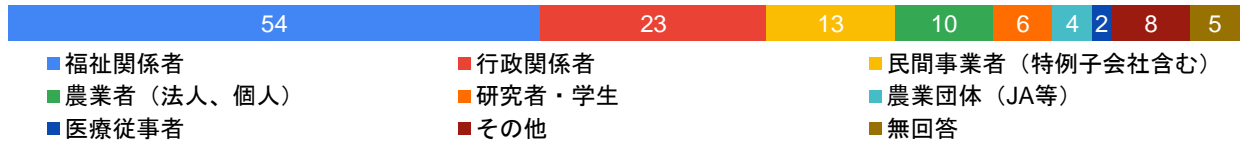
板橋：農作業の難しさに共感する。天候の影響や繁忙期に左右され十分にできなかった作業を、夜中に職員でフォローしている。それで初めて商品の付加価値が成立する。それが現状の課題で、今後の改善点である。

実施後アンケート（WEBセミナー①）

回答者の所在地（秋田、山形、新潟、山梨、福井、島根、広島、沖縄からの回答者はいなかった）



職種（回答総数125人）



農福連携の取組状況（回答125人）



セミナーの時間（回答125人）



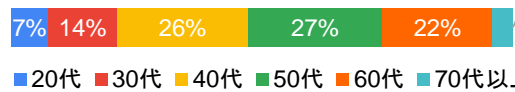
性別（回答124人）



セミナー理解度（回答125人）



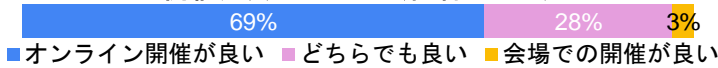
年齢（回答124人）



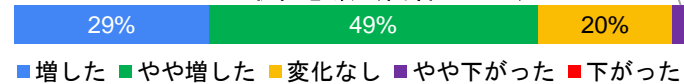
セミナー内容の満足度（回答125人）



開催方法について（回答125人）



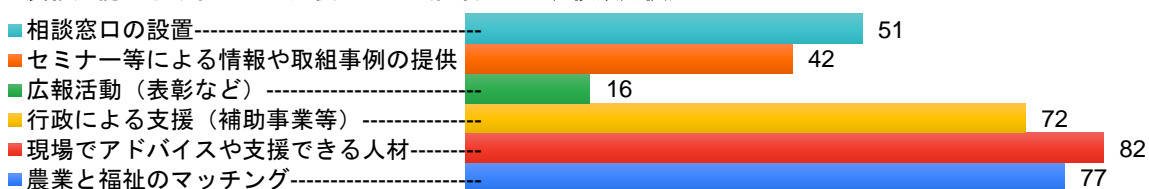
取組意欲（回答125人）



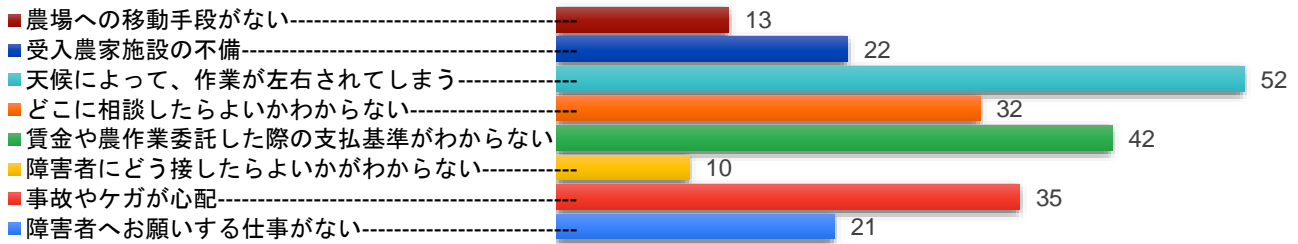
その他の必要なこと（自由記述）

- ・地域住民の理解
- ・農の側の教育（労働の即戦力になるとの期待から長続きしない事例がある）
- ・地域性の特徴があるのと、障害の程度もあると思うので、農福の専門というか、それぞれの専門家と相談できる機会があったらいい。また、その相談内容、取組みについて発信して欲しい。
- ・「農商福連携」も考えてほしい。
- ・意識改革
- ・障害者等と適当な農作業とのマッチング
- ・職務の経験がまだ浅いため、理解不足です
- ・地域活動とのリンクを次の段階と位置付けて構想することが必要になって来たように思います。
- ・システム会社の立場で農福連携を支援できないか考えています。
- ・市町村等の自治体関係者による支援や取組
- ・特別支援学校の啓蒙、親が「農業はね」という感想を持っている。
- ・農地に水洗トイレ等を整備するためのインフラ整備
- ・行政による販路提供
- ・収益

農福連携に取り組むのに必要なこと（回答125人、複数選択）



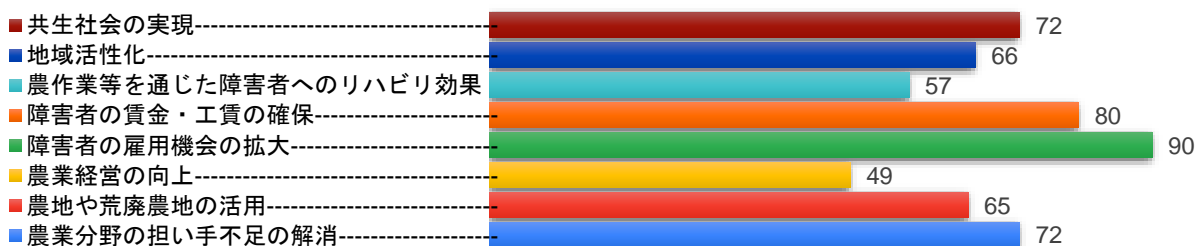
農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答119人複数選択）



その他（自由記述）

- ・これからの取組になりますので、何をしていけばよいかに悩んでおり、情報収集のレベルです。
- ・ご利用者の重度化、高齢化
- ・シニア層や高齢者への展開
- ・開業にあたっての資金調達
- ・雇用する側の雇用者に対して働きやすい環境の提供が困難
- ・公付加価値化とする対象の選定
- ・行政として、どのように事業化して推進していくか
- ・罪を犯した人たちに対する理解促進が必要である。
- ・資金
- ・事業所周辺での自社所有の畑を持つ
- ・自分たちで栽培した農産物(自然栽培か完全有機栽培に限定)は、障害者とその家族で消費することを大前提にすることが重要だと思う。栽培する農作物も、障害者やその家族の健康維持につながることも最重要。自然災害や貿易問題による突然の食糧危機などにも備えた地産地消と最低限必要な農地確保
- ・収益の向上
- ・障害者雇用を行っていますが現在、補助金を受給できていないので全て持ち出しになっており困っております。補助金をもらえる仕組みがないとの事です。個人事業主、障害者は委託作業で来て頂いています。
- ・障害者が働く場所がない
- ・障害者以外の刑務所出所者等の受入れ
- ・設備を増強するための補助金情報が知りたい
- ・全く、ゼロから始めるようなものなので、情報収集の手段が知りたいです
- ・地域の理解、一緒に取り組む人がいない
- ・低賃金の割に重労働環境 酷暑な草刈りなど
- ・提示される作業金額が安い（農家さんが作業量と労務金額の見立てが安い）
- ・農家（企業 JA 含む）と福祉の単発のマッチングはあっても継続（長期）となることが少ない
- ・農業の支援機関として農福連携の支援をどうするかが課題
- ・農業への取り組みそのもので不安がある
- ・農業者、福祉関係者双方がお互いを知る機会が少ない
- ・農業者のニーズに福祉側が答えられない。
- ・農地にトイレがないので作業時間の確保が困難
- ・農地の確保が困難、農業に関する専門技術の不足
- ・農福連携に取組みたい農業者を見つける手立て
- ・農福連携技術支援者の活用
- ・販路の確保方法
- ・福祉ではない
- ・北海道の冬期間の対策はどうか
- ・利用者さんのこなせる作業量が読めない事が多々あり、作業の予定がたて難い

農福連携に期待すること（回答125人、複数選択）



その他（自由記述）

- ・セミナーの話を聞いて、障害者を含めた自立困難な方々と農業を連携させるだけでなく、地域のコミュニティの場として機能できたら素敵だなと思いました。地域の方々が自然と集まって、農作業をして、お茶を飲むことが日常になると、全世代の孤独の問題も解消されるのではと思いました。
- ・スマートシティとして一般人が農業携わる機会を増やす仕組み

農福がはじめてのあなたに。

参加費
無料

農福連携

WEBセミナー

～農福連携のススメ～

参加
募集中

農福連携ってなに？

障害者等の就労の場の創出だけではなく、農業者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農業の維持・活性化等の効果があり、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを見せています。第1回目とは異なる講師陣を迎え、新たな視点・考え方を学ぶセミナーとなっております。この機会に「農福連携」を知ってみませんか？

開催日時 2023年 **8/22(火)** 13:00~16:00

応募期間 **7/25(火)~8/18(金)**

※応募者多数の際は先着順とさせていただきます。

場所 WEB開催

zoomURLは別途事務局よりご連絡いたします。
※リアルタイム視聴が難しい場合も、お申込み頂きますと、後日録画URLをお送りさせていただきます。

受講対象 農福連携に興味のある方全般、農業者、社会福祉法人、企業経営者・担当者等 どなたでもお気軽にご参加ください！

申込方法 申込はこちら ▶▶▶



<https://forms.gle/UMRz77ybEY78Ue8M6>

お問い合わせ先

株式会社農都共生総合研究所

TEL

03-3868-0889

E-mail

noufuku@notosoken.jp

営業時間

10:00~18:00 ※土日祝・年末年始を除く

セミナー内容

農福連携に興味のある方々に向け、【総論】【福祉団体】【農業者】【企業等】の各観点から、講師による基礎的な内容や具体的な事例までがわかるWEBセミナーを開催します。

1

【総論】

農業関係者、福祉関係者、障がい者、保護者目線からみた農福連携

酪農学園大学
(北海道江別市)教授

義平 大樹氏



2

【福祉団体による取組】

フラワーパッケージセンターの地域に密着した農福連携の取組

社会福祉法人ハイジ福祉会
(福岡県八女市)施設長

山口 隆充氏



3

【農業者による取組】

農業が果たす地域福祉への関わり方

株式会社耕野
(岩手県花巻市)代表取締役

安藤 誠二氏



4

【企業による取組】

「ありがとう」の気持ちを込めて～私たちの農福連携～

はーとふる川内株式会社(徳島県板野郡北島町)
代表取締役社長

山田 圭吾氏



5

農林水産省からの情報提供

6

ワークシート&フィードバック

本セミナーで得た知識を整理し、考えを深めるためのワークと、義平氏によるフィードバックの時間をご用意しております。

※セミナーの内容は予告なく変更する場合がございます。

主催：株式会社農都共生総合研究所



左から山口氏、安藤氏、山田氏、義平氏

認知度向上 web セミナー②

開催日時 2023年8月22日(火) 13:00~16:00

オンライン開催

申込数：305件

参加者数：182人

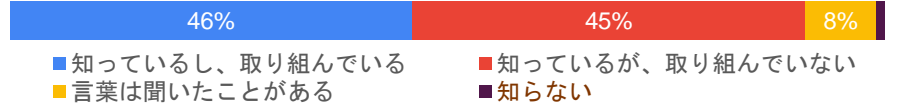


農林水産省
八巻課長補佐 福田調整員

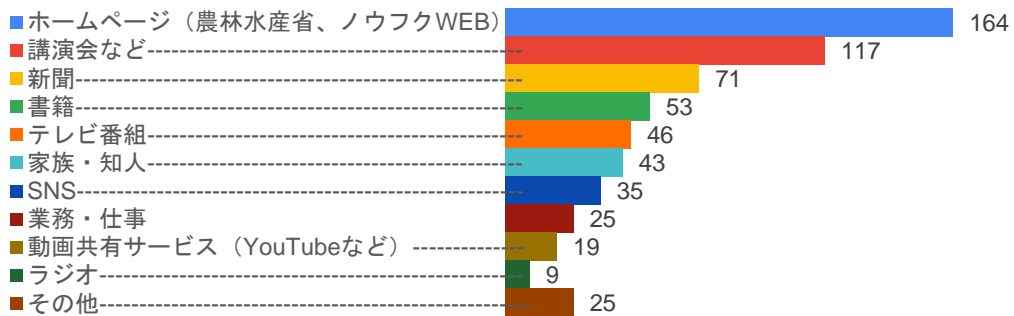
申込者の職業（回答298人）



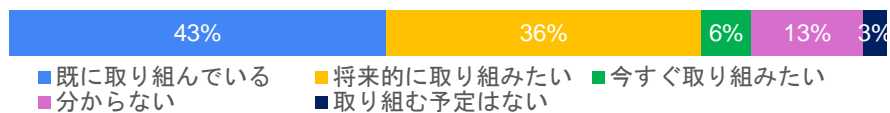
あなたは「農福連携」を知っていますか（回答298人）



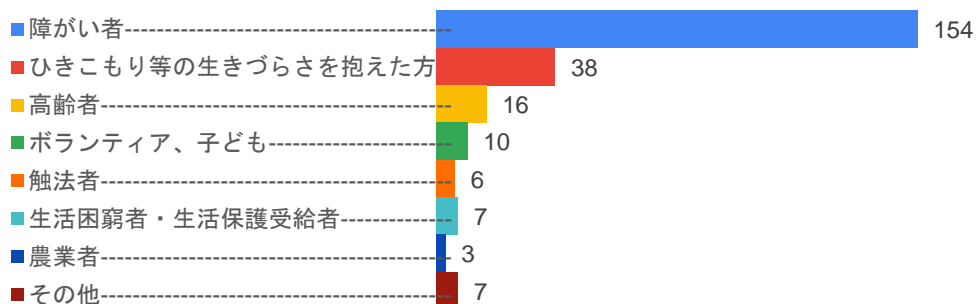
農福連携を何で知りましたか（回答272人、複数選択）



「農福連携」の取組状況（回答298人）



あなたの身近の農福連携に取り組んでほしい方は？（回答246人）



登壇者発言の要点

アーカイブ動画 <https://youtu.be/iVIuXhaIlZg?si=gE5wEHIU5enw82rY>

【総論】

酪農学園大学農食環境学群循環農学類教授 義平大樹氏

「農業関係者、福祉関係者、障害者、保護者目線からみた農福連携」

農福は継続できていても、障害者の自立の目処が立たない事例は少なくない。

中度知的障害を持つ長男の例では、事業所で農福をしているが、5年間 時給 300 円のまま。事業所の工賃の推移データを見ると、工賃+障害年金額が最も多い場合でも、たった月 82,757 円。障害者の経済的自立のためには工賃向上が必須だ。

障害当事者に共通するのは「自分らしく、自立した生活を送るうえでの就労を望んでいる」こと。保護者に共通する究極の悩みは「自分たちが死んだあと、障害のある子どもたちはどうなるのか」という不安。

障害者の自立と、保護者の不安、どちらも考慮している理想的な事業者の共通点は

- ① 障害者の時給確保のための努力を続けている
- ② 障害者に関わる問題をビジネスで解決しようとしている
- ③ 障害者の次のステップを常に考えている
- ④ 農と福が 1 対 1 の関係でなく、それぞれ複数の主体と契約して農福を実施している
- ⑤ ノウハウの普及に積極的(栽培、飼養、営業、ケアの方法など)
- ⑥ 農福と生活の場との連携を考えている

農福連携は、初期は農業側、障害者側の"二方良し"を目指し、徐々にステップアップし、最終的には、農業・福祉側の利益、障害当事者の自立、保護者の安心という"四方良し"を目指すものであって欲しい。

【福祉団体による取組】

社会福祉法人ハイジ福祉会（福岡県八女市）施設長 山口隆充氏

「フラワーパッケージセンターの地域に密着した農福連携の取組」

障害者が作業するときに配慮すべき点は、まず、視覚的なわかりやすさ。次に、障害の種別だけでなく、性格も加味した作業の割当。同じ病名でも、どんな作業が向いているかは性格によって異なる。最後に、作業内容の多様性を確保すること。

農業が盛んな福岡県八女市で農福連携を始めるにあたっては、JA の組合員である恩恵は大きかった。福祉側で農福連携を始める場合、生産・販売ルート・資材の確保など、広範かつ困難な課題に数多く直面する。しかし、JA から様々な支援を受けたことで、農業に関わるあらゆる問題を「一発で解決」できた。JA の組合員という立場や B 型事業所で障害者を見てきた経験から「きちんと支援すれば十分に能力を発揮してもらえる」という確信があったうえでマッチングをしたことが成功につながった。

最初は周囲に理解されなかった。当時の上司にフラワーパッケージセンターでの障害者雇用を持ちかけると「仕事が終わらないのでは駄目だ」と障害者の職務遂行能力を疑われ、自主農業に参入した時は農家に「本当にできるのか」と疑われた。しかし、トマトの坪収量は部会で一位になり、ガーベラで 1200 本以上の坪収量を達成するなど、少しずつ実績を積み重ねて信頼を獲得した。

農家と仕事をするうえでいちばん大事なのは、信頼を得ること。

【農業者による取組】

株式会社耕野（岩手県花巻市）代表取締役 安藤誠二氏

「農業が果たす地域福祉への関わり方」

岩手県花巻市で、露地部門（水稲約 25ha、キャベツ（加工メイン）、スイートコーン約 10ha、農作業受託）と施設部門（軟弱野菜中心）を運営している。

農福連携の切っ掛けはコーディネーターからの紹介で、障害特性のレクチャーをスタッフと共有して取り組み始めた。外注の形でスタートしたが、思った以上に作業精度が高かった。最初は、精度が高くない収穫後の残渣処理をお願いしたが、現在では、定植パネルの洗浄、種まき、機械作業、収穫等にも関わっている。

機械化できない作業に農福連携の可能性がある。ただ、冬場の作業減少が難点ではある。

作業指導においては、利用者への図解やわかりやすいマニュアル作成を行っており、事業所の職員と相談しながら各々の得意な作業を割り振るようにしている。

リスク評価（JGAP）は、農福において重要なものだと感じている。GAP によって職員、福祉事業所に作業を伝えやすくなり、統一したルールを示すのにも有効であった。

障害者も高齢者も一緒に関わる形を作っていくことの一つに農福連携があると思っており、農業に加え、工業や商業等の多くの分野が福祉と関わる環境になることが理想である。

<p>【企業による取組】 はーとふる川内株式会社（徳島県板野郡北島町）代表取締役社長 山田圭吾氏 『『ありがとう』の気持ちを込めて ～私たちの農福連携～』</p>
<p>当社は大塚製薬の抗精神病薬による治療で良くなった精神障害者を雇用してほしいという要望を受けて作られた特例子会社。2023年6月1日時点の障害者雇用数は48名。アグリビジネス事業で、精神障害者3名、知的障害者5名の社員が働いており、年間約60tのミディトマトを通年栽培している。</p> <p>とくしま「安2GAP」取得により、安全安心な農作物を生産・供給するとともに、従業員の安全や環境への配慮も行っている他、ノウフクJAS認証取得により、販路開拓や農福連携の顧客へのアピールを行っている。近隣の障害者支援センターにドライトマトの加工・袋詰めを行ってもらおう等、6次産業化も進めており、マルシェや座談会、展示会等への参加による販路開拓の推進も行なっている。</p> <p>障害者と共に働くうえで、個々の記憶力に応じた伝え方、理解度に合わせた指示、無理をしていないかの把握、根気強いコミュニケーションで障害者が各々目標を持って取り組める環境をつくり、障害者同士が助け合うピアサポートの文化も根付いている。</p>
<p>【農林水産省からの情報提供】 農林水産省農村振興局都市農村交流課農福連携推進室推進班 調査員 福田修治氏</p>
<p>農福連携等推進ビジョンでは、農福連携に取り組む主体を令和元年から5年間、令和6年までに新たに3,000創出するとしており、直近の令和4年度末では2,226増加している。</p> <p>同ビジョンに基づき、農福連携を推進するために認知度の向上、取組の促進、取組の輪の拡大に向けて関係団体や関係省庁と連携して取り組んでいる。</p> <p>①認知度の向上としては、ノウフクWEBによる情報発信、ノウフクJASをはじめとするノウフク商品の消費者向けキャンペーンやメディアを活用した戦略的プロモーションの実施。</p> <p>②取組の促進としては、農業者、障害福祉サービス事業所の支援員、障害者本人の3者に対し、農福連携の現場で実践する手法をアドバイスする専門人材の育成(農福連携技術支援者)。また、農山漁村振興交付金(農福連携型)による農福連携に取り組む環境整備・経営発展の支援実施。</p> <p>③取組の輪の拡大としては、各界の様々な関係者が参加するコンソーシアムを設置。コンソーシアムの活動の1つにノウフク・アワードがあり、全国で農福連携に取り組む団体・企業や個人を募集し、優れた取組を表彰。農福連携の全国的な横展開につなげることを目的として令和2年度より開催。</p>
<p>ワーク 「夏場の作業の安全配慮について」 他</p>
<p>山口：夏場は極力ハウスに入らず、クーラーがきいている涼しい場所の作業をつくる。</p> <p>安藤：鉄骨ハウスや循環扇、メッシュカーテンを使用し、ファンベストや帽子の着用等、様々な工夫をしている。</p> <p>山田：WBGTという計測機から観測した暑さ指数を元に休憩、水分補給を行い、熱中対策ウォッチで深部体温計測を行い、アラームによって体調不良になる前に休憩をとる等、様々な機器を用いている。</p> <p>参加者：農業に携わることによる障害者への好影響について知りたい。</p> <p>義平：運動不足の解消の他、認知力の向上等に効果があることが、脳科学等の観点から示されている。</p> <p>山口：他者と狭い室内で過ごすのではなく、広い農地で1人で作業する環境があることで皆安定的に作業しており、メリットがあると考える。</p> <p>安藤：対面かつ近距離で同じメンバーと長時間関わる環境でない点が心地よく、仕事をしやすいと感じる。</p> <p>山田：自社には農園への異動を希望してきた精神障害者もあり、異動前と見違えるように一所懸命働いている。商品が店に並ぶ様子を見た時などに本人が社会貢献を実感できる。</p> <p>参加者：採算を考えるうえで、農業経験がないため、作物をどのように選定しているか知りたい。</p> <p>山口：ガーベラは、元JAの花の指導員だったことや周年栽培かつ産地の強みである品目なうえ、年中花が咲き仕事が途切れないことから選んだ。ミディトマトは、農協の部会に入るために安定して販売できる品目を作りたいと思い選んだ。農業には難しい部分が多いため、自分の地域に合う農作物を考え、それに合った土地を探すことを心がけてほしい。</p>

実施後アンケート（WEBセミナー②）

第2回農福連携WEBセミナー実施後アンケート回答者の所在地（回答79人）



職種（回答76人）



農福連携の取組状況（回答75人）



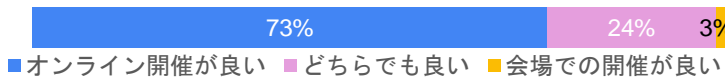
セミナーの時間（回答78人）



セミナー内容の満足度（回答79人）



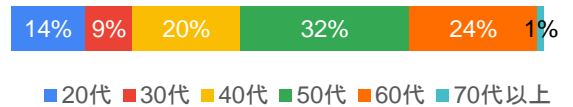
開催方法について（回答79人）



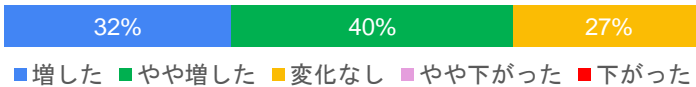
性別（回答79人）



年齢（回答79人）



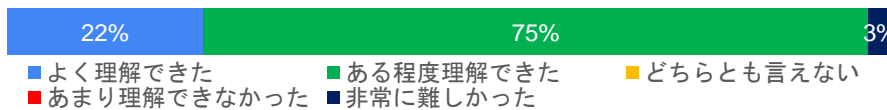
取組意欲（回答77人）



第1回目の農福連携セミナーにご参加されましたか。（回答80人）



はじめての参加で理解度は？（回答36人）



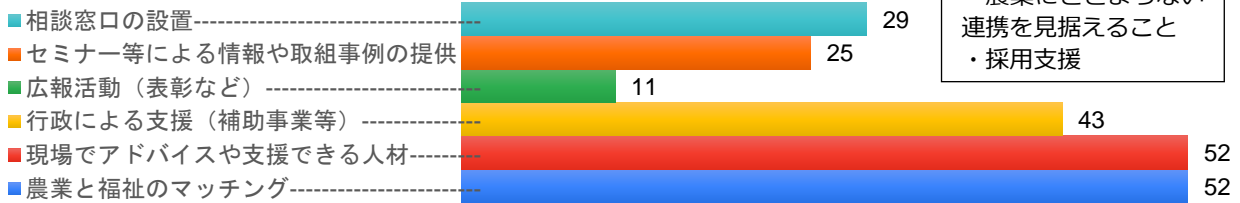
2回目の参加で1回目より理解度は？（回答43人）



**その他の必要なこと
(自由記述)**

- ・農業にとどまらない連携を見据えること
- ・採用支援

農福連携に取り組むのに必要なこと (回答77人、複数選択)



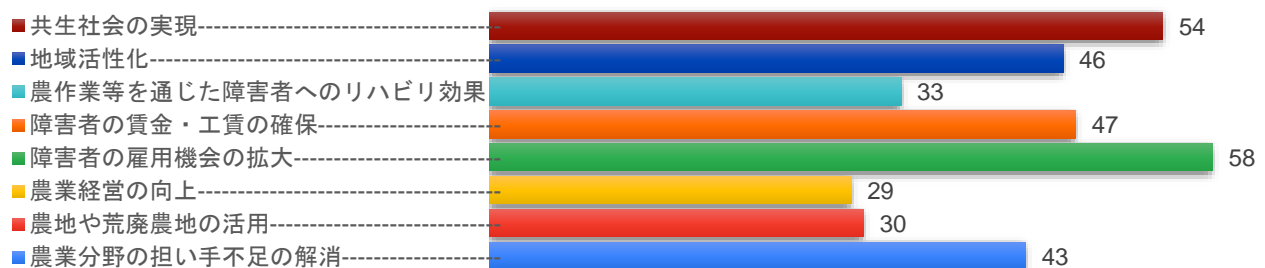
農福連携に取り組むに当たって、主な課題 (回答75人複数選択)



その他の課題 (自由記述)

- ・スタッフの不足
- ・それぞれのマッチング。双方の人手不足 (支援者含め)
- ・依頼したい作業をどのように教えるか悩んでいる方が多い
- ・移動時間が長いことによる利用者の集中力の低下
- ・課題の把握に努めている最中です。
- ・具体的な取り組みに際して臨んだのではなく、農福連携の実際を知るために参加した。
- ・仕事の通年化
- ・車いす利用者の活躍
- ・受け入れてくださる農家さんを見つけることが難しい。
- ・収益を上げるとなると難しそう
- ・設備投資の助成
- ・相談先、農福連携を行う都道府県の選定、事業内容、専門人材の確保、採算 等
- ・知識がほとんどないこと
- ・農業の担い手が不足しているところは、人口が減少しており障害者も少ない
- ・農福連携してくださる農家の開拓

農福連携に期待すること (回答77人、複数回答)



その他の期待すること (自由記述)

- ・隔たりのない社会にしていく気持ち
- ・弱小な事業にも行き渡る (設備投資などの) 助成
- ・障害者の特性など理解してもらえる場所づくり
- ・地域貢献
- ・農福連携に取り組む予定はないが、SDG s 推進の一環で、社員食堂における社員の健康管理とフード・ロスや障害者雇用支援が両立できるような取り組みを行いたいと考えており、今回のセミナーに参加した

交付金の活用を
知りたいあなたへ。

参加
募集中

農福連携

オンライン開催
参加費
無料

交付金活用セミナー

2024 2月2日(金)

13:30~15:30 ※13:00~ 受付開始

120分で
わかる!

農山漁村振興交付金 農山漁村イノベーション対策 (農福連携型)とは?

農福連携の一層の推進に向け、障害者等の農林水産業に関する技術習得、農業体験を提供するユニバーサル農園の開設、作業に携わる生産・加工・販売施設の整備等を支援します。

受講対象

- 農山漁村振興交付金 農山漁村イノベーション対策(農福連携型)に興味ある方全般
- 農福連携に係る障害者施設の開設を検討されている方

開催方法 オンライン

zoomURLをお申込後にご連絡申し上げます。
*リアルタイム視聴が難しい場合も、お申込者へは後日アーカイブURLをお送りします。

応募締切 2024年1月31日(水)

お問い合わせ

noufuku@notosoken.jp

お申込はこちらから ▶



講演内容

農山漁村振興交付金 農山漁村イノベーション対策(農福連携型)に関心ある方へ向け、過去に採択された農業者・福祉団体の事業者による事例発表と、農林水産省による概要説明を行います。また、厚生労働省による農福連携に関する事業の情報提供を行います。

01 農業者による事例

「作業効率向上と就労者の自信創出及び収益拡大を実現」

株式会社希望ファーム 代表取締役

白石 拓麻氏

農山漁村振興交付金を活用し、ピーマン栽培における農作業等の作業効率を向上し、就労者の技術習得と自信の創出を実現。販路拡大と通年業務による収益拡大にも取り組んでいます。



02 福祉団体による事例

「ジェラート加工販売等の6次産業化と農業法人設立を実現」

株式会社リーフエッジ 代表取締役社長

田中 基次氏

農山漁村振興交付金を活用し、労働対価として得た果物をジェラートに加工・販売という6次産業化を実現。就労希望者の雇用のために農業法人を設立し、昨今ではアグリツーリズムにも取り組んでいます。



03 農林水産省からの概要説明について

04 厚生労働省からの農福連携に係る支援について

*セミナー内容は予告なく変更する場合がございます。



厚生労働省小松係長

農林水産省青木係員

白石氏



田中氏

交付金活用セミナー

開催日時：2024年2月2日（火）13:00～16:00

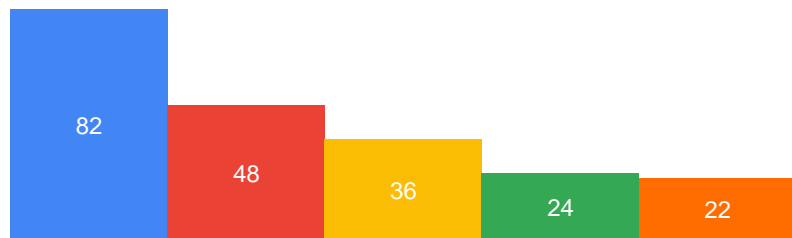
開催方法：オンライン

申込数：213件

参加者数：158人

申込アンケート

申込者の職業（回答212人）



■福祉事業者 ■公務員 ■一般企業（特例子会社を含む） ■農業事業者 ■その他

【その他の職業】団体職員4名、行政書士2名、以下各1名、JA、コーディネーター、医療従事者、一般企業（特例子会社を含む）、園芸療法士、会社員、共同受注窓口、教員、金融業、兼業農家、障害者就労支援中間団体、政策金融機関、専業主婦、中間支援団体、中小企業診断士、農業コンサルタント

「農福連携」の取り組み状況（回答211人）



■既に取り組んでいる ■将来的に取り組む ■今すぐ取り組みたい ■分からない ■取り組む予定はない

登壇者発言の要点

アーカイブ動画 https://youtu.be/lxd_wawMfgM?si=-K8JW92BbIsFb4pt

【農業者による事例】

株式会社希望ファーム（福島県郡山市田村町）代表取締役 白石拓麻氏

「作業効率向上と就労者の自信創出及び収益拡大を実現～郡山市農福連携活動と交付金の活用～」

2016年に会社を設立。レタス8ha、きゅうり40a、ネギ2ha。2019年に「郡山市農福連携推進モデル構築事業」に参加。レタスの規模拡大のために農福連携を始めたが、レタス栽培は繊細で向いていなかった。2020年以降は、春菊・ピーマン・スナップエンドウ栽培の通年を通じた農福連携に取り組んでいる。参加事業所は11。

施設外就労にきてもらう職員の理解と協力、情報共有が重要。各福祉事業所の特性を踏まえ、障害の程度を見ながらの役割分担、事業所ごとに難易度のあった割り振りを行っている。福祉事業所は土日祝日が休みであるためシニアボランティアも活用している。収穫ピーク時の作業も補ってもらっている。

農山漁村振興交付金は、2020年に作業環境改善のために活用した。休憩所の設置、駐車場の整備、農業作業具の購入、農業就労サポーターの育成を行った。農業就労サポーターは農業者と福祉事業所の架け橋となり、作業の指示や作業の確認、管理、事業所同士の作業の引き継ぎなど、農業者だけでは手が回らないところをサポートする重要な役割がある。

参加事業所からは「3年目で利用者の習熟度が上がり、生産性が向上した。」「利用者が作業を楽しみにし、生活リズムの改善につながった。」「利用者の就労に対する意識の向上が見られた。」「トイレや暑さ対策に悩まされている。」といった声がある。

【福祉団体による事例】

株式会社リーフエッチ（鹿児島県大島郡龍郷町）（ノウフク・アワード2021 優秀賞）

代表取締役社長 田中基次氏「ジェラート加工販売等の6次産業化と農業法人設立を実現」

大学農学部を卒業後、シーカヤックのガイド業、作業療法士を経て、40歳になったのを契機に奄美大島に移住した。奄美大島の主要産業は医療介護福祉で、農業人口は約2%、うち75%は60歳以上で高齢化が進んでいる。

福祉部門として株式会社リーフエッチ、農業部門として株式会社あまみめぐりを運営している。あまみんを起業して現在8年目。あまみんは就労継続支援B型で定員20名。相談支援事業所を併設している。農作業に関わる利用者は4分の1程度なので、作業マッチングのために食品加工に参入した。外作業チームが近隣農家の手伝いやハーブ自家栽培を行い、労働対価でいただいたフルーツや育てたハーブを室中仕事チームがジェラートやハーブティアーに加工し販売している。『ジェラート製造室が狭くて怖い』という声が利用者から上がったため、農山漁村振興交付金を活用し増築した。増築後、コロナ禍でいきなり売れなくなったが、交付金やコロナ対策の補助金・助成金で問題を解消できた。コロナ明け以後は、ある程度の売上を上げている。

補助金・助成金の獲得に必要なのは、自分たちの目標を明確にしていることと、出資側が求めていることとのマッチング。どのような補助金・助成金がどのような対象に向けて出されているのかを知っておくこと、自分たちの計画を部外の人にも見てもらい意見をもらうことが重要。事業計画を考えると、持続可能な産業として自然にも人にも優しい産業になりたい、ということに重きを置いている。これは大きなデザインだが、これを具体的に切り分けていき、事業計画を複数用意して、タイミングの良いものから実行している。

【農林水産省からの概要説明】

農林水産省農村振興局農村政策部都市農村交流課農福連携推進室 推進係 青木陸氏

令和6年度農山漁村振興交付金のうち、農山漁村発イノベーション対策（農福連携型）について。

本事業は大きく分けて2つの事業に分かれており、農山漁村発イノベーション推進事業がソフト事業、農山漁村発イノベーション整備事業がハード事業となっている。原則、ソフト事業とハード事業は併せて行うが、既に関連事業の作業に携わるための場が確保されている場合などに限り、ソフト事業単独での実施も可能。個人への助成は行っていないので、ご留意願いたい。本事業は全体として3年間の事業計画となっており、交付金の対象となるのは最初の2年間であり、3年目は自己資金での取り組みとなる。ソフト事業は定額補助となっており、原則、年間で150万円が上限。ハード事業のメニューのうち、経営支援と組み合わせる場合は、300万円まで高上げ可能。また、分業体制の構築や作業マニュアルの作成を行う場合は、1年目のみ上限額に40万円の加算が可能。ハード事業は、簡易整備、介護・機能維持、高度経営、経営支援の4つのメニューに分類される。介護・機能維持は、要介護認定を受けた65歳以上の高齢者が対象となっており、助成の対象、交付率及び助成額については簡易整備と同様。

例年通りであれば2～3月頃にかけて公募を行い、交付金候補者を選定する。交付金候補者としてされた場合は、その後に計画書及び交付申請書の提出などを経て交付決定通知が発出される。この、交付決定通知があるまでは事業に着手出来ないのご留意願いたい。なお、計画承認後に交付決定前着手届を提出することで、早期の事業の着手が可能。

【厚生労働省からの農福連携に係る支援】

厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課就労支援係 係長 小松伸章氏

厚生労働省では障害者支援、高齢者支援、生活困窮者支援等、多岐に渡る農福連携関連の事業を行っている。

農福連携等による障害者の就労促進プロジェクトとして、都道府県に対する補助事業を行い、工賃水準の向上や農業の支え手の拡大を図っている。農業の専門家を派遣し、農業技術に係る指導や助言、六次産業化に向けた支援、農福連携マルシェやセミナーの開催、農業等に取り組み障害者就労施設の好事例の収集、農業生産者と障害者就労施設に対する施設外就労を支援など、令和6年度は2.1億円の予算を見込んでいる。

農福連携プラス推進モデル事業として、意欲的な障害者就労支援施設に対し、マッチングや立ち上げ支援を一括的に支援し、効果検証を含む事例報告までを一気通貫にしたモデル事業を行い、事例の全国展開で農福連携の取組を推進している。就労継続支援A型事業所の全国平均工賃は月額約8万円のところ、農福連携に取り組むことで10万円を超える事業所や、B型でも平均工賃が月額1万5千円のところ、2万円を超える工賃を実現している事業所も多々ある。

農業現場では様々な種類の作物が生産され、それぞれ多岐にわたる作業が必要となることから、生活困窮者支援や高齢者支援、雇用分野においてもそれぞれの特性に応じた農福連携を推進している。

<質疑>

（質問）プラス推進モデル事業はどのような機器導入に関する支援か。

（小松）機器に関しての制限は設けていない。都道府県への申請を出す際に、事業計画で農福連携に係るところでどういった費用が必要なのかを記載して提出する。農福連携だけでなく、プラス推進モデル事業と銘打っているので、農福連携プラス例えば観光業を導入するにあたっての費用、商工業でしたら商工業に関する費用が必要であることを事業計画書に記載して提出していただければ大丈夫。

実施後アンケート（交付金活用 WEB セミナー）

アンケート回答者の所在地



職種（回答50人）



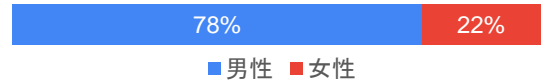
農福連携の取組状況（回答48人）



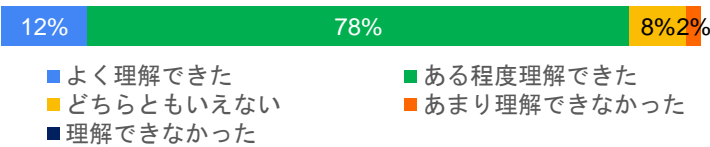
セミナー時間の長さ（回答49人）



性別（回答49人）



セミナー理解度（回答49人）



年齢（回答50人）



セミナー満足度（回答50人）



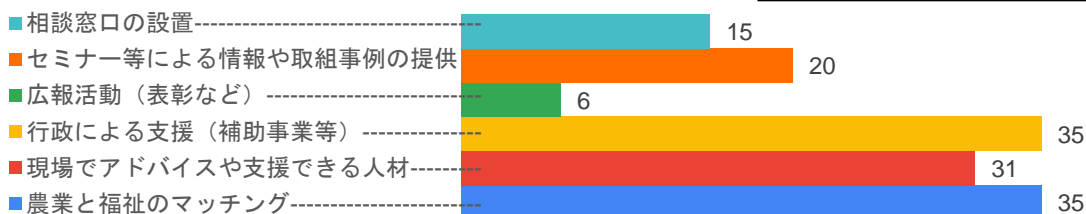
セミナー開催方法の希望（回答50人）



取組意欲（回答者50人）



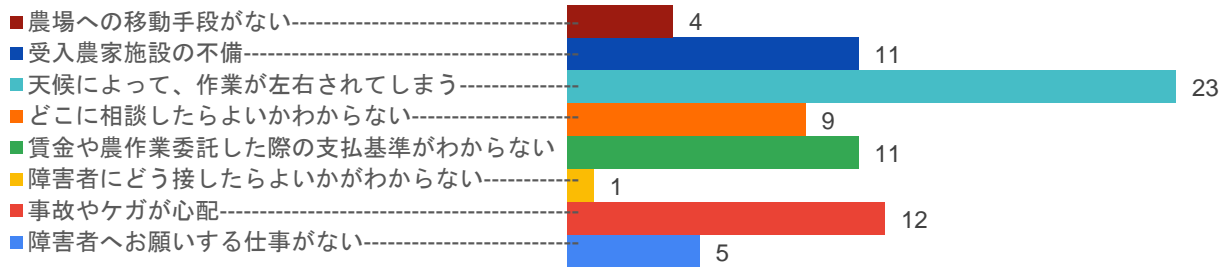
農福連携に取り組むのに必要なこと（回答50人、複数選択）



その他の必要なこと（自由記述）

- ・国産野菜の店頭販売価格の底上げ
- ・障害者の特性を理解した上での作業の標準化を進める必要があると思います。
- ・地方自治体の地方創生の一環とすべきと思う。
- ・賃金アップのための助成の増加
- ・認定農家制度など、農業に参入する際の事務手続きの簡素化・迅速化
- ・農福連携コンサルタント（地域支援員より都道府県や事務局指定の人材を望む）
- ・販路拡大
- ・両親が高齢で農家をしているので上手くマッチング出来れば農業を続けていけるのではないかと考えています。農業は近郊農家や特殊な商品や販売ルートがなければ収入が少なく年金も少ないので生活するのが精一杯です。体は老いて作業が出来にくくなってても人を雇い入れることが難しいので雇い入れる農家側にも補助があれば有り難いです。

農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答44人、複数選択）



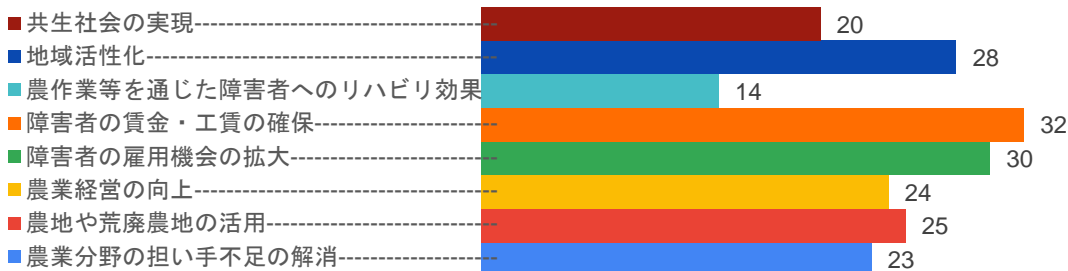
その他の課題（自由記述）

- ・利用者さんの確保
- ・地方自治体が関与すべきと考える。
- ・地域的に移動距離が長くなってしまふ。
- ・収益の確保
- ・トイレ
- ・サポート役の方がいなければ 難しいと思う。
- ・その他の課題をお聞かせください。
- ・夏場の暑さ対策
- ・施設ハウスの有機栽培技術を有しているの、学校給食食材の栽培に、地域の農業専門家の下雇用が見込めると感じた。
- ・周年雇用のための野菜作り
- ・出勤が不安定な方が多く、当日の労働力が読めない
- ・新規事業を設計中のため、設立好事例を知りたい
- ・設備関係（トイレ、休憩所、作業場）
- ・地元農家とマッチング、個人農家が多く賃金を支払ってまで雇用は難しいのではないか
- ・投資額と収益が釣り合わない
- ・農業に取り組む事が出来る利用者の確保
- ・本日のお話しにもあったが、暑さ対策
- ・露地栽培の農業に関わる場合、炎天下での暑さ問題

その他の交付金に期待すること（自由記述）

- ・近年、自走型農業機械（トラクターなど）の価格高騰がある。交付金に「自走型機械を省く」ものが多いように思うが、農業の収支は収穫量に左右される。「農地拡大が必要→大型機械が必要」は避けて通れない。その点の交付金拡充が必要です。
- ・障害者の親族、支援者として「安全な農業」機械操作だけではなく環境への配慮が重要。環境とは「農薬使用による散布者への弊害」もそれに当たる。農福連携交付金が「有機農業、農薬不使用の農業方法」を審査や交付率にも影響がある形にすべきではないか。地球にも人類にも優しい農業が未来の農が存在するかどうかのキーと思えるし、関わる障害者の方々やご家族が安心して預けられる農の現場が尊重されると良い。
- ・スタートアップ
- ・その他、交付金に期待することをお聞かせください。
- ・一農家でも、使えるようになるとありがたいです。
- ・交付金仕組みを理解することが重要。まだよくわかっていない。
- ・今のカタチですばらしいと思います。額がもう少し上澄みされると新たな展開が出来そうです。
- ・事業所の負担が減るので取り組みやすい。
- ・障害者の安全性を加味し、機械等の導入を交付金でしていきたい。
- ・生産物と6次産業化のためにも交付金を活用したいです。
- ・農業には、障害者を受け入れる許容力がある。もっと、補助金を充当して活性化してほしい。

農福連携交付金に期待すること（回答50人、複数選択）



感想や意見の抜粋

- ・リーフエッチの田中社長はコンサルタント的な発想で素晴らしいと思いました。
- ・既に取り組んでいる経験が聞けたので良かった、奄美大島のお話でもありますが都道府県によって差があるのは取り組みづらと思う。あと、事業所の負担がもう少し少ない方が良い。出来れば。
- ・交付金の活用した実践事例の具体的紹介があつてわかりやすかった
- ・実際に携わって居る方達のお話が聞けて、それぞれの取り組み方の考え方が理解出来て良かったです
- ・多くの参加者さんがいて、関心の高い分野であることがわかりました。ありがとうございました。
- ・本日は交付金を使った実践者の方々からの実例報告と農水省、厚労省のご担当者からの交付金に関するご説明と一緒に聴かせて頂く貴重な機会をありがとうございました。事前にダウンロードできるような資料があれば、より理解しやすかったのではないかと感じました。

農福連携 マルシェ in 北海道

～農福連携魅力物語～

北海道農福連携の魅力を満載！農業と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味い加工品が北海道各地から大集合！9月8日10時より、「チ・カ・ホ」北大通交差点広場(東)にてマルシェを開催します!!! 皆様のご来場を心よりお待ちしております。

場所▶ 札幌駅前通地下広場「チ・カ・ホ」北大通交差点広場(東)
〒060-0042北海道札幌市中央区大通西3

2023 9/8 (金) 10:00～17:00

参加費 無料

※新産物により変更になる場合がございます。

参加事業者と商品(予定)

- 1 共働学舎 新得農場 (新得町) チーズ名産、ホエイシウム、手作りパンケーキ、とうもろこしなど
- 2 NPO法人 サトニクラス (月形町) 手造り味噌・手造り米酒・手造り漬物・手造りピクルスなど
- 3 札幌刑務所 (札幌市) じゃがいも・玉ねぎ・とうもろこし、等々
- 4 社会福祉法人 北海道光生会 (美幌市) 道産米・米粉サンギ など
- 5 社会福祉法人 新冠ほくと園 (新冠町) ※商品検討中 おたのしみに!
- 6 株式会社 エムリンク夢ア 就労支援事業所 リアびあーの (札幌市) こぼり茶、相模コーヒーズ、じゃがいも、玉ねぎ、ミニトマト など
- 7 合同会社 カレイドスコープ (札幌市、安平町、新穂津村) 季節の野菜・ミニ野菜・生かざりけ など
- 8 社会福祉法人 空知の風 (岩見沢市) パン(コーンパン他)・食パン・パンケーキ など
- 9 多機能型事業所び〜か〜ぶ〜WORKS (就労A型・就労B型) (札幌市) キウイモチップス、ペト用ミニトマトチップス、じゃがいも(北あかり) など

※出店者の魅力ある取組の詳細は右のQRコードからご覧ください。

※マルシェの内容は、予告なく変更する場合がございます。

主催：株式会社農都共生総合研究所

農福連携フォーラム in 北海道

農福連携の魅力とは？

障害者の就労の場の出先だけでなく、農業従事者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農業の維持・活性化等が期待でき、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを見せています。

農福連携の現場には、いきいきと農業に取り組みむ人々や、人と人とのつながり、そして丹精込めて育てられた農産物やそれらの付加価値を高める加工品など、多彩な魅力がふたれています。この機会には、北海道の地域資源を活用した農福連携のさまざまな取組について学んでみませんか。

2023 9/8 (金) 13:00～16:00

参加費 無料

農福連携フォーラム

開催形式

ハイブリッド開催 (現地 + オンライン参加)

現地▶ アステ45ビル
北海道札幌市中央区北4条西5丁目1

フォーラム内容

ノフクアワードに受賞・登壇された方を中心に講演とパネルディスカッションを行います。

講演

[テーマ] 地域・未来を耕す。北海道畜産の6次産業化×農福連携

2022ノフクアワードグランプリ

農都共生総合研究所 代表 宮崎 望 氏

■ パネルディスカッション

[テーマ] 北海道の地域資源とつながりを活かした農福連携

2022ノフクアワード チャンレンジ賞

NPO法人 サトニクラス 代表理事 橋 暉一 氏

社会福祉法人 ゆうゆう 農林福祉担当 錦織 卓也 氏

株式会社 九神ファームめむろ 取締役 エビコタツシ株式会社 代表取締役社長 且田 久美 氏

(コーディネーター) 名寄市立大 小泉 隆文 講師

■ 法務部からの情報共有

コレアノ北海道長 高橋昌博 氏

「出所者の雇用について～北海道における取組を中心に～」

※フォーラムの内容は、予告なく変更する場合がございます。

農福連携マルシェも同時開催!

札幌駅前通地下広場「チ・カ・ホ」北大通交差点広場(東)
〒060-0042北海道札幌市中央区大通西3
10時～17時まで開催しています!(裏面参照!)

※写真はイメージです。

お問い合わせ

株式会社農都共生総合研究所
noufuku@notosoken.jp

お申込はこちら▶

主催：株式会社農都共生総合研究所

農福連携 魅力物語 MAP in 北海道

「農福連携フォーラム&マルシェin北海道」では、魅力ある様々な取組が大集合! 北海道のさまざまな地域で、農業を通じて障害者などが働く場所や居場所をつくっている取組をご紹介します。

農福連携の魅力ある取組の詳細は右のQRコードからご覧ください。

共働学舎 新得農場

所在地：上川郡新得町

農福連携フォーラム講演者 農福連携マルシェ

就労に困難を抱える人々を受け入れ、一緒に活躍している「アステ45ビル」の専科併存として、ノフクアワード2022でグランプリを受賞。畜産、野菜を主として、チーズ等の加工や6次産業化にも取り組み、カフェを運営しており、チーズでは、国際的な賞も受賞している。

ホームページ

NPO法人 サトニクラス

所在地：樺戸郡月形町

農福連携フォーラムパネリスト 農福連携マルシェ

障害特性に応じてチームを編成し、野菜生産から漬物製造・販売までを一貫して行うことで、安定した連年作業を実現。漬物原料用野菜の自家栽培や漬物等の製造、直売所の運営のほか、冬場の障害作業の受託を行うなど、障害者の働く場の創出に加えて、地域を支える存在としての役割も果たしている。

ホームページ

社会福祉法人 ゆうゆう

所在地：石狩郡当別町

農福連携フォーラムパネリスト

障害者や認知症高齢者等、誰もが働きやすい環境としてのレストランや、「農業×福祉」「アート×学校」を軸に、成人期の障害者における生活・余暇・就労活動のサポートを行う生活介護事業所の運営など、様々なプロジェクトに取り組んでいる。

ホームページ

合同会社 カレイドスコープ

所在地：札幌市北区

農福連携マルシェ

人手の足りない農家と人はいらない仕事がない福祉事業所とが、農福連携コーディネーターのもと連携を行い、年間を通じて直産でキクラゲ等を栽培し、販売・加工も行っている。

ホームページ

札幌刑務所

所在地：札幌市東区

農福連携マルシェ

農外作業として、農業活動を行う。高齢者・玉ねぎ・さつまいも・枝豆・落花生・スイートコーン・枝豆等を栽培している。

ホームページ

多機能型事業所び〜か〜ぶ〜WORKS (就労A型・就労B型)

所在地：札幌市

農福連携マルシェ

同事業所は長沼町に3反ほどの自社農場を設けており、事業所内には加工工場を設けている。生菜・加工・漬物(6次産業)を全て自社で行い、様々なイベントや商品の販、スーパーなどで販売。11月には子どもも参加がオープン予定。

ホームページ

株式会社 エムリンク夢ア 就労支援事業所リアびあーの

所在地：北見市

農福連携マルシェ

全ての人ができるからできるある暮らしが望めるようサポートを行なう。手作りじゃが茶を製造している他、焙煎コーヒー豆の製造、じゃがいも・玉ねぎ・ミニトマト等の栽培、カフェでの接客業務等、幅広く行っている。

ホームページ

株式会社 九神ファームめむろ

所在地：河西郡芽室町

農福連携フォーラムパネリスト

ジャガイモ、カボチャ、小豆の栽培や、ジャガイモの皮むき、カット、真空パック包装などの1次処理加工を行っている。生産・加工した農産物を自営企業が100%購入・展開することで、収益の安定化や障がい者の安定的かつ継続的な雇用や企業価値の向上を実現。

ホームページ

社会福祉法人 空知の風

所在地：岩見沢市

農福連携マルシェ

知的障がいのある方達の地域生活支援・就労支援を通じて、利用者達の自己実現を目指す社会福祉法人/パン製造、菓子製造、養蜂活動、創作活動等を行っている。

ホームページ

社会福祉法人 新冠ほくと園

所在地：新冠郡新冠町

農福連携マルシェ

知的障害者の方を対象とした日中活動支援や就労活動支援、利用者の一人ひとりにあった暮らし支援、社会生活支援(健康・福祉)への支援を行う。お菓子・パンの製造から販売や、市内の企業への資材提供などを行い、地域で生活するための訓練や生活体験に尽力。

ホームページ

社会福祉法人 北海道光生会

所在地：美幌市

農福連携マルシェ

1964年開設の知的障害児施設「美幌学園」を前身に、設立以来、主に知的障害のある方達の社会生活の支援を行う。障害のある方達の「住」「働」「楽しむ」をのび、後にならぬ自立を支援し、地域社会との理解と交流を進めている。

ホームページ

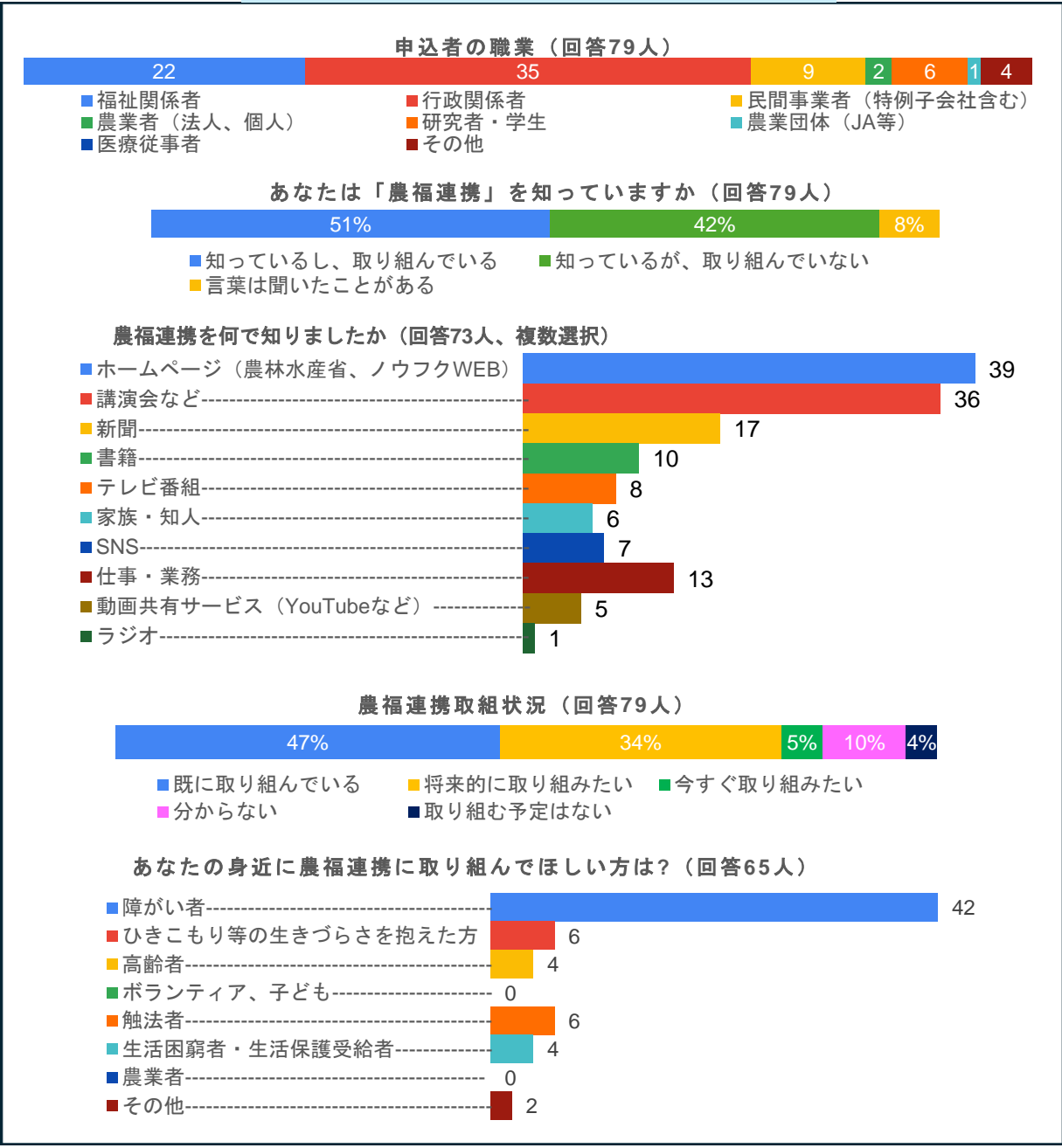
※農福連携マルシェ出店者は予告なく変更する場合がございますのでご了承ください。



左から、川辺（農都）、小泉氏、小泉氏、目田氏、錦織氏、楠氏、宮嶋氏

農福連携フォーラム in 北海道

【会場】ASTY45 中研修室 1206
 (札幌市中央区北4条西5丁目アスティ 45 12F)
 【日時】2023/9/8(金)13:00~16:00
 【申込】現地：17人 オンライン：62人
 【当日】オンライン：54人



**【講演】「人・地域・未来を耕す、北海道畜産による6次産業化×農福連携」
～「自労自活」による共同生活で酪農・チーズ生産等を営む～**

農事組合法人共働学舎新得農場（北海道新得町）（ノウフク・アワード 2022 グランプリ）代表 宮嶋望氏

父が共働学舎を始めた。父の構想は、バラバラに障害の違った人が、混ざり合いながら協力しあう。行政には、同じ種類の障害の方を集めてそれを管理する人が必要だと言われた。集まってきたのは、社会適応の難しかった様々な困難を背負った人々。いろんなマイナス面で名付けられてしまうけれど、そのような人々を社会の側が受け入れられるように変化しなければならない。それらの人々は「社会が解決できない課題」を教えてくれるメッセンジャーでもある。

農場は約108ha。約60人で、酪農、チーズ生産、有機野菜生産、工芸などを行っている。チーズの品質は世界レベル。障害者の方々を活かそうと手作りで作ったことが、世界の品質に届いた。生きている人間が作る方が機械で作るより美味しい。それが品質ならば、大量生産で質を落とすよりも、人の手で作るものの方が質の高い。ワインもチーズも評価されることで経済価値が大きく変わる。できるだけ自然の法則に沿ったやり方で行う。それは、そこで働く人々や作物を活性化させ、農福連携をやりやすくさせる。

共働学舎新得農場でやってきたことは、原材料から最終商品づくりまでを出来るだけ機械を使わず、手作りで「生きるエネルギー」を維持し食卓まで届けることである。共働学舎の人々は半分以上悩みを持っている人々だが、やれることはある。ものづくりに携わったことで、自分たちが作ったものが売れる。それで生活ができる。「自労自活」自分たちで労働し、自分達で生活している。

【パネルディスカッション】「北海道の地域資源とつながりを活かした農福連携」

NPO 法人サトニクラス（北海道樺戸郡月形町）（ノウフク・アワード 2022 チャレンジ賞）

代表理事 楠順一氏 「つながりを活かした農福連携で地域の未来をつくる」

取り組みの原点は地域の将来への危機感。娘の通う小学校の閉校などをきっかけに、少子高齢化が急速に進む地域の将来への危機感を覚える。農業・福祉・地域を未来に繋げるために、「持続可能性」をテーマに、地域に受け継がれてきた知恵と技に学ぶ。価値を生む手仕事、地域の気候条件や素材を利用し、愛情をこめて作ること。発酵（地域にある素材を活かす）、保存（雪、低温、乾燥、塩を利用した知恵）、教育（家庭の仕事が次世代を育てた）。手仕事は直立二足歩行である人間の活動の基本。手仕事が生活のなかで失われつつあることが、病んだ社会の背景にあるのではないかと考える。その手仕事を取り戻す活動を行ってほしいと思っている。

社会福祉法人ゆうゆう（石狩郡当別町）農林福連携担当 錦織卓也氏

農福連携を始めたのは10年以上前。重度の障害のある方が多く、農家のニーズと利用者のペースが合わないことが多かった。そのため、四年前から自社で農業をやっている。地域では、美味しいお米が取れるが担い手が減っている。農地だけでなく農家が所有している山林も手つかずになっている。夫が亡くなり農業を続けられない先祖代々の土地を守りたい方などとともに、お米づくりを中心に農業を行っている。

除雪作業（機械作業だけでなく手作業も）、糞まき、野菜の種まき（細かい種は難しいので、かぼちゃのたねを採用している）、田植え作業（地域でも子供たちが減っているが、イベントを年に5回ほど開催している）、苗を植えるなど。作った野菜やお米は、自社レストランや、東京大学の食堂に提供している。障害のある方だけでなく、認知症の方や引きこもりの方、学生、地域の方、あるいはまだまだ働きたい高齢者にも参加してもらっている。

その日その日の仕事だけでなく、働くその先にあることが重要。例えば、父の働く様子を娘に見せたところ、娘が父に会いたいと子供とともに会いにきた。家族が繋がってくる。働くその先にあることも大切にしたいと思っている。自伐型林業を行い、百年二百年の森を作っていくことも試みている。障害のある方だけでなく、世代を超えた様々な方々がつながる場を作る力が農福連携にはある。

株式会社九神ファームめむろ（北海道河西郡芽室町）取締役・エフピコダックス株式会社（同町）

代表取締役 目田久美氏 「“プロジェクトめむろ”から全国へ広がる農福連携の取り組み」

350人を超える知的重度障害者を正社員雇用している。雇用率は約15%。芽室町長からの声かけがきっかけだった。断るつもりが、基幹産業が農業であるということを知り、当社グループ（株式会社エフピコ）の取引先が食品関係の会社であることから、何か面白いプロジェクトができるかもしれないと思うようになった。芽室の農業が生き、自社雇用で雇用率が上がり、障害者が雇え、地域貢献ができる。そのことをプレゼンしこの会社ができた。

5haの農地でじゃがいもなどを生産加工し販売する仕組みを構築した。愛媛県の惣菜企業が障害者雇用に参加してくれた。九神ファームめむろの農福連携は障害のある方の自立や地域活性化に繋がっただけでなく、全国各地の遊休農地の活用にも繋がった。

黒字化しなければ何をやっても絵空事だと考えるので、これまで一度も赤字を出していない。障害のある人々が、「あの町に行けば生きていける」場所、各々が「かけがえのない必要な人」になれる場所を芽室に実現することを志している。

【ディスカッション】（コーディネーター） 名寄市立大学保健福祉学部社会福祉学科講師 小泉隆文氏

（小泉）農作業の技術はどのように習得した？

（宮嶋）うちでは訓練が成り立たないから、すぐに現場に出す。やる内容を指示することは一切しない。初めて現場に出た人は何もかもわからないから、現場をよく見る。そうすると自分で興味を持ち、「あそこを手伝ってみようか」と自ら思う。それはやることを指示されて作業をすることとは違う。そして、今度は自分が教える立場になる。これまで教わる立場だった人が教える立場になったとき、自分のやっている仕事の見方やどういう風に必要かということの見方が少しずつ変わってくる。自らやる気持ちが湧いてくるのが大事。人間がやらなければならないことは大変だけれど、それさえ外さなければ、ゆっくりとやっていけば良い。ゆっくりやっても前向きにならない人は当然いるが、自分が自分の意思で動かなければ確保できないはずの場所が確保できているのは、周りの人に支えられているからだということに、どこかで気がつく。その中で、自分もやれることをやらなければまずいなと思い始める。明らかに不自由に見える人が仕事しているのを目にする環境がある。そのようなことを自分で考えていける場所を確保している。

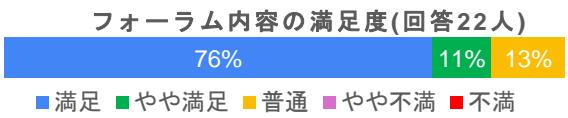
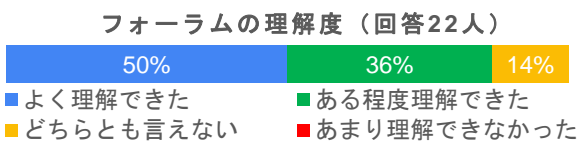
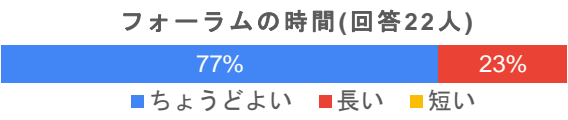
（楠）障害者の方が仕事を覚えることには時間がかかる。農家はなかなか待てない。同じ作業にしても、農家にはそれぞれの流儀があり、やり方が微妙に違う。その違いに、障害者は混乱する。農家は流儀を乱されるのが嫌で、全部やり直すことがある。そうしたことで、だんだんと他の農家に行くことが遠のいた。

人によって違うが、それぞれの人を育てる気持ちでやっていくと確実に身に付く。そして、一旦できることがわかると、それによって自信がつく。「これは私にできる」と思うようになると、積極的にその作業を行うようになる。

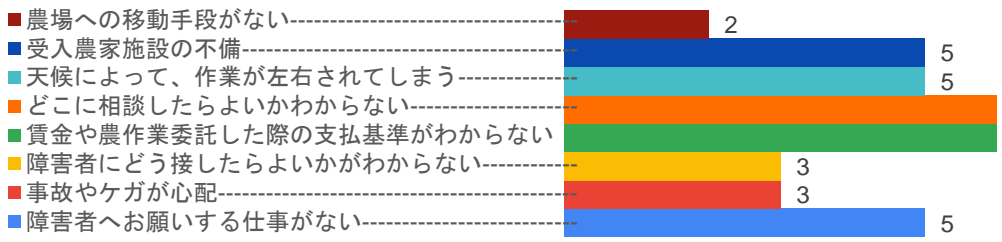
（錦織）自分の足跡がどれだけついたかで、美味しいものや森づくりができるのだと思う。「足跡」とは、どれだけ畑に入って、観察したり自分の作業を振り返ったりして、作物や木を観察することである。

（目田）障害者と高齢者の方々の相性がよく、高齢者のダメなことはダメだと怒り、良いことは「オーツすごい！」と褒めてくれるシンプルさが障害者にとっては心地良い。自分たちで全部やろうとするのはとても不可能だと思うので、ぜひ地域の方々に頭を下げて、力をお借りすれば良い。

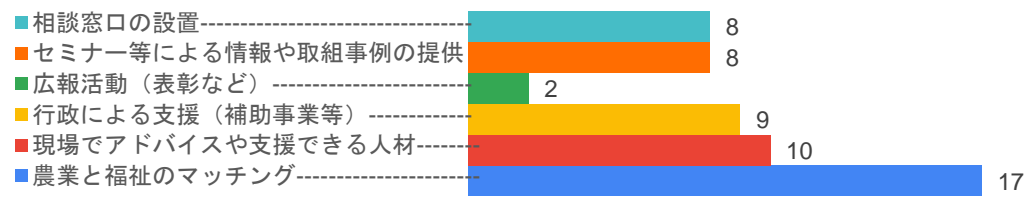
北海道フォーラム実施後アンケート



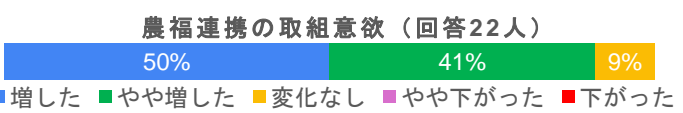
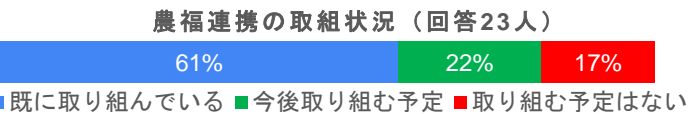
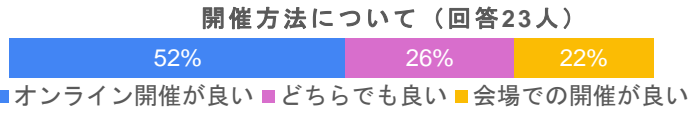
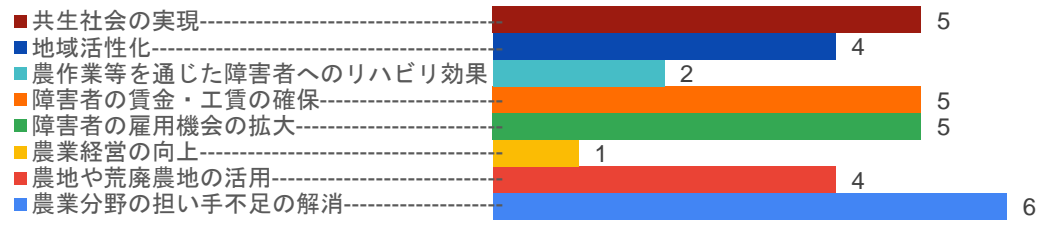
農福連携に取り組むに当たって、主な課題 (回答22人)



農福連携に取り組むのに必要なこと (回答23人)



農福連携に期待すること (回答23人)



その他の課題 (自由記述)

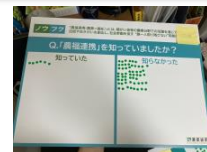
- ・ゼロからのスタートになりますので、まず自分自身が農業経営としてのアプローチをしっかりと検討して取り組む必要があると考えています。
- ・近郊の事業所が少ない、事業所支援員不足
- ・農地法を改善して耕地を借りやすくしてほしい

マルシェの感想

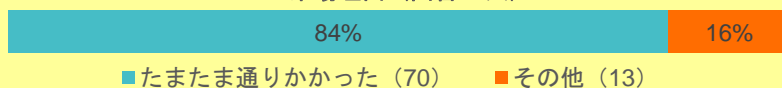
- ・お話を聞いた後に、実際の商品などを手に取れるのはとても良い流れだったと思います。
- ・結構賑わって良かったと思う。障害者の方も販売に携われれば良かった。
- ・他地方で農福連携に取り組んでいる事業所の実際を見学する機会はほとんどなく、実際に販売されている商品を見て、事業所の方から農福連携の実際をお聞きすることができた貴重な機会でした。
- ・地下歩行空間のイベントはとても良かったです。利用者さんも喜んでいました
- ・非常に勉強になりました。将来的に農福連携に携わる意欲が湧きました。ありがとうございました。



「農福連携」街頭認知度調査（回答123人）

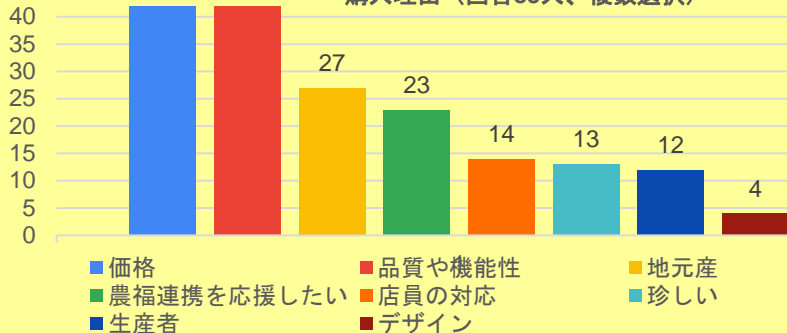


来場理由（回答83人）



購入者アンケート

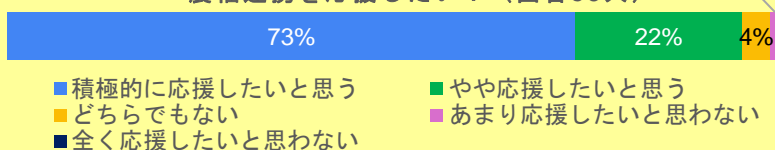
購入理由（回答83人、複数選択）



その他の購入理由（自由記述）

- ・欲しいものだった
- ・放牧されていたもので作られていたから。
- ・おすすめされたから

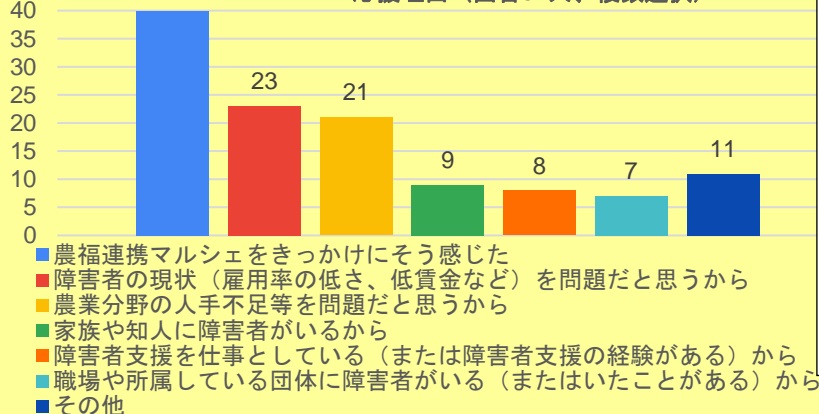
農福連携を応援したい？（回答83人）



その他の応援理由（自由記述）

- ・自身の年齢と重ね合わせて関心を持った
- ・今回のような売店を見かけたら少し商品を買うなどはしたい頑張っているから。
- ・素敵な商品だから。
- ・家族や周りに農業関係者がいるから。
- ・応援は義務だと思う
- ・テレビを見て、頑張っていて欲しいと思った
- ・こういった取り組みには応援したいとおもっているから。
- ・社会全体で取り組むべきだと思うから
- ・昔から自然が好き
- ・障害者が作ったものが良いものという意識があり、普段から意識して買いたかった。

応援理由（回答82人、複数選択）



農福連携 マルシェ in 東北

in 東北 仙台開催

～農福連携魅力物語～

2023 9/22(金) 10:00～17:00

※都合により変更となる場合がございます。

東北農福連携の魅力が満載!農業者と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味しい加工品が東北各地から大集合!!9月22日10時より、AER(アエル)2階アトリウムにてマルシェを開催します!!!皆様のご来場を心よりお待ちしております。

場所▶ AER(アエル) 2階アトリウム
宮城県仙台市青葉区中央1丁目3-1

農福連携フォーラムも同時開催!
SS30 第1・2会議室
宮城県仙台市青葉区中央4丁目6番1号にて13時～16時まで開催いたします!(裏面参照)

※写真はイメージです。

参加事業者と商品(予定)

- 1 社会福祉法人 月山福祉会(山形県) 手作りジャム、ワンちゃんビスケット、乾燥しいたけ、落花生 など
- 2 社会福祉法人 ころん(福島県) たまねぎ、まきいも、さやえんどう、オクラ、料理酒、卵、ケーキ、クッキー、プリン など
- 3 一般社団法人 空(福島県) トウモロコシ、大豆、さつまいも、なめこ、舞茸、ひらたけ、味噌 など
- 4 一般社団法人 イシノマキ・ファーム(宮城県) クラフトビール(巻風エール)、ホップソルト(巻風ホップソルト) など
- 5 中城建設 まちワクファーム(宮城県) めんこちゃんにんにくなど
- 6 丁寧 vineyard and winery(宮城県) ワイン、果ジュース、ガーリックオイル など
- 7 株式会社 耕野(岩手県) 米、雑穀野菜など
- 8 社会福祉法人 みんなの輪(宮城県) 野菜 ジェム、米待クッキー(巻風米こんにやく) など
- 9 一般社団法人 ステージパス(宮城県) ホットセロリ、サラダほうれん草、ルッコラ、ミックスレタス、青パパイア など
- 10 障害者就労支援事業施設 NPOあきたアグリネット(秋田県) 三層ゼリみつば(水耕)、雑穀、菊の花 など

マルシェの内容は、予告なく変更する場合がございます。

主催：株式会社農福共生総合研究所 後援：東北農政局

農福連携フォーラム in 東北

農福連携の魅力とは?

2023 9/22(金) 13:00～16:00

参加費 無料

農福連携の魅力とは? 障害者等の就労場の創出だけでなく、農業従事者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農業の維持・活性化等が期待でき、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを見せています。農福連携の現場には、いきいきと農業に取り組む人々や、人と人とのつながり、そして丹精込めて育てられた農産物やそれらの付加価値を高める加工品など、多様な魅力があふれています。この機会に是非、東北の地域農業を活用した農福連携のさまざまな取組について学んでみませんか。

農福連携フォーラム

開催形式 ハイブリッド開催 (現地 + オンライン参加)

現地▶ SS30 第1・2会議室
宮城県仙台市青葉区中央4丁目6番1号

2022ノフクアワード受賞・登録された方を中心に講演とパネルディスカッションを行います。

講演 [テーマ] 「未来を耕す共生の牧場」～月山福祉会の農業事業と障がい者支援～

2022ノフクアワード受賞者(実名を削る)

ノフクアワード 2022

社会福祉法人 月山福祉会 理事長 石川 一郎氏

パネルディスカッション [テーマ] 東北の地域資源とつながりを活かした農福連携

2020ノフクアワード 優秀賞 ノフクアワード 2020
社会福祉法人 ころん 関係者 考選氏

2020ノフクアワード 優秀賞 ノフクアワード 2020
一般社団法人 松島のかぜ 生活委員 一ノ瀬 和恵氏

大野自治協議会 泉川 達也氏

コーディネーター 宮城大学 佐々木秀之 准教授

※フォーラムの内容は、予告なく変更する場合がございます。

農福連携マルシェも同時開催!

AER(アエル) 2階アトリウム
宮城県仙台市青葉区中央1丁目3-1
10時～17時まで開催いたします!(裏面参照)

応募期間 9月19日(火)まで

定員 現地参加：50名 オンライン参加：300名以内

お問い合わせ 株式会社農福共生総合研究所 noufuku@notosoken.jp

お申込はこちら

メールアドレス
応募お申し込み
にご対応いたします。

お申込はこちら

メールアドレス
応募お申し込み
にご対応いたします。

主催：株式会社農福共生総合研究所 後援：東北農政局

農福連携 魅力物語 MAP in 東北

「農福連携フォーラム&マルシェin東北」では、魅力ある様々な取組が大集合!東北のさまざまな地域で、農業を通じて障害者などが働く場所や居場所をつくっている取組をご紹介します。

農福連携の魅力ある取組の詳細は右のQRコードからご覧ください。

社会福祉法人 月山福祉会
所在地：山形県鶴岡市
農福連携フォーラムパネルディスカッション
農福連携マルシェ
ホームページ

了美 vineyard and winery
所在地：宮城県黒川郡大和町
農福連携マルシェ
ホームページ

中城建設 まちワクファーム
所在地：宮城県仙台市
農福連携マルシェ
ホームページ

一般社団法人 空
所在地：福島県郡山市
農福連携マルシェ
ホームページ

社会福祉法人 ころん
所在地：福島県西白河郡泉崎村
農福連携フォーラムパネルディスカッション
農福連携マルシェ
ホームページ

障害者就労支援事業施設 NPOあきたアグリネット
所在地：秋田県
農福連携マルシェ
秋田県社会福祉センター 秋田県社会福祉センター
ホームページ

社会福祉法人 みんなの輪
所在地：宮城県
農福連携マルシェ
ホームページ

大野自治協議会
所在地：岩手県和賀郡西和賀町
農福連携フォーラムパネルディスカッション
ホームページ

株式会社 耕野
所在地：岩手県花巻市
農福連携マルシェ
ホームページ

一般社団法人 松島のかぜ
所在地：宮城県宮城郡松島町
農福連携フォーラムパネルディスカッション
ホームページ

一般社団法人 イシノマキ・ファーム
所在地：宮城県石巻市
農福連携マルシェ
ホームページ

一般社団法人 ステージパス
所在地：宮城県
農福連携マルシェ
ホームページ

※ 農福連携マルシェ出店者は予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。



左から川辺（農都）、佐々木氏、石川氏、小野崎氏、関根氏、一ノ瀬氏、泉川氏

農福連携フォーラム in 東北

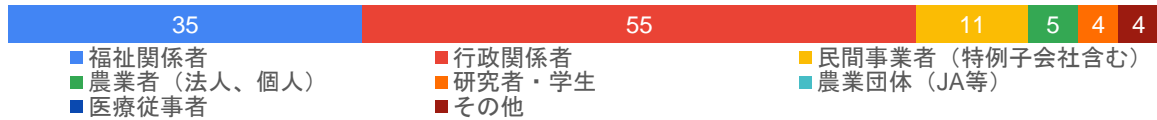
【会場】SS30 第1・2 会議室（宮城県仙台市青葉区中央 4 丁目 6 番 1 号）

【日時】2023/9/22(金)13:00~16:00

【申込】現地：46 人 オンライン：69 人

【当日】オンライン：62 人

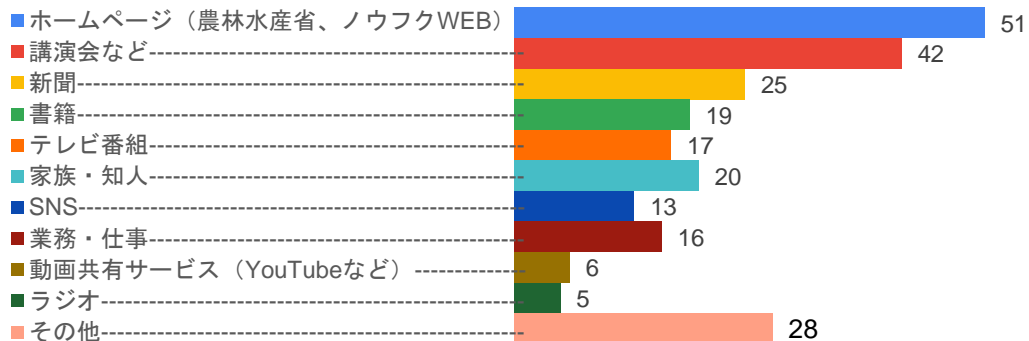
申込者の職業（回答114人）



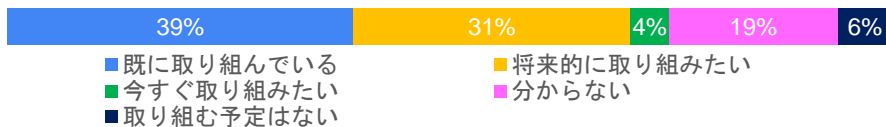
あなたは「農福連携」を知っていますか。（回答115人）



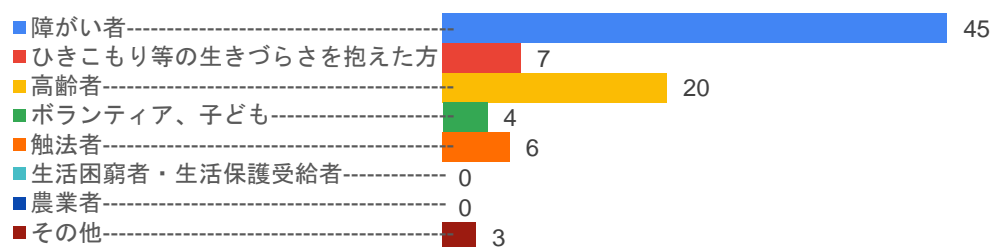
農福連携を何で知りましたか（回答100人、複数選択）



農福連携取り組み状況（回答115人）



あなたの身近に農福連携に取り組んでほしい方は？（回答85人）



【講演】「未来を耕す共生の牧場 ～月山福祉会の農畜産事業と障害者支援～」

社会福祉法人月山福祉会（山形県鶴岡市）（ノウフク・アワード 2022 準グランプリ「未来を耕す」）
理事長 石川一郎氏

牧草ではなく野草を食べて育つ短角牛を飼育している。一般的な牛は狭い環境で不健康に育てられる。A5は脂肪分が50～60%。不健康である。短角牛は脂肪が少なくジビエ肉のように赤身が多い。枝豆、ネギ、なす、ブルーベリーを育てながら、化学肥料を使わない牧場を運営している。日本財団がダイバーシティプロジェクトという構想を持っており、就労困難者のみならず、様々にハンディキャップを負い働きづらさを抱えている人たちのための事業をおこなっている。この取組を厚労省で制度化してもらいたい。私たちも基本的な取組を頑張り、導いていきたい。困っていることは沢山あり、まずお金がない。農水省の補助率に問題があるし、使いたいようなメニューもあまりない。抽象的な話ではなく、実際にイメージのできる具体的な取組が必要である。農業をやりたいけれど、農業をやれる支援員がいなかったり、農業をやりたいけれど農地にどう出会うかを心配する人もいる。うちで農業を学びたい人がいれば引き受ける。しかし、泊まる場所がない。そのための補助金なども必要。農業は座学だけでは難しいから、実際にやって学ぶ必要がある。

【パネルディスカッション】「東北の地域資源とつながりを活かした農福連携」

社会福祉法人こころん（福島県西白河郡泉崎村）（ノウフク・アワード 2020 優秀賞）
こころんファーム農場長 関根考迪氏「農福連携こころんファームの実践」

地域があって福祉があって農業が成立するというのを伝えたい。地域のサポーターさんが早朝から収穫を手伝ってくれる。収穫物を利用者が出荷調整し、その後JAや大手スーパー配送ステーションへ出荷する。その他、地域の直売所にも納品している。地域や福祉の支え合いがなく、サラリーマンのように仕事をすると残業100時間はすぐにいってしまう。障害者から、震災後の移住者、孤独感を抱えている人、一般企業で疲れてしまった人などいろんな人がいる。農業のノウハウを福祉が持っているだけではダメだし、農水省や厚労省などの上役だけが持っているのではダメで、現場の人間が持っている必要があり、利用者主体の活動としている。利用者は栽培し、売り場を見て、クレームも受けており、どの作物をどのくらい増やすか、いくらで売れるかの感覚が、10年ほどやっていると利用者さんの中でわかってくるため、利用者中心で作付け計画をおこなっている。障害者が農業の一翼を担っていく好循環モデルの構築を目指している。

一般社団法人松島のかぜ（宮城県宮城郡松島町）（ノウフク・アワード 2020 優秀賞）
生活支援員 一ノ瀬和恵氏「『松島のかぜ』の取り組み紹介」

支援に関わる人の情報共有や利用者さんへの合理的配慮をする。個々の性格・障害の特性、生い立ち、悩みがないかなど、関わる職員が情報を共有しておくことが大事。障害はその人の一部でしかないのだから、その人を知ることが大事。そのようなことは福祉の専門分野だと思うので、農業者は福祉事業所と協力するところからスタートしたら良いと思う。健康面や経済面、仲間との交流や地域での活躍における利用者の生活の質の向上や、農家の生産性の向上が可能だ。地域のどんな人とも繋がる場所になりたい。

大野自治協議会(岩手県和賀郡西和賀町)事務局 泉川道浩氏「大野集落のむらづくり」

西和賀町は毎年2メートルの雪が降る豪雪地帯。人口が減っており、これを防ぐための取組を行なっている。大野集落は一般社団法人「大野もっこのり」を立ち上げた。「もっこり」は「いっぱい、たくさん」という意味。設立の目的は将来に渡り農業集落として持続するため、地域内の農地を活用し、農産加工・交流・景観保持等を行うこと。農福連携を通じ、高齢者が地域で交流し、いきいきと活動できる場の提供に資する活動を行う。「食の文化祭」を開催し、食文化を地域内で伝承・交流する。17品目の郷土料理を提供する。「食の宅急便」として、大野の高齢なお母さま方がつくったものを、利用者様に手伝わってもらって発送している。発送作業は、障害者施設ワークステーション湯田沢内に委託している。「モニターツアー」として来ていただいた方に、次の世代へ残していきたい食の上位三品目をつくってもらおう。生産者との交流、郷土食体験、雪明かり体験で来た方をもてなす。大野集落のモットーとして、自分たちが楽しむこと、他人が言うことを否定しないこと、来るものを拒まないこと、飲み会でアイデアを共有すること、「おかえりなさい」の精神を大事にしている。平成20年から平成30年を比べると人口は減る一方だったが平成30年と令和5年を比べると改善している。だが、今後は若い人口を増やすことも課題である。

【ディスカッション】（コーディネーター） 宮城大学事業構想学群教授 佐々木秀之氏

佐々木：農福連携と地域資源をつなげていくにあたってのキーワードは何か？

石川：人口減少・購買意欲減少・耕作放棄地増加の中で、何があるかといえば、土地・農地がある。ここに注目する。農作業は一つ一つやりながら覚えればよく、そのためのやる気を持っていることが大事である。

佐々木：東北に人がいない中で、関根さんのような人が増えたら農福連携が広がると思うが、どうすればそのような人を増やせる？

関根：好きなことを貫徹すること。仕事を仕事として考えなくていいように。自分の好きなことを夢中になってやっていると、必ずその人はいきいきとしてくるはずだから、縛られるものにとらわれずチャレンジすることに尽きると思う。

佐々木：農福連携をコーディネーションする際のキーワードは何か？

一ノ瀬：キーワードは対話。役員たちが地域の中で人脈があり、日常会話から「人手不足なんだ」や「お手伝いできるかも」という話が出て、つながりが出来ている。地域のイベント等でできた人脈から、会話を通して新たなつながりが出来る。大事なものは、素で、ありのままの自分で関わっていくこと。

佐々木：農福連携の抱えている課題と、その解決の展望は？

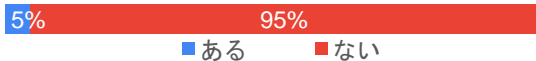
関根：地域の人々の協力をどう得るのかという問題について、地域の人々が触れたがらない問題に手をつけていくことが重要。例えば、私たちは廃れてしまった神社の草刈りを無償でやることにした。「なぜそんなにやってくれるの？」と言われ、利用者の草刈りの練習になると伝えたと、地域の協力体制ができた。これから福祉での人材不足が見込まれる。地域の高齢者で、草むしりだけでも協力してくれる人がいれば、希望が見えてくると思う。

東北フォーラム実施後アンケート

	岩手県	宮城県	滋賀県	秋田県	青森県	千葉県	鳥取県	福島県	兵庫県	北海道
人数	3	22	1	2	5	1	1	4	1	1

アンケート回答者の所在地

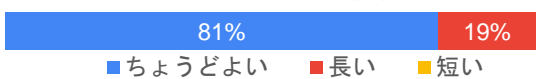
開催済みフォーラムの参加（回答43人）



フォーラム参加方法（回答46人）



フォーラムの時間（回答者43人）



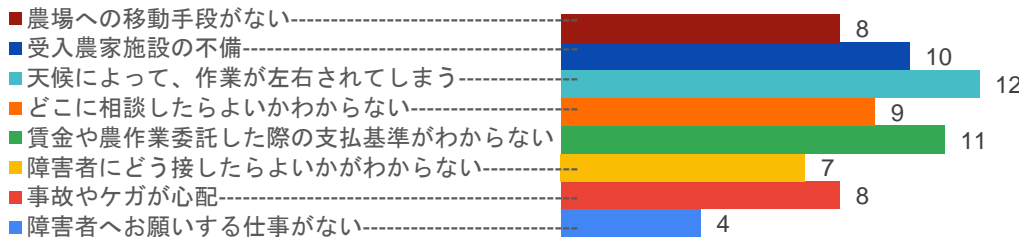
フォーラム理解度（回答43人）



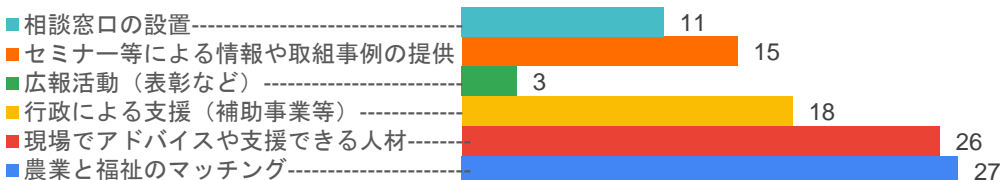
フォーラムの満足度（回答43人）



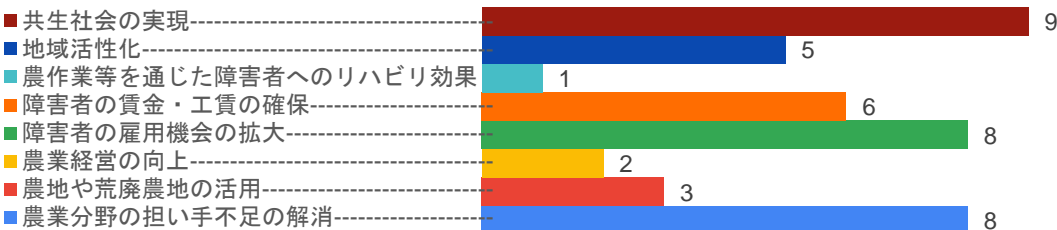
農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答39人、複数選択）



農福連携に取り組むのに必要なこと（回答42人、複数選択）



農福連携に期待すること（回答43人、複数選択）



マルシェ感想

・皆さんレイアウトを工夫されており、素晴らしい商品を出品されていましたが、2階の人通りの少ない場所であったため、もう少し人が訪れる様に1階で案内するなど宣伝の工夫があってもよいのかと思いました。

・結構賑わって良かったと思う。障害者の方も販売に携われればよいと思った。

・個性的な商品が並んでよかった。

・商品アイテム数が少ないイメージがあった。農福マルシェに該当しない商品もあったように思うが、そもそも開催趣旨がわからないのでなんとも言えない。内輪の盛り上がりで終わるのはもったいない事のように思った。

・新鮮で値段も手ごろでした。

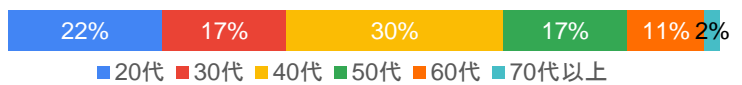
・農産物だけでなく様々な加工品が販売されていてとても参考になった。

・販売に対して、出店していた我々も含めて、消極的な感じがしました。やはり、我々から積極的にアピールすることが、農福連携の発展があるのではないかと感じました。

職種（回答44人）



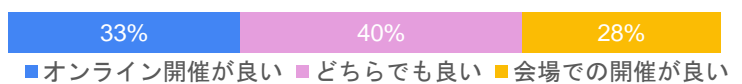
年齢（回答46人）



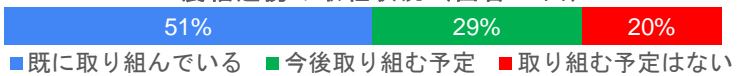
性別（回答45人）



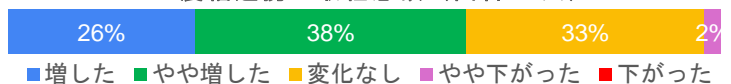
開催方法について（回答43人）



農福連携の取組状況（回答41人）



農福連携の取組意欲（回答42人）



その他の課題（自由記述）

・宮城県は特に農側のニーズ把握が出来ていないのか、ニーズが無い場合が多く、福側が農業を実践しているパターンが多い。それが、農福連携の理想なのか疑問がある。

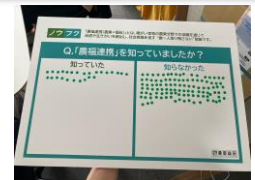
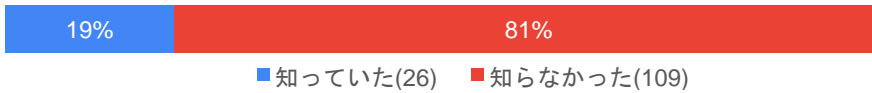
・受け入れ先がない。

・農業に取り組む障害者の減少

・農業者側への相談窓口が明確でない。農業者側が福祉の力を必要としているのか疑問。

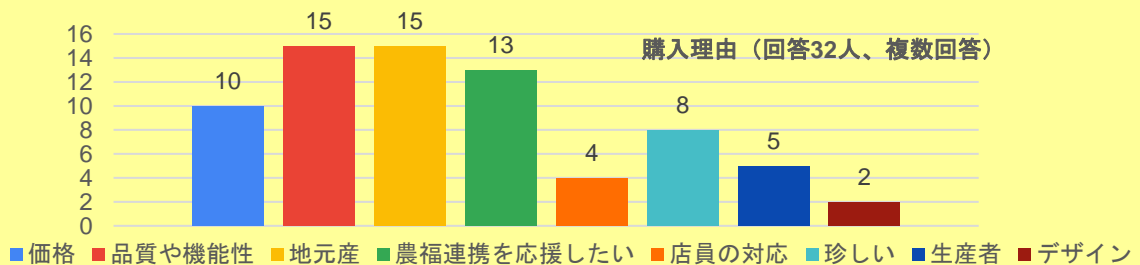
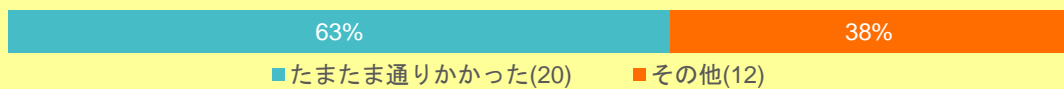


『農福連携』街頭認知度調査（回答135人）

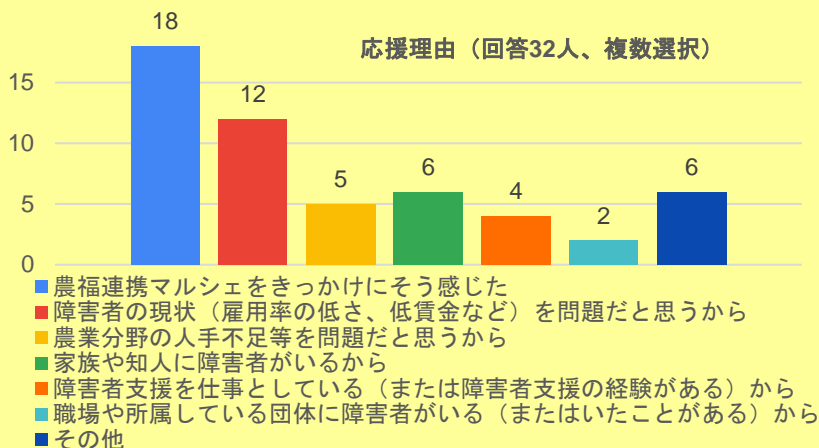
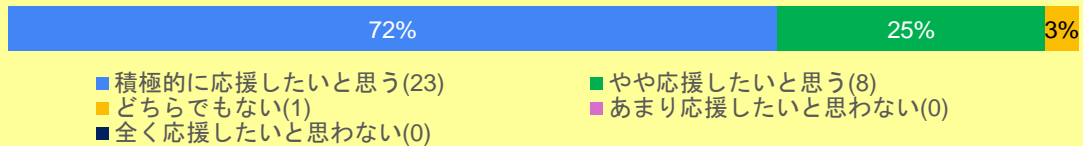


購入者アンケート

来場理由（回答32人）



農福連携を応援したい？（回答32人）



その他の応援理由

- ・自然が好き
- ・応援
- ・こういった取り組みには応援したいとおもっているから。
- ・昔から自然が好き
- ・家族や周りの農業関係者がいるから。
- ・頑張っているから。
- ・素敵な商品だから。



左から笠間氏、押田氏、菊岡氏、山本氏、林氏

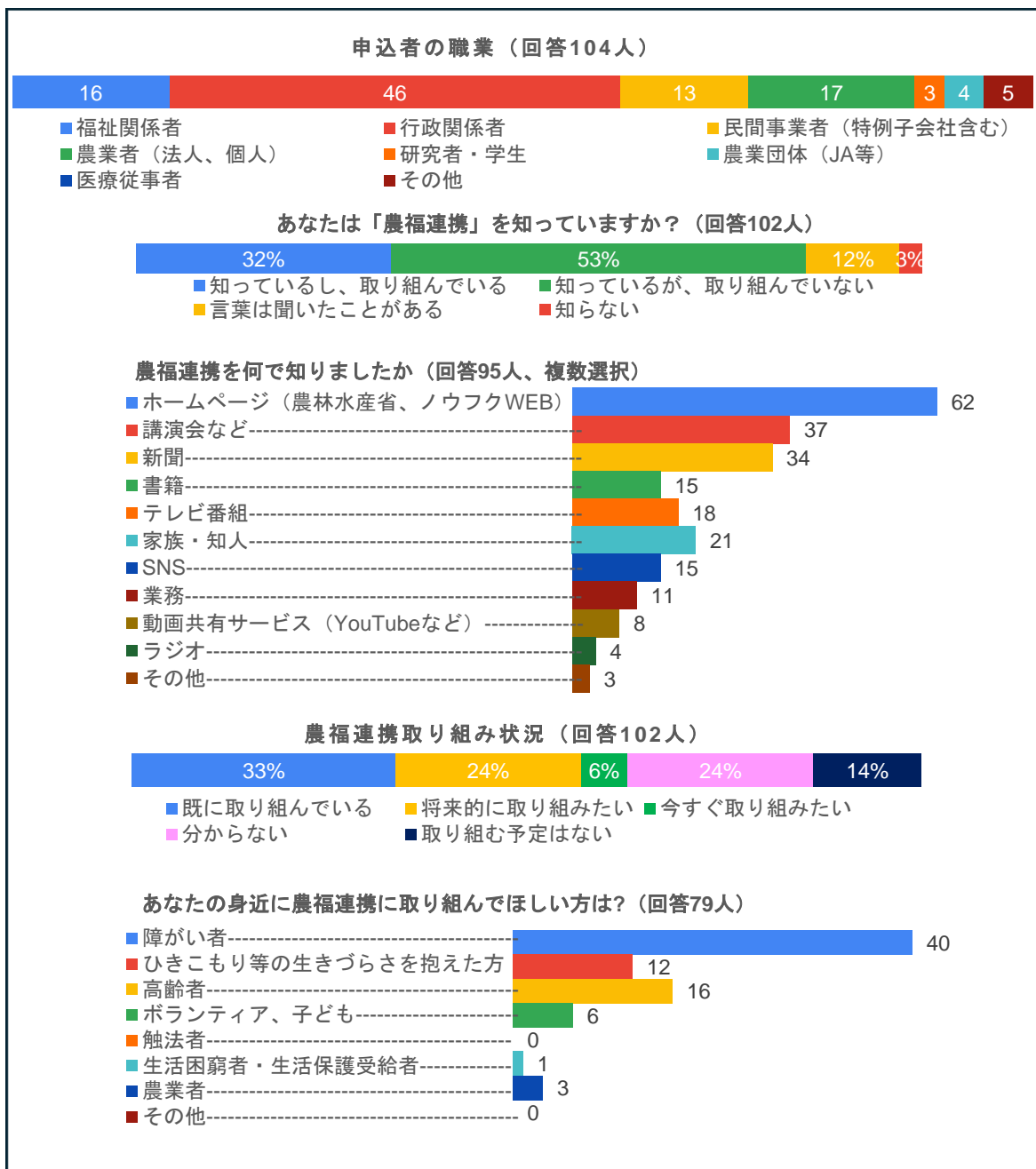
農福連携フォーラム in 北陸

【会場】TKP 金沢新幹線口会議室 会議室 3A（石川県金沢市堀川新町 2-1 井門金沢ビル 3 階）

【日時】2023/10/12(木)13:00~16:00

【申込】現地：40人 オンライン：69人

【当日】オンライン：62人



登壇者発言の要点

アーカイブ動画 <https://youtu.be/z4yMnDSMcj0?si=Z-XrsfuXwQ6W9UGk>

【講演】 「多様な人材と共に働き、地域を活性化～農福連携の魅力～」

株式会社笠間農園（石川県河北郡内灘町、ノウフク・アワード 2022 優秀賞） 取締役 笠間令子 氏

農政局の農福連携担当者や取材記者が農園に来た時、一緒に植える速さの競争を行った。B型事業所の方々が1位と2位、3位が記者チーム、4位が農政局チームだった。適材適所ということがよくわかった。

北陸農政局の実証事業をさせてもらった。農業をすると元気になるという話を現場ではよく聞くため、エビデンスをとりたいたと言ったところ、予算が取れ、実現できた。睡眠については中途覚醒の時間が縮まった。農作業によって、ある不眠症の治療薬と同等によく眠れると聞いた。

オランダのケアファームはこのようなことを、国を挙げて行っている。8月下旬～9月上旬にかけて、オランダのケアファームへ視察に行った。国の方針の影響が大きいと感じた。オランダと北陸4県を比較すると、オランダの農業が大規模化していることが窺える。ケアファームはピーク時より減っているが、オランダの農家数のうち2.5%がケアファームである。もし、北陸の農家の2.5%が農福連携を行えば、1900戸もの農福連携が可能になるが、就労支援事業所数自体がその半分以下である。ケアファームの数を人口あたりで計算すると、オランダでは1.3万人に1つケアファームがあり、これは石川県の中学校が1.4万人に1つあるのと同程度の規模である。オランダでは多くの人にケアファームが知られていて根付いているが、それはそれだけ身近にあるからだと思った。

【パネルディスカッション】 「農業と福祉のニーズをつなぐマッチングの仕組み」 ～農福連携からユニバーサル農園への展開～

NPO 法人ピアファーム（福井県あわら市、ノウフク・アワード 2020 優秀賞） 理事長 林博文氏
「ブドウ・ナシ栽培を10年。福井県における農福連携の中核に」

農福連携は工賃向上のために始めた。ブドウやナシを生産・販売しているが、福井県内では生産量が少なく、寡占的に販売できる。また、ブドウやナシを選んだのは、障害者の特性に合わせたからでもある。雨の日にはハウスで作業ができる方が良い。雨の時に狭い部屋でうじうじ作業するより、ハウスの広いところで、時に座ってでも作業ができる方が良い。工賃向上を目指すにあたって、障害を持った方が働きやすい職場を目指した。耕作放棄地を開墾して農地の規模拡大によって、工賃向上のみならず、利用者の仕事が増加して地域農業の振興に貢献できた。

こまつな菊ちゃんハウス（富山県射水市） 代表 菊岡進氏

景気の復調に伴い若い働き手たちがいなくなった。その時に障害者の支援団体の方から障害者を使ってくれと頼まれた。最初は断っていたが、1週間預かってみることにしたら案外仕事ができることがわかった。その後から、たくさん障害者の方が働きにきて、なかなかよく仕事をよくやってくれており、障害者から学ぶこともたくさんある。うちはあくまでもお金儲けのためにやっていて、障害者を雇用はするが、それに見合った仕事をやってくれないと賃金は払えない。

子育て農業応援団（石川県金沢市） 団長 山本実千代氏

2009年に開始。それ以前には2002年に自宅を開放し、「サポートハウス」として様々な事情を抱えた人を受け入れてきた。そのつながりもあり、食の大事さに気付かされ、子育て農業応援団が出来上がっていった。

耕作放棄地の畑を借り、8家族と共に開始。現在は、湯涌地区で古民家をリフォームし、耕作放棄地の田んぼを借りて畑の活動を開始している。様々な作業を皆に体験してもらっている。色々な野菜を育て、バーベキューや味噌作り、郷土料理づくりをする。畑を中心に、子育て中の家族から、薬物依存の方、認知症の方、児童デイサービスの子どもたち、いろいろな交流の場になっている。サポートハウスをやっていた頃からうちに来る方は駆け込み寺のようになってくる。そしてご飯を食べない。そこで食べることの大事さを思った。心を閉ざしていたりすると、畑以外にも色々なことができるようになるために半年から1年かかる。食べることの大事さ、食べることは生きること、そういうところから畑の活動が始まった。

JA 金沢市（石川県金沢市）（ノウフク・アワード 2022 フレッシュ賞）
担い手支援室室長 押田哲男氏 「JA 金沢市農福連携の取り組み」

農協が農家の要望を聞く中で、労働力不足の問題が多かったため、その取り組みの一環として農福連携を開始。最初は農家に受け入れられなかったが信念を持って粘り強く取り組んでいる。農福連携の実践の中で、一度、農家の方が倒れて白菜の収穫作業ができなかったとき、毎年作業に取り組んでいる者たちで自ら収穫を行うことまでできた。

JA 金沢の主な役割は、農家・集出荷場と障害者福祉サービス事業所とのマッチングを行うこと。農家の方には荒っぽい指示やパワハラは厳禁で、障害者施設の方に働きにきていただいているという姿勢を持ってもらう。人により作業スピードが異なるが注意しない。数ある仕事を区切って指示してもらう。近くにトイレがあることも重要。刃物などの危険なものは使用させない。早朝には施設は空いていないので農家に配慮してもらう。作業委託契約は先に結んでおく。

【ディスカッション】（コーディネーター） 農研機構西日本農業研究センター 研究員 中本英里氏

菊岡：農閑期に就労保険などを通じて収入が確保されれば農福連携は一挙に広がると思われる。農家は金銭的にぎりぎりだが、障害者は体調を崩しやすい等の理由から予備的に人を増やさなければならない。それでも、本人は仕事が欲しくて来ていて、働くことに誇りを持って来ているから、私たちは事業所との連携ではなく直接雇用している。

中本：多様な方が関わる体制はどのように整えられて来たのか。

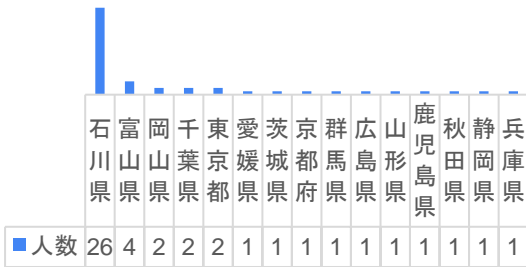
山本：特性を踏まえて、まずは作業を楽しんでもらうことを目標に楽しくやる雰囲気を作っている。例えば富山ダルクの方々はいかつい男性ばかりなので開墾作業、生きづらさを抱えている方々は華奢な方が多いので、やわらかいゆっくりとした作業がいいと考えている。無理のない範囲で、特に服薬による状態の変化も見極めながら。社会復帰のもっと手前で、一人一人を丁寧にみる。また、食卓を囲み、共に食べ、「美味しいね」と共有すると笑顔になることが非常に大事なことだと思う。

中本：農福のマッチング後のフォローは。

押田：作業現場に自ら足を運び、農家・施設の方に話を聞く。施設の方には作業をやってみてどうかを聞く。農家の方からは実際に使ってみて思ったより効果があつて良いという感想をよく聞いた。施設の方からも、農作業が良かったという話を聞く。

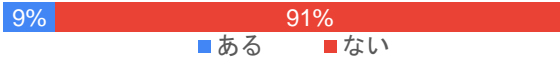
笠間：農福連携促進アドバイザーとして活動しており、厚労省の予算で動いている。それではマッチングまでが限界。マッチング後が続くかどうかは農水省の農福連携技術支援者の役割であると考えられるが動きが少ないのが現状で、「縦割り」によって継続的にフォローを行うのが難しい。

北陸フォーラム実施後アンケート



回答者の所在地 (回答46人)

開催済みフォーラムの参加 (回答48人)



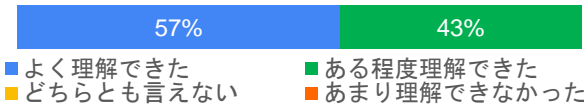
フォーラム参加方法 (回答47人)



フォーラムの時間 (回答48人)



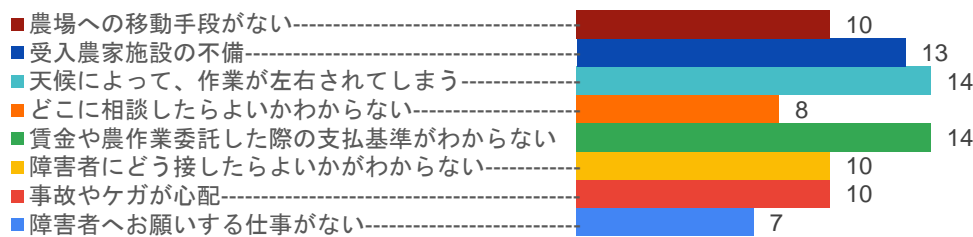
フォーラム理解度 (回答48人)



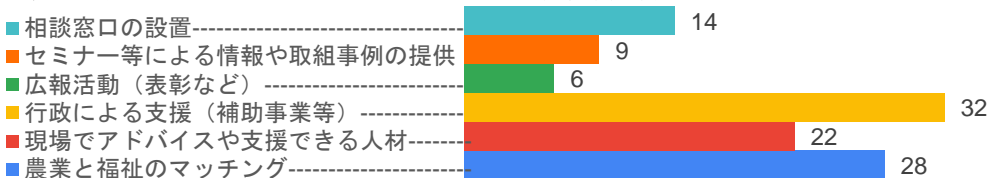
フォーラム内容の満足度 (回答48人)



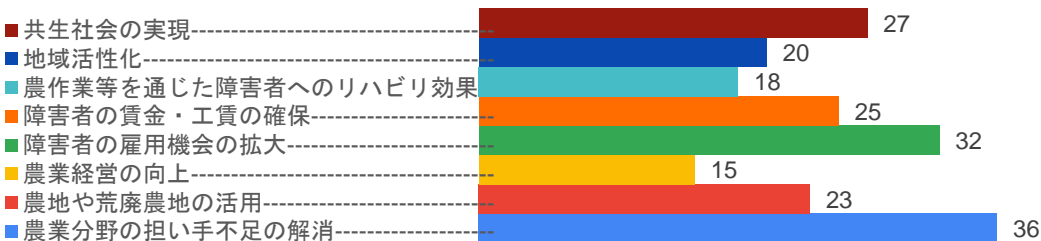
農福連携に取り組むに当たって、主な課題 (回答41人複数選択)



農福連携に取り組むのに必要なこと (回答46人、複数選択)



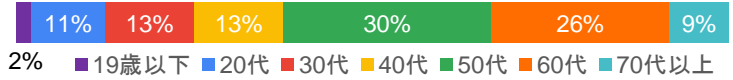
農福連携に期待すること (回答48人、複数選択)



職種 (回答48人)



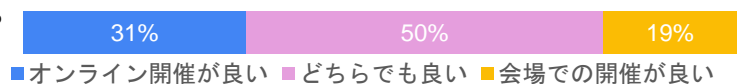
年齢 (回答47人)



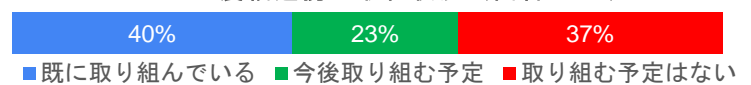
性別 (回答47人)



開催方法について (回答48人)



農福連携の取組状況 (回答43人)



農福連携の取組意欲 (回答47人)



その他の課題 (自由記述)

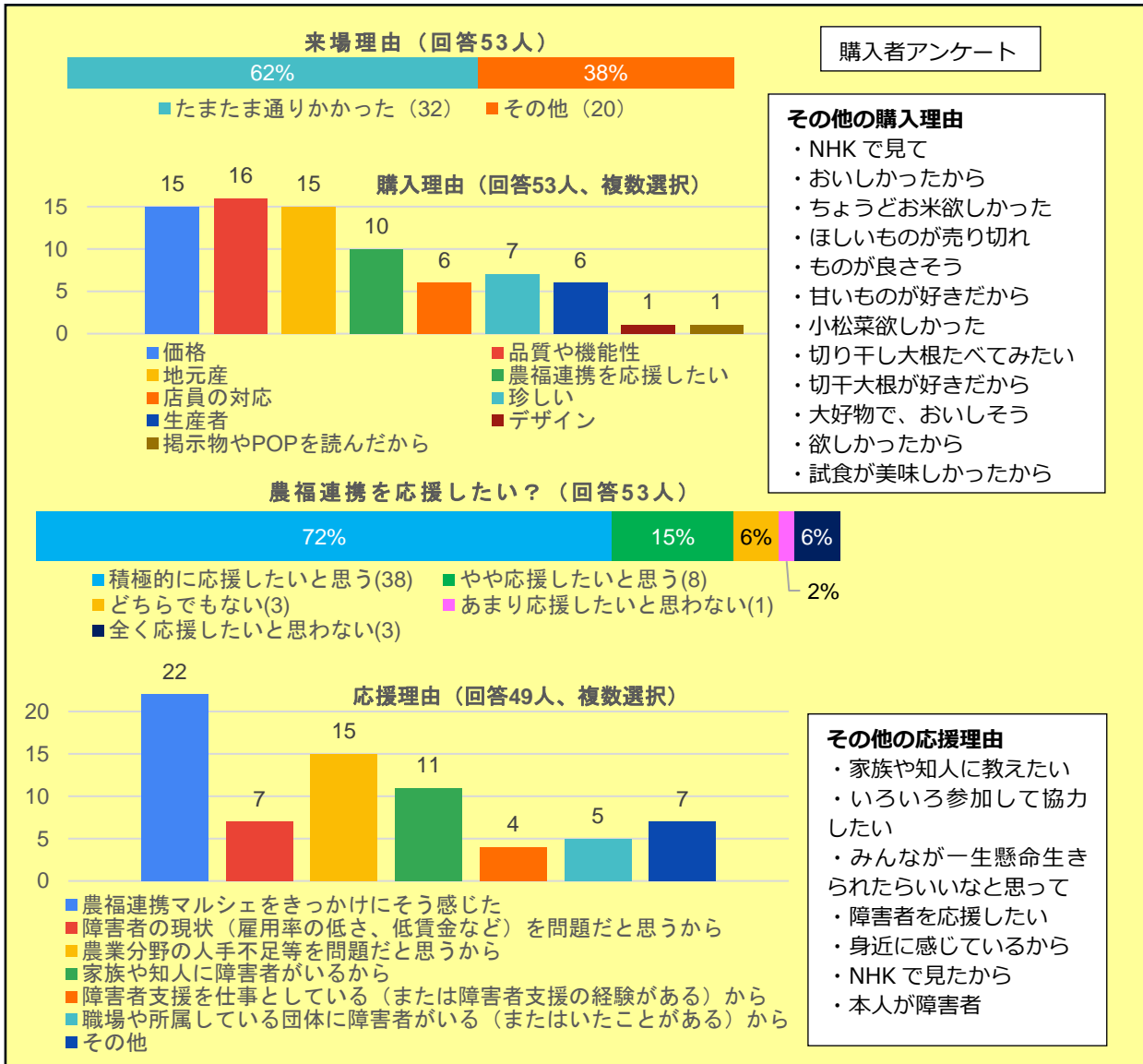
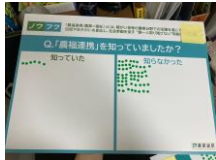
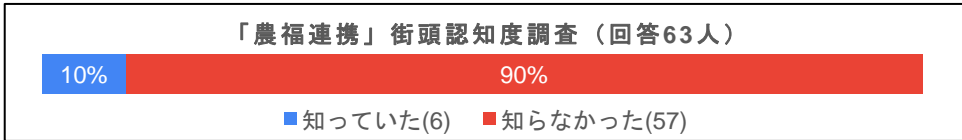
・農業法人等が障害者等を雇用する場合、年間を通して、一定量の仕事を提供することができない。
 ・マッチング、収益性のある相手がない、etc
 ・応募者の増加

その他の必要なこと (自由記述)

・ジョブコーチ的な存在 (JA 金沢市の押田さんのような役割を担う人)

・休憩時間中に継があり、マルシェの様子や商品の概要を知ることができた。
 ・お店の方みなさん明るく活気があって良かった
 ・それぞれの取り組みがわかるマルシェでした。沢山お買い物しました。人通りが少なく残念です。
 ・もっと多く出店あると良いですね
 ・経営的な視点での農福の話を知ることができ、勉強になった。
 ・受け入れ側実務者の意見が生の声で聴けて良かった
 ・色々な商品が販売されていてとても面白かったです。無農薬などの商品が沢山あるのも嬉しかったです。お菓子をいくつか買わせていただきましたが、どれも大変美味しくいただきました。ありがとうございました。
 ・多様な品目があり良かったと思います。
 ・販売している方々がイキイキしていると感じた

マルシェの感想

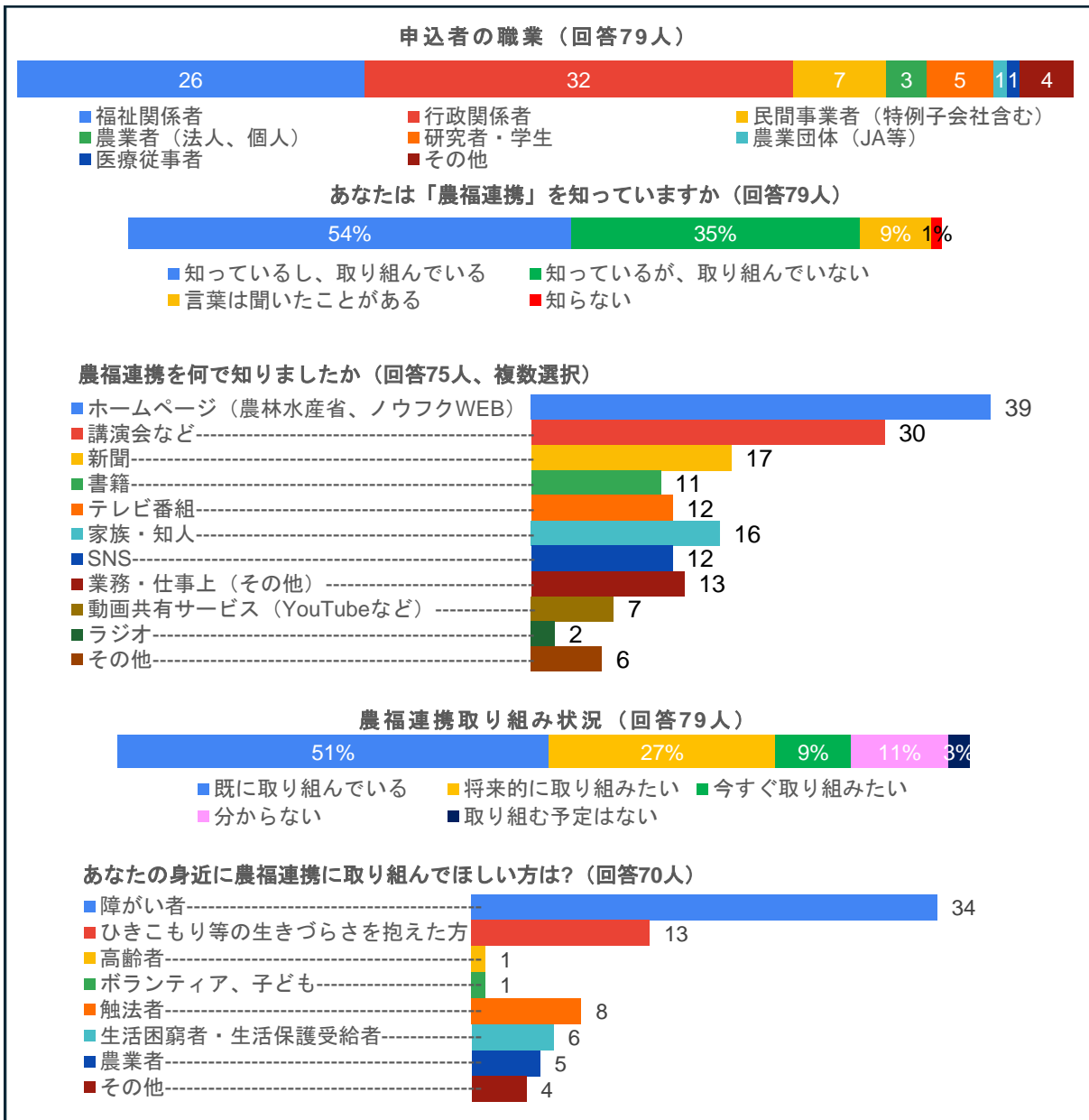




左から農都（川辺）、中本氏、公文氏、野稲氏、阿部氏、南氏

農福連携フォーラム in 中国四国

【会場】 第一セントラルビル 3号館 4F ローズマリー
 (岡山県岡山市北区本町 6番 30号 第一セントラルビル 3号館 4F)
 【日時】 2023/10/18(水)13:00~16:00
 【申込】 現地：24人 オンライン：55人
 【当日】 オンライン：54人



登壇者発言の要点

アーカイブ動画 <https://youtu.be/i07L6QJ4JU4?si=KY5LiSsUx1E8eBEv>

【講演】「生きづらさから生きがいへ～安芸ならではの、地域ぐるみの農福連携～」

安芸市農福連携研究会（高知県安芸市）（ノウフク・アワード 2021 審査員特別賞）
高知県安芸福祉保健所健康障害課主幹 公文一也氏

自殺予防の取組の一環で農福連携を行っている。農福連携に至った経緯は次の通り。30代男性の引きこもりの方が所持金0で野草を食事にするほど生活困窮していたが、安芸市の支援機関のネットワークから農園に繋いだところ、そこが彼の活躍できる場となった。それは作業が彼の特性に合ったこと、支援者も共に作業したこと、雇用主が特性を必死で理解したこと、雇用主との連絡体制が確立されていたこと、賃金がもらえたことが背景にあった。彼を皮切りに、色々な生きづらさを抱えた人が農作業を通じて活躍できる場ができ、雇用主にもハウスの規模が倍になるなどのメリットが生じた。農福連携が進んできた理由として、障害や生きづらさを抱えた人を理解するための勉強会や、彼らのことを雇用主へ説明することを通じて、農家が生きづらさを理解し、各支援機関と農家等が同じ目線を共有していることが挙げられる。農家は働き手に、「明日も来てくれよ」「お前がおらんかったら困る」といった声をかけ、それによって働き手も「あそこに行きたい」と言うようになった。居場所をあえて作らなくても、その農家さんのその場所が居場所になっている。また、官民組織を超えた連携もとれていた。農業だけでなく、林業・水産業・商店街・法務省（触法者の支援）・仏（地域の居場所としての寺）と福祉との連携に取り組んでおり、それにより地域包括ケアシステムが築かれている。

【パネルディスカッション】「中国四国の地域資源とつながりを活かした農福連携」

社会福祉法人 E.G.F（山口県萩市）（ノウフク・アワード 2022 優秀賞）事務局長 野稻泰二氏
「～「山里」は最高の福祉ケア～」

従来の知的障害者の就労支援からドロップアウトする方々が多くいる。彼らの特性を活かせるものとして農業が向いているのではないかと思った。福祉的な視点から見れば、自然の中で農業に取り組むこと、つまり毎日朝起きて太陽の光を浴び、土に触り、風に当たり、帰ってきたらお風呂に入って眠くなって寝ることが、福祉的ケアにとっては非常に効果がある。このリズムができると、どんな精神的な障害を持った方でも、半分くらいは福祉的なケアが落ち着く。それくらい農業は可能性を秘めている。当法人は「この世に無駄な人間はいない」と考え、農業についても同じく「農業に無駄なことはない」と考えている。農家の昔ながらの知恵には草を肥料にするなど無駄がなく多くの作業種がある。各々の特性に適する作業があるはずで、それを見つけていくのが我々の仕事である。農家の昔ながらの知恵や技術を残すことも私たちの目標である。奇声を発して寝転がる人が街中の作業所にいるのと畑にいるのでは全く違う。大きな声も広い畑では拡散してそんなに大きく感じない。障害者の方々ができることをよく理解した上で、かれらが活躍できる場を作るのが我々の仕事である。ハウス内の1万株の苗の様子を全て覚えている方もいる。責任を担う立場を任せることで、難のあったコミュニケーションや言葉遣いが落ち着くこともある。稲作の作業の時は、普段落ち着きがない人でも、落ち着きを取り戻す。彼らの活躍は、彼らの保護者の安心にもつながっている。

NPO法人 香川県社会就労センター協議会（香川県高松市）（ノウフク・アワード 2020 審査員特別賞）
農福連携コーディネーター 阿部隆弘氏

「実践報告「障害者と農業者の架け橋として」香川県における農福連携の現状と課題」

障害の種別を問わず、「障害者が働く」ことを支援し、障害者の工賃の増額を目的としている。なぜ工賃向上が必要かといえば、最低賃金で1日7時間月22日働いたとして約11万円、生活保護費は級地によって異なるものの住宅扶助を含めて単身世帯（20～40歳）で11～16万円であるが、就労系事業の利用者では、障害者基礎年金2級とグループホーム賃助成と工賃を合わせても約9万円であり、最低賃金や生活保護費の基準に達しない。共同受注農作業システムの農作業の留意点として、農業者・施設双方にメリットがあるように気を配ること、参加施設数を調整し希望時間までに作業を終了させること、職員が作業前に農業者ごとに作業内容や留意点を確認すること、種など定植し最後の土かけで作業状況が見えなくなる場合、必ず職員または同等の利用者が最終確認し土をかけること、植えて育てる楽しさ・成長を実感する喜び・収穫の楽しさ・働く喜びを知ること、農業者からの感謝を得ることにより地域で役立てる実感が得られることが挙げられる。依頼者からの感謝の気持ちが工賃増額につながるようにすることが重要である。農家と施設利用者の所得・工賃向上が生きがいややりがいにつながるよう、関係者は最善の努力を怠らないように。コーディネーターは、他人に接する時、言葉や態度は力まず肩の力を抜き、自然体で誠心誠意その人に自分ができる全てのことを考え、実行することが大切である。

社会医療法人正光会さんさん牧場（島根県益田市）（ノウフク・アワード 2021 チャレンジ賞）
サービス管理責任者 南日出夫氏

「いつでもだれでも、等しく陽の当たる場所～馬とともに歩む、わたしたちの取り組み～」

国体の馬術会場の後に、市に移管された益田市立馬事公苑の運営を委託され、乗馬クラブや特別に支援のいる子どもたちのホースセラピーを行っていたが、存続が厳しくなり廃止の方向になった。しかしホースセラピーに通われていた生徒の親御さんたちより、何とか残して欲しい、との声が多かった。そこで、障がい者の就労の場、教育・療育の場、市民憩いの観光牧場、グループホームの併設により、障がい者の生活の場となる複合施設として、当法人が2019年2月にさんさん牧場を開設した。牧場から出た馬糞を利用した循環型農業を今現在もやっている。

【ディスカッション】（コーディネーター） 農研機構西日本農業研究センター研究員 中本英里氏

中本：どのようにしてつながりが育まれたか。

公文：私は助けられたら助けられたことを返したくなる。困った人をいかに助けるかが重要であって、私だけではできず、困った人がいたら私は支援するし、私が困った時にはその人に助けられている。そのためにはネットワークが必要。関わる機関について知らねばならない。つながりが大事だということをネットワークのメンバーも理解していったからこそ、つながりが広がっていったのだと理解している。皆が小綺麗な格好で仕事に行けるわけではない。例えば引きこもりと言っても、引きこもり以前に困窮や精神疾患があり、働きたいという思いがあってもハローワークに足を運べないことがある。働きたくてもその土俵に立てず、働きに行ったらしてもコミュニケーションが取れず、心が折れて再び元の状況に陥り、家族から孤立することもある。農業は破れて汚れた服でも毎日来てくれたらそれだけで良いということを農家さんから教わった。そこで、農業と福祉が良いと感じるようになった。

野稻：カット工場を行っていたが、周囲の農家さんの規格外野菜を綺麗に収穫し安く買うことで、農家さんは栽培回転率が上がる。廃棄する予定だった野菜が山口県内の学校給食となる。多方面に良い影響を及ぼしていることで、他農家からも同様の収穫依頼が来てつながりが広がった。E.G.Fには山口県内でも最後の砦のように問題児が多く来るが、否定されて生きてきた人間が初めて人に感謝されることは、大きな効果をもたらす。自ら作業を志望するようになり、作業場でも問題行動を起こさず、職員は行かなくとも巡回だけで十分になってくる。ただし、福祉側がきちんと責任を果たすことが必要。

中国四国フォーラム実施後アンケート



回答者の所在地（回答37人）

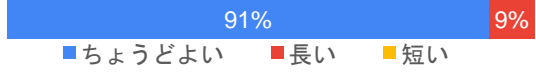
開催済みフォーラムの参加（回答35人）



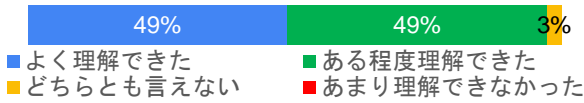
フォーラム参加方法（回答35人）



フォーラムの時間（回答35人）



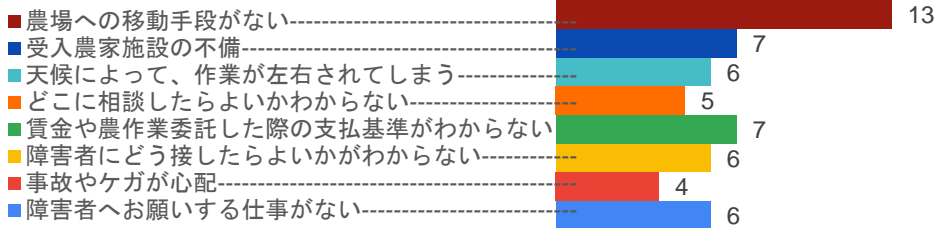
フォーラム理解度（回答37人）



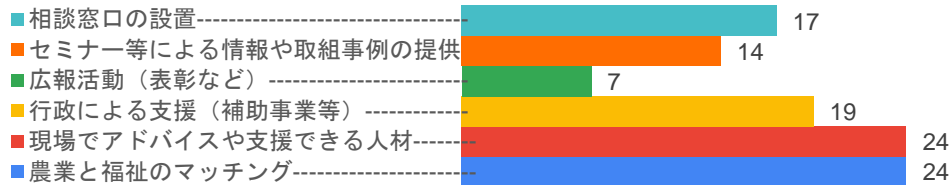
フォーラム内容の満足度（回答36人）



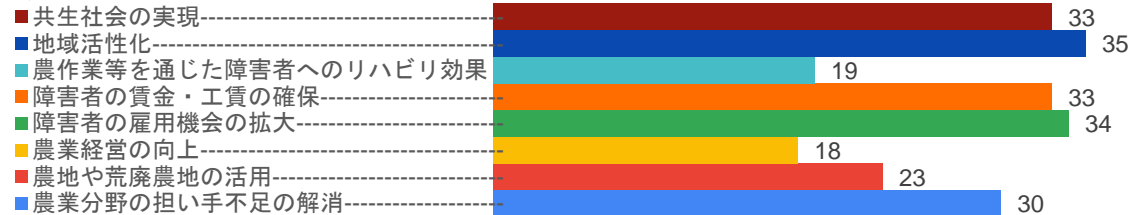
農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答30人、複数選択）



農福連携に取り組むのに必要なこと（回答35人、複数選択）



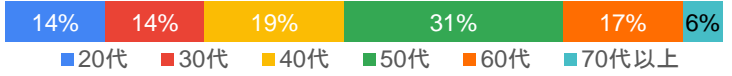
農福連携に期待すること（回答35人、複数選択）



職種（回答35人）



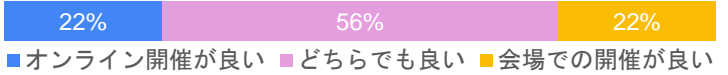
年齢（回答者36人）



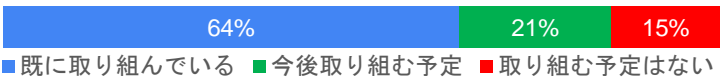
性別（回答者36人）



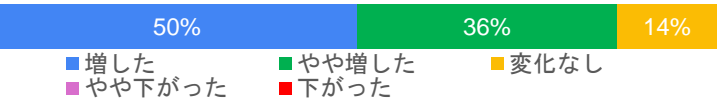
開催方法について（回答36人）



農福連携の取組状況（回答33人）



農福連携の取組意欲（回答36人）



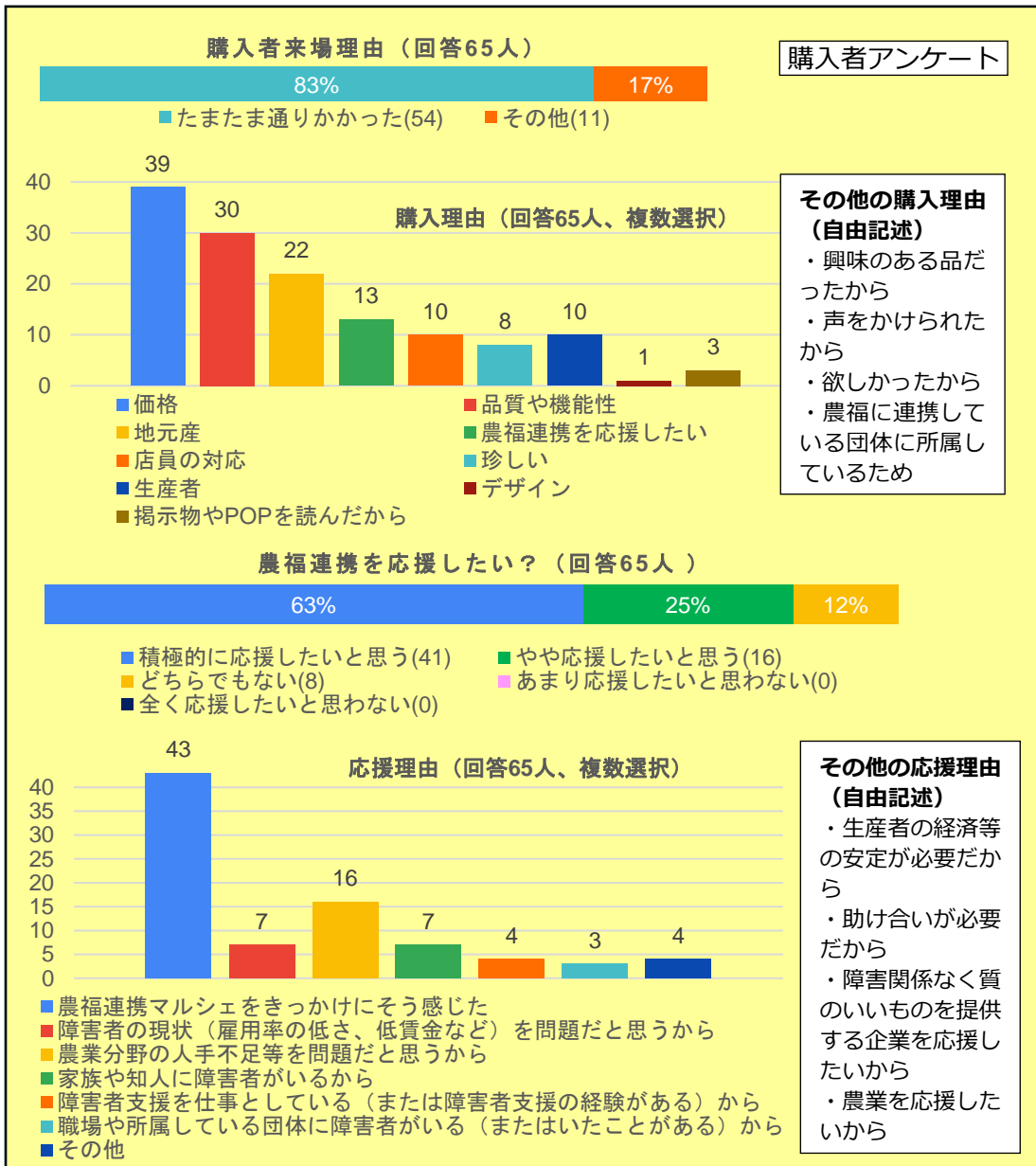
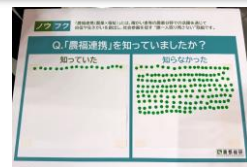
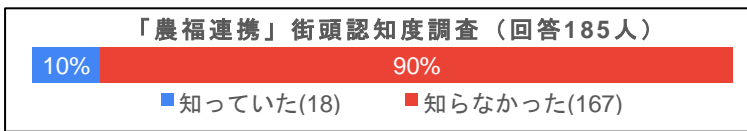
・ノウフク JAS の 6 次産業化が黒字にならない
 ・ほ場のトイレ
 ・移動させる職員がいない。足りない。
 ・開所時間と農業作業時間との違い。土曜日曜の作業員
 ・刑務所出所者等を受け入れていただくことへの理解促進と、受刑者への就農への意識付け
 ・農業設備の資金

・作業賃の交渉術
 ・障害への地域受容
 設備や機材を購入するための資金補助の充実
 ・設備投資の助成金
 農家さんの認知と理解

・マルシェ商品は、どこの商品も個々の色が出された商品で素敵な商品ばかりでした。
 ・フォーラム内でのマルシェ中継などとても素敵な取り組みだなと感じました。

マルシェ感想

・一過性にしないでほしいです。
 ・午前中伺いました。参加されていた皆さんの頑張っている姿が印象的でした。反面、歩いている一般客のみなさんが感心させていない様にも見えました。時間帯的なものがあったとは思いますが、通行客を引き留める、あるいは引き寄せる一工夫がほしかったと思います。参加者（出店者）の負担（主催側の費用で一定量を買ひ上げてしまう方法も考えられます）になりますが、アンケートに答えてくれたら、野菜を一品プレゼントするとか、テーブルエリアに人を引き寄せて、来たついでに覗いてもらえるような方法がないと、ノウフクの言葉が浸透していない現状では通常の販売イベントと思われると思います。
 ・出店者数が思ったより少なく寂しい感じだった
 ・「ノウフク」を PR するためには四方から見えるように 1m×4m くらいのノウフクロゴを設置し、横目を通り過ぎる方にもせめて言葉だけでも認知されるよう（ただの農産物販売でなく）農福を前面に出していく必要があると感じた。





左から菊川氏、神崎氏、小室氏、世古口氏、柏木氏、杉田氏

農福連携フォーラム in 近畿

【会場】TKP ガーデンシティ京都タワーホテル
 (京都府京都市下京区東塩小路町 721-1 9階 飛雲)
 【日時】2023/10/26(木)13:00~16:00
 【申込】現地：16人 オンライン：34人
 【当日】オンライン：47人

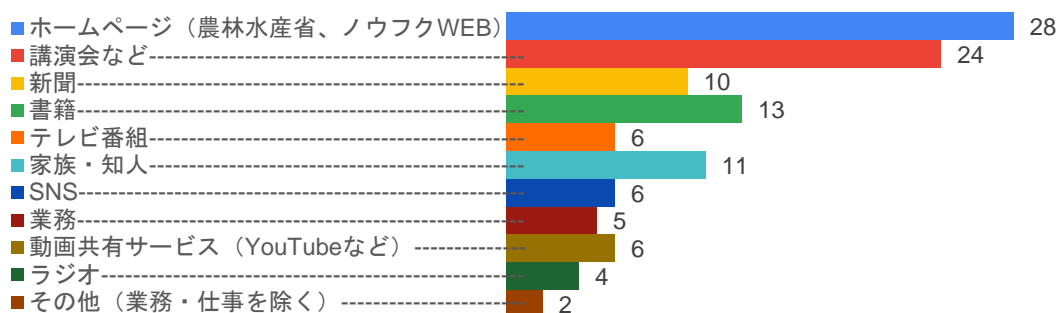
申込者の職業 (回答57人)



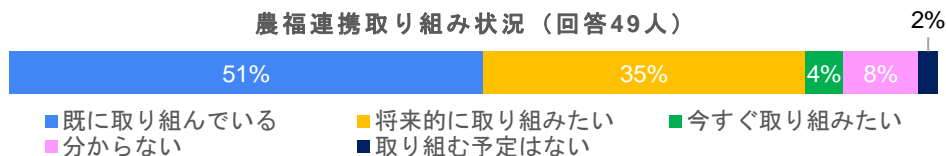
あなたは「農福連携」を知っていますか。(回答49人)



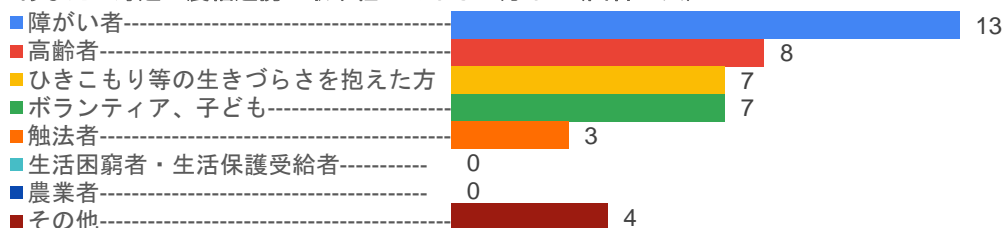
農福連携を何で知りましたか (回答47人、複数選択)



農福連携取り組み状況 (回答49人)



あなたの身近に農福連携に取り組んでほしい方は? (回答35人)



【講演1】「いずみ市民と生協で耕す、いずみエコロジーファームの農福連携コープモデル」

株式会社 いずみエコロジーファーム（大阪府和泉市）（ノウフク・アワード 2021 優秀賞）代表取締役 神崎裕也氏

元々は農業生産法人であり、その後に福祉の部署を作った。「『はたらく喜び、くらしに笑顔』誰もがイキイキと働き続けられる社会をめざして」が理念である。障害をお持ちの方が弊社で働くことで働く喜びや社会とつながりを持てるようにしたい。また、生産した野菜を消費者に買ってもらうその方にも喜んでほしい。障害をお持ちの方には最低賃金以上の報酬を支払うことによって、将来、共に暮らしている両親がもし亡くなられても心配なく生活できることを目標としている。設立の目的は食品リサイクル・ループの一翼を担うこと。生協から出る生ごみをゴミとして捨てることなく、堆肥を作り、野菜を育て、生協で売る。

【講演2】「地域と繋がり、ふだんのくらしをしあわせに、さくらテラスの農福連携」

医療法人弘英会 さくらテラス デイサービス・グループホーム（滋賀県大津市）管理者 小室雅紀氏

さくらテラスには自由に使っていける畑であるさくら農園があり、一人が全ての農作業を行うのではなく、それぞれの方が活躍できる工程を担ってもらい、つながりを持たせている。皆が関わることで多くの高齢者の生きがいに繋がっている。コロナを機に、道の駅に野菜を卸せずに困っていた事業者にさくらテラスの前で出店してもらった。また、入居者の食の楽しみのために外食できなかったことをきっかけに、地域の飲食店にお弁当をつくってもらい関りをもった。その飲食店は野菜の購入に手間がかかっており、さくらテラスとの関りをきっかけに野菜の卸の業者と繋がった。それぞれに困っていた課題が結びついて、広がっていった。さらに地産地消にこだわるクラフトビールの業者と繋がるなど、農福連携には地域が活性化していく相乗効果がある。当初は気力が薄かった利用者が、農作業に関心を示し、農作業をすることでいきいきとするようになった。野菜の販売にも興味を示され、数を数えることに支障があったが、そこをサポートすれば野菜の管理を頼むことができた。この方は外を眺めることが好きであり、野菜の販売状況を確認することその慣性がマッチすることで役割に繋がっていった。データ数は少ないが、農作業の経験に関係なく、農作業の前後で利用者はやりがいを感じ、満足度が上がり、幸福感が向上したり、また、収穫時の運動負荷は利用者の健康に寄与する結果がでている。農福連携は個々の健康や幸せに寄与すると同時に、地域共生社会のための仕組みづくりになるのではないかと感じている。

【パネルディスカッション】「近畿の地域資源とつながりを活かした農福連携」

三休合同会社（京都府京田辺市）（ノウフク・アワード 2022 フレッシュ賞）施設長 世古口敦嗣氏

地域の人と一緒にすることを大切にしている小さな福祉事業所を運営している。オープン前から地域の人々と話し合いを重ねた。多世代が関わり、どういうまちにしたいか、障害のある人のどこに生きづらさがあるのか、彼らが活躍するのはどういふところが良いのか、毎月話していく中、協力者を見つけ、土地を貸してくれる地主と出会い、農家さんとの出会いで販路が確保できるかもしれないという中で開始した。必ず障害がある人を話し合いに加えるということも心掛けた。農業を軸にすることを決め、6次産業化に至った。会社の利益のための利用者でもないし、就労訓練のための仕事にもしたくない。彼らと一緒に働く。その日々の中で関係性をつむぎ、働くしんどさも喜びも分かち合いつつ、彼らの目標が少しでも現実的に近づくとサポートがしたい。「一緒に働く」を体現化するために、メンバー主体の定例会議を毎月開催し、売上報告や、新たな仕事を受けるのにも、検討を行う。自分達は障害福祉の会社ではあるが、それだけではないのかという問いをずっと抱えていた。福祉は「つなぐ」役目があるから、就労支援だけではなく、その人がその人らしく暮らせるよう「地縁型コミュニティ」をつくることを目指している。地域の人たちや大学生、農家や農協、企業とつながって協力している。地域のつながりは副次的に就労支援の効果を持ち、一般就労へ進んだメンバーもいる。4年間で5名が一般就労へと進んだ。

社会福祉法人太陽福祉会菜の花作業所（和歌山県御坊市）（ノウフク・アワード 2021 チャレンジ賞）
農福連携担当 柏木克之氏

釜炊き自然塩造り作業所を障害者の就労支援施設として開設している。地元の漁業関係者の協力で紀伊水道の海水を汲み上げる。海水を釜炊きする際には地域の廃材を燃料にしている。早朝から高齢者のボランティアの方々が火を入れてくれて、利用者が炊き上げる。他社の自然塩と比べてミネラルの含有量が多い。コロナ禍では、地元の飲食店がこだわりの原材料として塩屋の天塩を使い、不況を乗り切った。地域産業の活性化に貢献したい。釜炊き自然塩を製造する過程で副産物としてできる「にがり」に含まれるマグネシウムやミネラルを畑に散布すると、土壌が肥える。科学的立証はないが、撒くことによってなめくじが来なくなったという話をいちご農家から聞いた。大根を栽培する作業所では、大根の質が上がると聞いた。菜の花作業所は塩を中心にして地域の福祉拠点となっている。地域の引きこもりの方々や高齢者の方々がいつでも来られるよろず相談所を作りたい。

NPO 法人縁活（滋賀県栗東市）代表 杉田健一氏

理念は「みんなで笑う、みんなで暮らす、みんなで働く」。作業所として自然栽培（無農薬・無肥料）で農業を実施。食事処をオープンし、規格外野菜を使ったり、地域の天然酵母のパンを並べたりしている。毎日食べても体に良い昼食を自分たちで食べる場所でもあり、同じ昼食をメニュー化して地域の方々も食べられるようにしている。

畑でどう遊べるかという視点から、日中の一時支援事業を始めた。コロナ禍に草刈りの練習をしたところ、利用者がやる気を出し、仕事後にも意欲を見せた。隣の田の草を勝手に刈ったところ、隣の田のオーナーがビールを持ってきてくれた。草刈りをしていた人たちはさらにやる気を出し、また別の田の草刈りを行った。これはもはや仕事ではなく遊びだと思い、遊びとしての日中一時支援事業を始めた。コロナ禍の夕方持て余した時間に色々なところで草刈りをして遊んでいたところ口コミが広まり、農政課経由で化成肥料を撒く仕事を受託した。遊びだから料金はいらぬと言っていたが、農家からどうしても払いたいと言われ、1kg ほどのすき焼き用の肉をもらったが、肉のお裾分けは難しいため、皆ですき焼きパーティーをした。そこから新たなつながりができ、葡萄畑をもらった。また、小学校の田んぼを管理している高齢者から管理を任された。さまざまに事業が増えていく中で、自分たちの「縁活」ができていく。

【ディスカッション】（コーディネーター） 神戸学院大学現代社会学部現代社会学科講師 菊川裕幸氏

菊川：つながり作りの工夫は？

世古口：一緒に何かをする余白を作ったり、相手が考える余地を与えたり、その人に役割を提示したりなど、作り込みすぎず一緒にどう作るか、結果よりもプロセスや関係をゆっくり醸成することを重視し、そのための余白作りを大切にしている。

杉田：貸し農園（体験農園）をやっている。体験農園でどれだけ遊べるかがテーマ。丸型の畑を作り、花を植えたら、畑から公園のようになった。四角い畑に丸を作ると、間が生まれ、そこにベンチを置くことができる。散歩しているお婆さんが犬と一緒に座れる。体験型農公園のようなものを作ろうとしている。貸し農園をやると、コミュニティができる。障害をお持ちの方がその農園の運営に関わり、皆の輪の中に自然と入って行って、皆の作業を手伝っている。

菊川：これから農福連携を取り組もうとしている方や取り組み始めた方へのアドバイスを聞きたい。

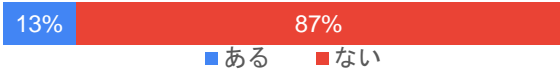
杉田：福祉の人間なので、利用者の自己実現のためにやっているということから外れないでいること。自己実現のための手段を目的化しないように気をつけている。

近畿フォーラム実施後アンケート



回答者の所在地（回答22人）

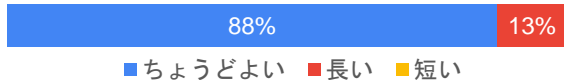
開催済みフォーラムの参加（回答23人）



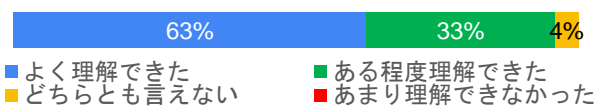
フォーラム参加方法（回答者24人）



フォーラムの時間（回答24人）



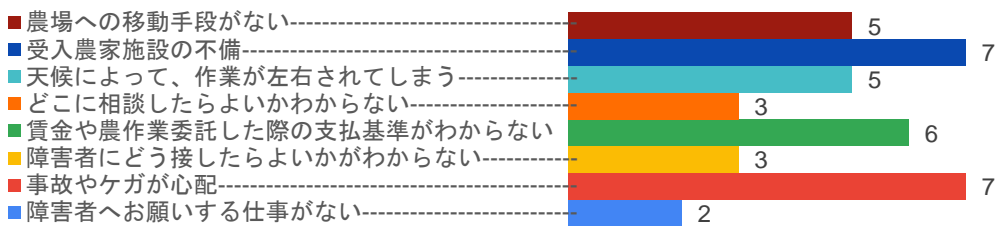
フォーラム理解度（回答24人）



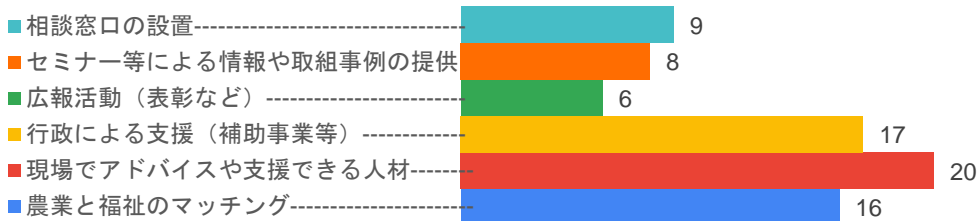
フォーラム内容の満足度（回答24人）



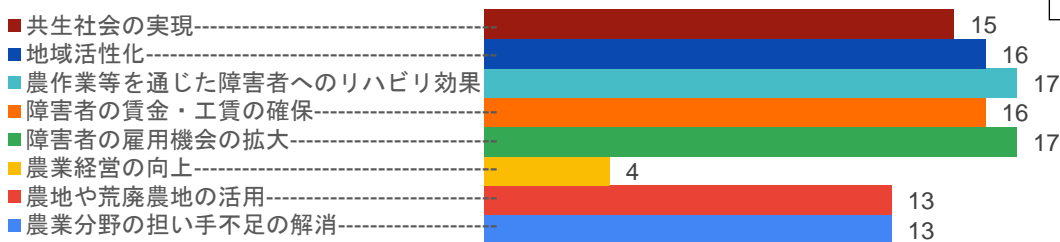
農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答18人複数選択）



農福連携に取り組むのに必要なこと（回答者24人、複数選択）



農福連携に期待すること（回答24人、複数選択）



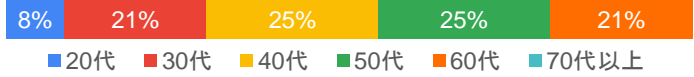
マルシェの感想

- ・各事業所の特徴がチラシなどであれば、持ち帰って見れるのでいいと思いました。どう言う事業所なのかが分かりにくかった。
- ・作った方々がお客様の反応を直接知れる良い機会と感じた。
- ・出品されているものの質が良かった。フォーラム会場と近いととっても寄りやすい。
- ・全体的な雰囲気明るく、楽しそう。
- ・時期的に加工品が多くなる時期ですが、珍しい食材などもあり、加工品などのバランスも素敵でした。
- ・早い時点で、売り切れるものが多かった。熱心に取り組まれていることに感心した。
- ・魅力的な商品を元気よく販売されていた。販売ブースがもう少し目立つ工夫があるとよいと感じた。

職種（回答数23人）



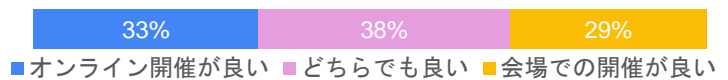
年齢（回答者24人）



性別（回答者23人）



開催方法について（回答者24人）



農福連携の取組状況（回答21人）



農福連携の取組意欲（回答23人）

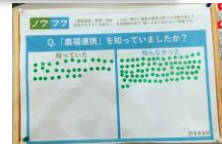


その他の必要なこと（自由記述）

- ・耕作放棄地、市街化調整区域などを福祉施設が活用しやすい制度を整備してほしい。
- ・就農希望者やボランティアの受け入れ先
- ・利益確保

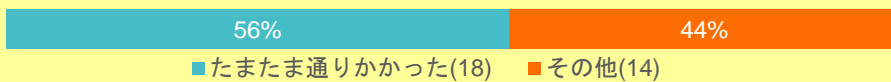


『農福連携』街頭認知度調査（回答112人）

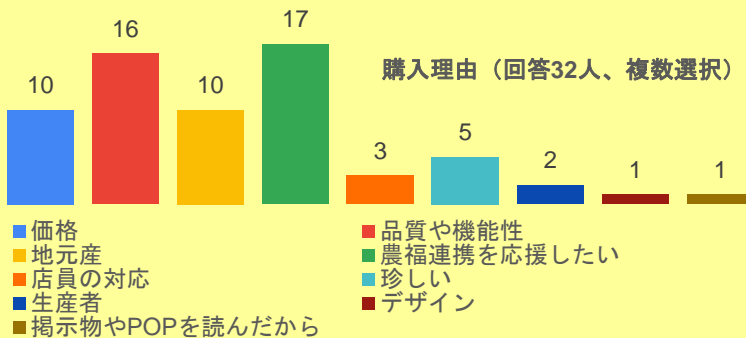


購入者アンケート

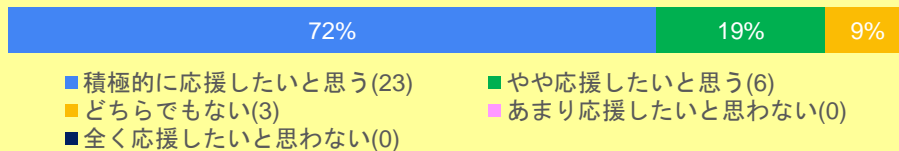
来場理由（回答32人）



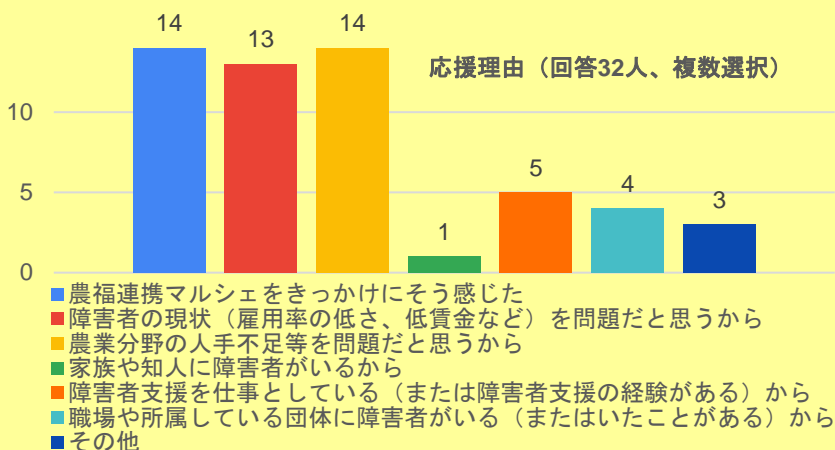
購入理由（回答32人、複数選択）



農福連携を応援したい？（回答32人）



応援理由（回答32人、複数選択）



その他の応援理由

・誰でもより住みやすい社会にする取り組みだから。
 ・もう少し価格を上げてても良いのでは
 ・農福連携をきっかけに、社会問題の解決のきっかけになると感じているから

農福連携 マルシェ in 東海 名古屋開催

2023 11/8(水) 10:00~17:00

～農福連携魅力物語～

東海地域の農福連携の魅力が満載!農業と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味しい加工品が東海各地から大集合!!11月8日10時から、オアシス21にてマルシェを開催します!!!皆様のご来場を心よりお待ちしております。

場所▶オアシス21 愛知県名古屋市中区東区1丁目11-1

農福連携フォーラムも同時開催!

名古屋三交ビル ツドイコ名駅東カンパレンスセンター
愛知県名古屋市中区名駅3丁目1-7
13時~16時まで開催いたします! (雨天決行)

参加事業者と商品(予定)

- 株式会社 コトモファーム (愛知県) 米粉のバウムクーヘン ほか
- 株式会社 アグリリオ (愛知県) 超濃厚いちごミルクの素、濃厚いちごミルクの素、日本ミドリハチの濃厚ハチミツ
- 特定非営利活動法人 クオーレ (愛知県) 島根イチゴのフルーツケーキ、田原市産花巻のプリン ほか
- 就労継続支援事業所 それいゆ (岐阜県) 美濃蜜芋(平手・焼き芋)、黒にんにく、やさいお刺し(スナック菓子) ほか
- 株式会社JAぎふ はっぴいまるけ (岐阜県) 主な産品味噌、野菜、ハビスカステイ、特別栽培米ハツモ(新米) ほか
- 社会福祉法人 あさみどりの会 れいんぼうワークス (愛知県) さつまいも(紅はるか)、利用者の方の腕を活用したオリジナルデザインシャツやバッグ、スウェーデン産綿織物 ほか
- 株式会社 マザーズリヴ (愛知県) プリン(プレーン・塩キャラメル・抹茶いちご・薬みかん)、フィンシェ(プレーン・塩)、パウンドケーキ(ブルーベリー・みかん・栗)、みかん ほか
- 株式会社 TFF 就労継続支援A型 ひなたぼっこ園 (岐阜県) 園床産菜、乾椎茸、黒にんにく、旬の野菜 ほか
- 三葉果 (三和油化工業株式会社) (愛知県) エディブルフラワー、ミニトマト、お菓子
- 社会福祉法人 無門福祉会 (愛知県) 米、椎茸(有機)、季節の野菜(未定)、農産物加工品(カレー、せんべい、ジャム等) ほか
- 就労継続支援A型 手のひら (愛知県) 露地野菜 ほか

※写真はイメージです。

マルシェの内容は、予告なく変更する場合がございます。

主催：株式会社農都共生総合研究所

農福連携フォーラム in 東海 名古屋開催

2023 11/8(水) 13:00~16:00

農福連携の魅力とは?

障害者等の就労の場の創出だけでなく、農業従事者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農産物の維持・活性化等が期待でき、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりをみせています。

農福連携の現場には、いきいきと農業に取り組む人々や、人々とのつながり、そして丹精込めて育てられた農産物やそれらの付加価値を高める加工品など、多彩な魅力がふたれています。この機会に是非、東海の地域資源を活用した農福連携のさまざまな取組について学んでみませんか。

参加費 無料

農福連携フォーラム

開催形式
ハイブリッド開催 (現地参加 + オンライン参加)
現地▶名古屋三交ビル ツドイコ名駅東カンパレンスセンター Room D
愛知県名古屋市中区名駅3丁目1-7

農福連携マルシェも同時開催!

オアシス21 露地の広場
愛知県名古屋市中区東区1丁目11-1
10時~17時まで開催いたします! (雨天決行)

応募期間
11月6日(月)まで

定員
現地参加：50名 オンライン参加：300名以内
※オンラインは、200名程度となります。

お問い合わせ
株式会社農都共生総合研究所
noufuku@notosoken.jp
※メールアドレスは二次元的な内容に限定し、申請上です。

お申込はこちら

フォーラム内容
ノフクアワードに受賞・登壇された方を中心に講演とパネルディスカッションを行います。

講演
[テーマ] 朋友の組織づくりと地域連携 ~人を繋ぎ農福連携とは~

ノフクアワード2022 受賞者
ノフクアワード2022 受賞者
伊藤 良一氏
社会福祉法人 朋友 理事長

パネルディスカッション
[テーマ] 東海の地域資源とつながりを活かした農福連携

ノフクアワード2022 優秀賞
株式会社DAI 専務取締役
中島 望氏
ノフクアワード2021 フレッシュ賞
株式会社JAぎふはっぴいまるけ 統括部長
高橋 玲司氏
ノフクアワード2022 フレッシュ賞
株式会社コトモファーム 代表取締役
齋藤 秀一氏

(コーディネーター)
静岡県立農林環境専門職大学 講師 太田 智氏
※フォーラムの内容は、予告なく変更する場合がございます。

主催：株式会社農都共生総合研究所

農福連携 魅力物語 MAP in 東海

「農福連携フォーラム&マルシェin東海」では、魅力ある様々な取組が大集合! 東海のさまざまな地域で、農業を通じて障害者などが働く場所や居場所をつくっている取組をご紹介します。

農福連携の魅力ある取組の詳細は下の二次元的コードからご覧ください。

株式会社 コトモファーム
所在地：愛知県犬山市
農福連携フォーラムパネリスト 農福連携マルシェ
ノフクアワード2022優秀賞受賞、自製米粉100%のフルーツプリンパウンドケーキ等の加工品の製造販売を行うなど、地元産産物をベースとした農福連携に取り組んでいる。
ホームページ

社会福祉法人 無門福祉会
所在地：愛知県豊田市
農福連携マルシェ
知的に障がいのある方と一緒に、農業や肥料を使用した自然栽培という手法で、地域の林耕地を活用した農業に取り組んでいる。地元の農家さんや企業のボランティアさん、小学校の子供達など、様々な地域の方と繋がりがながら、みんなで楽しく活動を行っている。
ホームページ

三葉果 (三和油化工業株式会社)
所在地：愛知県刈谷市
農福連携マルシェ
刈谷市にある化学製品メーカー。農産物のリユース・リサイクルに貢献しやすい「食品づくり」を目指し、環境負荷の軽減や資源の有効利用に注力。地域の福祉事業や農福連携に立ち上げた三和農産ブランド「三葉果」を生産し、女性や障がいを持つ人等の雇用促進と地域貢献に取り組んでいる。
ホームページ

株式会社 マザーズリヴ
所在地：愛知県知多郡
農福連携マルシェ
常滑市を使用し、餅は全て国産のものを使用し、すべて店内の工場ですべてつとめて丁寧に手作した新鮮な「チャーシューメン」やフィンシェ、パウンドケーキ等の販売を行っている。
ホームページ

株式会社 アグリリオ
所在地：愛知県豊橋市
農福連携マルシェ
個人と農家を繋ぎ、働きたい個人と人手不足に悩む農家をマッチングする農Howや、福祉施設の工賃UPや生きがい等の創出と人手不足に悩む農家をマッチングする農Care等の取組を行っている。
ホームページ

社会福祉法人 朋友
所在地：三重県津市
農福連携フォーラム講演者
ノフクアワード2022準グランプリ (人を繋ぎ、受賞。農業のみならず飲食業にも取り組むことで、障害者が作業を選択する可と可能とし、作業効率の向上と収入を実現している。
ホームページ

株式会社 JAぎふ はっぴいまるけ
所在地：岐阜県岐阜市
農福連携フォーラムパネリスト 農福連携マルシェ
ノフクアワード2021フレッシュ賞受賞。単位JAで全国初となる特務子会社として新たなモデルを構築し、農作物や作業補助、味噌の製造や畜産等、様々な業務を行っている。
ホームページ

就労継続支援A型 手のひら
所在地：愛知県稲沢市
農福連携マルシェ
敷地内や近隣にある畑やハウスを季節に応じた野菜を産地で栽培している。栽培期間中は農業不使用・化学肥料不使用・除草剤不使用でこだわりの野菜作りを行っている。
ホームページ

社会福祉法人 あさみどりの会 れいんぼうワークス
所在地：愛知県愛西市
農福連携マルシェ
自然栽培でさつまいも等の様々な作物を栽培しているほか、エンジンホースとよめる10丁の検査等の軽作業や、スウェーデン刺繍及び刺繍入りの商品作り、再生ダンボールを使った商品作り等を行っている。
ホームページ

※ 農福連携マルシェ出店者は予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。



左から太田氏、高橋氏、中島氏、斎藤氏、伊藤氏

農福連携フォーラム in 東海

【会場】名古屋三交ビル ツドイコ名駅東カンファレンスセンター
(愛知県名古屋市中村区名駅3丁目2 1-7)

【日時】2023/11/ 8(水)13:00~16:00

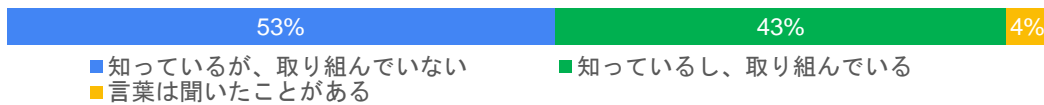
【申込】現地：13人 オンライン：64人

【当日】オンライン：68人

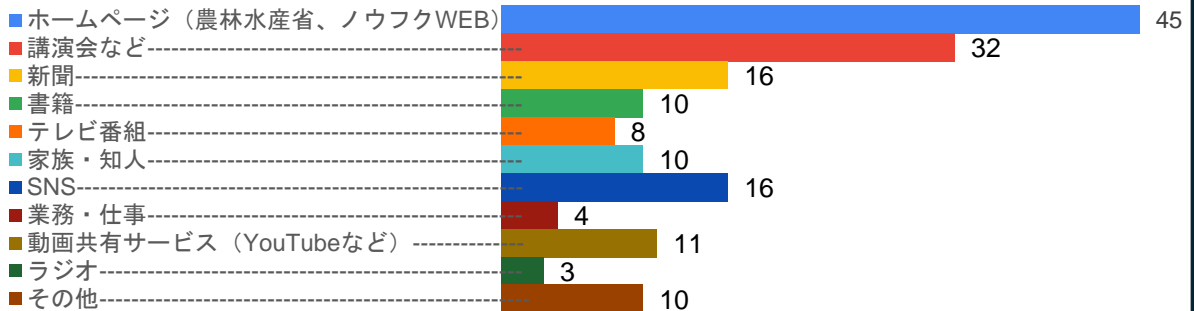
申込者の職業（回答76人）



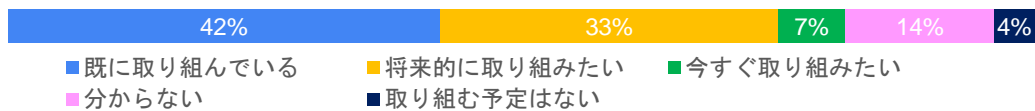
あなたは「農福連携」を知っていますか（回答76人）



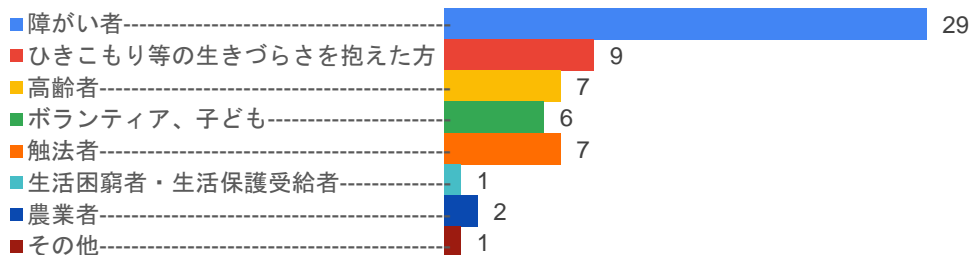
農福連携を何で知りましたか（回答70人、複数選択）



農福連携取り組み状況（回答76人）



あなたの身近に農福連携に取り組んでほしい方は？（回答62人）



登壇者発言の要点アーカイブ動画 <https://youtu.be/prxyXIOSWNE?si=kgW2a5ascYf-IR4M>

【講演】「朋友の組織づくりと地域連携～人を耕す農福連携とは～」

社会福祉法人朋友（三重県鈴鹿市）（ノウフク・アワード 2022 準グランプリ「人を耕す」）
理事長 伊藤良一氏

福祉の世界に入る切っ掛けは、転落事故を経験し、自分自身が障害を持ったことにある。入院中に多くの障害者と出会い、厳しい就労実態を知ったことから、障害者になった自分だからこそできる仕事があるのではないかと、という想いから社会福祉法人を立ち上げた。設立時は、冷暖房が効いた綺麗な工場で働ければ喜んでくれると思っていたが、実際に希望する職種は様々で、それまでのスキルを活かして健常者に交じって仕事がしたいという人も多かった。そのような利用者の想いに応えるために障害者の正社員雇用を実現させ、製造業の他に農業と飲食障害者の職場を作るようになった。障害者の施設だからこそ、一般の会社より QCDES 全てにおいて勝てるレベルを追求したいと考えている。色々な会社が障害者雇用に取り組みれば、多様な職業・職種を障害者に提供でき、職業の選択の幅が広がると思っている。利用者の工賃を向上させるためには、6 次化などで高価格の商品開発が必要であるが、独自製品を生み出すことは簡単ではないため、地域との連携が重要となる。

【パネルディスカッション】「東海の地域資源とつながりを活かした農福連携」

株式会社 DAI（岐阜県関市）（ノウフク・アワード 2022 優秀賞）専務取締役 中島望氏
「円空里芋の産地を支える農福連携の取り組み」

今までは JA などの農業サイドとの連携が多かったが、企業との連携にチャレンジし、自分たちではできない野菜加工の商品開発を行った。産福連携×農福連携の取り組みである。株式会社 DAI の農福連携が成功した理由は 2 つある。1 つは中立な立場の方のサポートがあったこと。作業内容や手順だけでなく、決めにくい委託工賃など、建設的なコミュニケーションが取れた。もう 1 つは、地域社会の問題解決の一役を担ったこと。円空里芋という特産品に関わることで、地域コミュニティの活性化に繋がったと感じている。今後、農福連携が発展するには、農福連携の中に企業や住民も含んでいくことが必要である。企業の加工部分に福祉サイドの野菜を取り入れた商品開発を行い、災害備蓄品を作ることも予定している。

株式会社 JA ぎふはっぴいまるけ（岐阜県岐阜市）（ノウフク・アワード 2021 フレッシュ賞）
統括部長 高橋玲司 氏「地域共生社会の実現に貢献する～地域に貢献する JA をめざして～」

JA ぎふはっぴいまるけは農業と福祉という意味での「農福連携」という言葉は使わないようにしている。福祉ではなく会社であるから、あくまでも農業が生業となるよう肝に銘じて働いている。はっぴいまるけの「はっぴい」は楽しい・幸せを表し、「まるけ」は岐阜弁で、〇〇でいっぱいという意味。幸せでいっぱいという意味と、勝ち負けのあるウインウインではなく、happy-happy な関係を目指し、障害者も健常者も当たり前で共生する社会を実現するために活動を行っている。家族や保護者との対話を重視し、3 者面談の実施や家庭訪問を行う。農園で集う、をテーマに多様な人が集まる体験農園を開設し、障がい者から地域の人たちまでが集う。

株式会社ココトモファーム（愛知県犬山市）（ノウフク・アワード 2022 フレッシュ賞）
社長 齋藤秀一氏

「誰ひとり取り残さない居場所を創る～ココトモファームが取り組む農福連携×6 次産業～」

49 歳の時に ADHD と診断を受けた。弟は統合失調症、妻の妹は双極性障害と知的障害を持っており、娘は遺伝で ADHD と双極性障害を発症している。家族に障害がある人がたくさんいることから気持ちがわかる立場である。子どもの頃から農業に携わり、大人になっても働ける環境を作ろうと試みたが、職員の負担や施設経費の増加から実現はできなかった。そこで農業と福祉の間に商業を入れ、業務内容が多様化することで、それぞれの障害者に合った仕事ができるようになった。ココトモは元々子どもたちの施設であり、子どもたちが大きくなった時の居場所を創りたい。誰ひとり取り残さない居場所を創るために取り組んでいる。就労継続支援 B 型事業所「ココトモワークス」の実施から、農福連携の取り組みが地方創生に繋がっていると感じる。住む場所、働く場所、地域と繋がる場所を創っていくことが大切であると考えている。

【ディスカッション】

（コーディネーター）静岡県立農林環境専門職大学生産環境経営学部 講師 太田智氏

太田：これから農福連携に取り組む人は何から始めたらいい？

中島：地域の人が必要としていることをやるのが 1 番。何を必要としているかは地域の人にしか分からない。

齋藤：地球温暖化に伴い、高温障害に対応した作物にチャレンジすることも、経営戦略としてはよい。今まで栽培できなかった作物が栽培できる可能性がある。

太田：農業と福祉との間でどのようなギャップを感じる？

中島：農家側が求めるのは即戦力であるが、福祉側にはそれに比べられる人材が少ない。仕事の評価や人選を経て、最低賃金が成立する。

太田：農家側から、苦言を受けたことは？

高橋：給料は払えないと言われたことがあるが、実際に自分が作業現場に足を運んでケアを行うことで、農家との信頼を構築した。最低賃金以上もらえないところとは無理に契約しない。

齋藤：福祉側は業務の切り出しを行うが、農家側にはその概念がない。農業の楽しい部分を切り出して障害者が楽しめる場所作りをしていけば、作業人数も作業時間も増えると思う。

東海フォーラム実施後アンケート



回答者の所在地（回答23人）

開催済みフォーラムの参加（回答23人）



フォーラム参加方法（回答23人）



フォーラムの時間（回答23人）



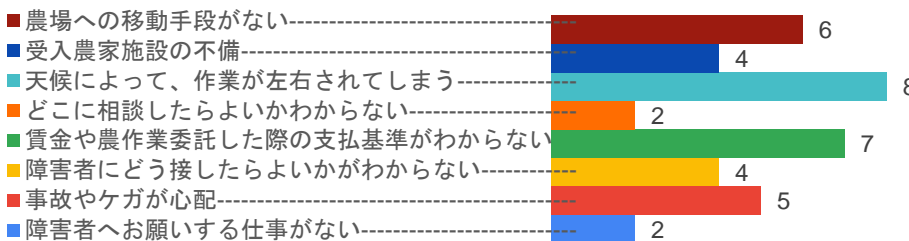
フォーラム理解度（回答22人）



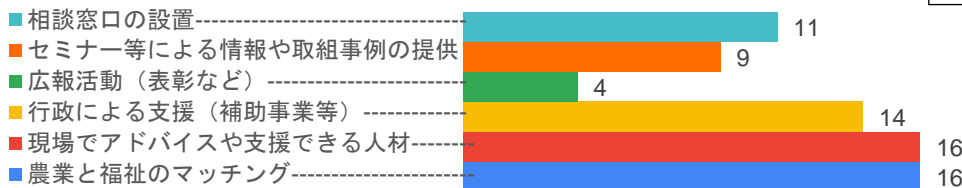
フォーラム内容の満足度（回答22人）



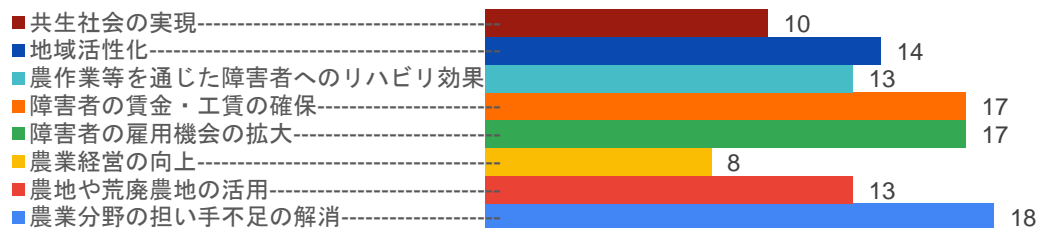
農福連携に取り組むに当たって、主な課題（回答19人複数選択）



農福連携に取り組むのに必要なこと（回答22人、複数選択）



農福連携に期待すること（回答23人、複数選択）



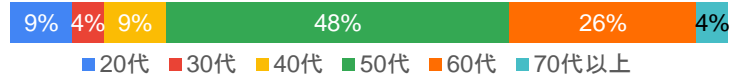
マルシェ感想

ブース毎に目で分かる紹介パネルなどがあり、直接、店の方と話せなくても特徴がわかり、勉強になりました。また、取り扱い商品も魅力的な品ばかりで、障害者雇用の一部でしょうけれど、垣間見ることができて良かったです。ありがとうございました。

職種（回答23人）



年齢（回答24人）



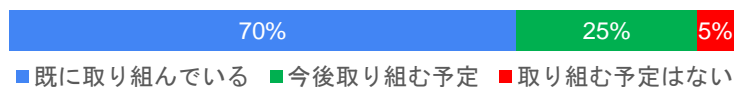
性別（回答23人）



開催方法について（回答22人）



農福連携の取組状況（回答20人）



農福連携への取組意欲（回答22人）



その他の課題（自由記述）

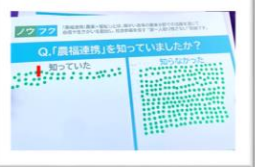
- ・最近の夏が暑すぎる
- ・就労時間（早朝）
- ・設備を整えるための資金援助（補助金など）のハードルが高い
- ・農業に携わる福祉事業所の掘り起し
- ・農福連携という言葉自体がまだまだ浸透していない。
- ・農福連携に対し、漠然とした不安を持っている農業者が多いのではないかと思う。

その他の必要なこと

（安定収穫、永く続けるための農業を運営するための）設備投資の資金援助の充実

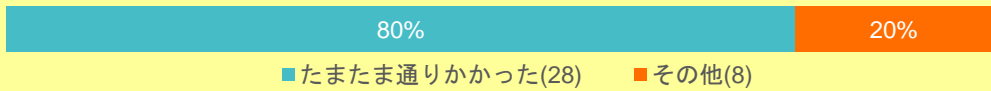


『農福連携』街頭認知度調査（回答273人）

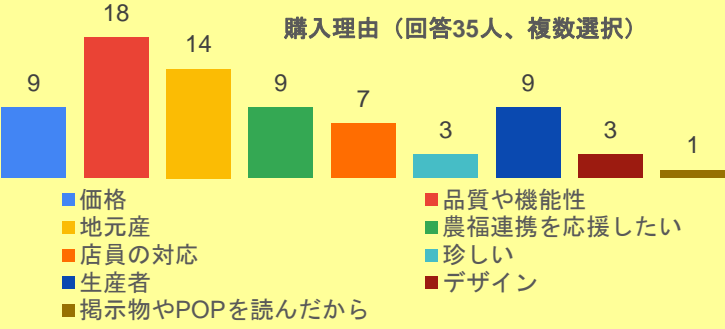


購入者アンケート

来場理由（回答36人）

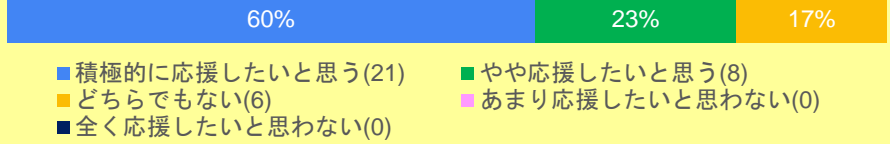


購入理由（回答35人、複数選択）

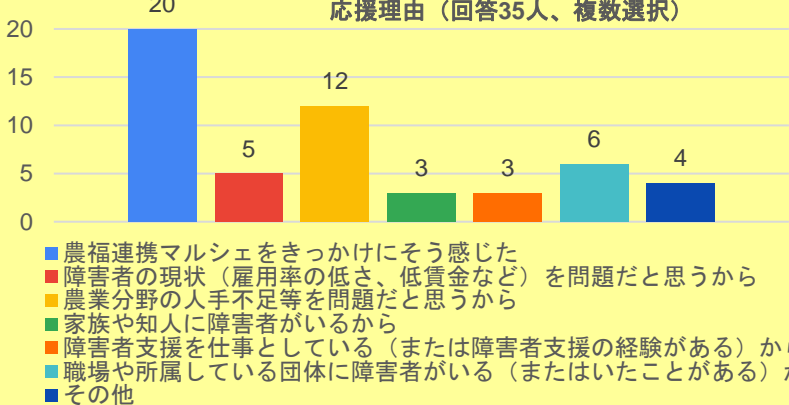


その他の購入理由
 ・使う予定がある
 ・良心的だったから

農福連携を応援したい？（回答35人）



応援理由（回答35人、複数選択）



その他の応援理由
 ・地元の商品が売っているから
 ・地産地消を応援したい
 ・人それぞれだから
 ・食に興味がある

農福連携 マルシェ in 九州

長崎開催

2023 12/7 (木) 10:00~17:00

～農福連携魅力物語～

農福連携の魅力が満載! 農業と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味し加工品が九州各地から大集合!! 12月7日10時より、長崎県1階アーケードにてマルシェを開催します!! 皆様のご来場を心よりお待ちしております。

場所 ▶ 長崎県1階アーケード
長崎市浜町7番11号

農福連携フォーラムも同時開催!

出島メッセ長崎102
長崎県長崎市上町4-1
13時~16時まで開催しています!
(農業参加!)

参加事業者と商品(予定)

- 1 社会福祉法人 南高愛陽会 (長崎県)
アスパラガス茶、乾麺、チョコレート、ポップコーン ほか
- 2 社会福祉法人 出島福祉村 (長崎県)
びわ茶、珈琲、ジャム、クッキー、マイン ほか
- 3 大隅半島 ノウファクコンソーシアム (鹿児島県)
お茶、ハーブティー、スイーツ ほか
- 4 株式会社 誠児 (鹿児島県)
米、しいたけ、温州みかん ほか
- 5 南九州農福連携コンソーシアム (宮崎県・鹿児島県・熊本県)
ミニトマト、スティックセニョール、ビーマン、ねぎ、赤唐辛子 ほか
- 6 熊本県農福連携協議会 (熊本県)
いんげん、じゃがいも、ビーマン、わけぎ、みかん ほか
- 7 NPO法人 熊本福祉会 (熊本県)
いんげん、じゃがいも、ビーマン、かぼちゃ、スイスチヤード ほか
- 8 社会福祉法人 ハイジ福祉会 (福岡県)
ミドト・マト、ガベラ ほか
- 9 福岡少年院 (福岡県)
旬の野菜

※マルシェの内容は、予告なく変更する場合がございます。

農福連携フォーラム in 九州

長崎開催

2023 12/7 (木) 13:00~16:00

参加費 無料

農福連携の魅力とは?

障害者等の就労の場の創出だけでなく、農業従事者の減少等の課題を抱える農業側にとっても、人手の確保や地域農業の維持・活性化等が期待でき、「農業」と「福祉」の双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを生んでいます。

農福連携の現場には、いきいきと農業に取組む人々や、人と人のつながり、そして丹精込めて育てられた農産物やそれらの付加価値を高める加工品など、多彩な魅力があります。この機会に是非、九州の地域資源を活用した農福連携のさまざまな取組について学んでみませんか。

農林水産省 令和5年度農山漁村振興交付金事業

農福連携フォーラム

開催形式
ハイブリッド開催 (現地参加 + オンライン参加)

現地 ▶ 出島メッセ長崎102
長崎県長崎市上町4-1

オンライン ▶ 出島メッセ長崎

農福連携マルシェも同時開催!

長崎県1階アーケード
長崎市浜町7番11号
10時~17時まで開催しています (農業参加!)

定員
現地参加: 50名 オンライン参加: 300名以内
※オンラインは、Zoom利用となります。

お問い合わせ
株式会社 農都共生総合研究所
noufuku@notosoken.jp

お申し込みはこちら

主催: 株式会社 農都共生総合研究所

農福連携 魅力物語 MAP in 九州

「農福連携フォーラム&マルシェin九州」では、魅力ある様々な取組が大集合! 九州のさまざまな地域で、農業を通じて障害者などが働く場所や居場所をつくっている取組をご紹介します。

農福連携の魅力ある取組の詳細は下の二次元コードからご覧ください。

社会福祉法人 南高愛陽会
所在地: 長崎県諫早市
農福連携フォーラム/マルシェ
ホームページ

社会福祉法人 出島福祉村
所在地: 長崎県長崎市
農福連携フォーラム/マルシェ
ホームページ

株式会社 誠児
所在地: 鹿児島県鹿児島市
農福連携マルシェ
ホームページ

大隅半島 ノウファクコンソーシアム
所在地: 鹿児島県大隅半島地域
農福連携フォーラム/マルシェ
ホームページ

社会福祉法人 みやこ福祉会
所在地: 沖縄県宮古島市
農福連携フォーラム/マルシェ
ホームページ

福岡少年院
所在地: 福岡県福岡市
農福連携マルシェ
ホームページ

社会福祉法人 ハイジ福祉会
所在地: 福岡県八女市
農福連携マルシェ
ホームページ

NPO法人 熊本福祉会
所在地: 熊本県熊本市
農福連携マルシェ
ホームページ

南九州農福連携コンソーシアム
所在地: 宮崎県・鹿児島県・熊本県
農福連携マルシェ
ホームページ

熊本県農福連携協議会
所在地: 熊本県
農福連携マルシェ
ホームページ

※農福連携マルシェ出店者は予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。



左から、渡部氏、宇野氏、池田氏、伊志嶺氏、今村氏、結城氏

農福連携フォーラム in 九州

【会場】 出島メッセ長崎 102 (長崎県長崎市尾上町4-1)

【日時】 2023/12/7(木)13:00~16:00

【申込】 現地：23人 オンライン：83人

【当日】 現地：26人 オンライン：60人

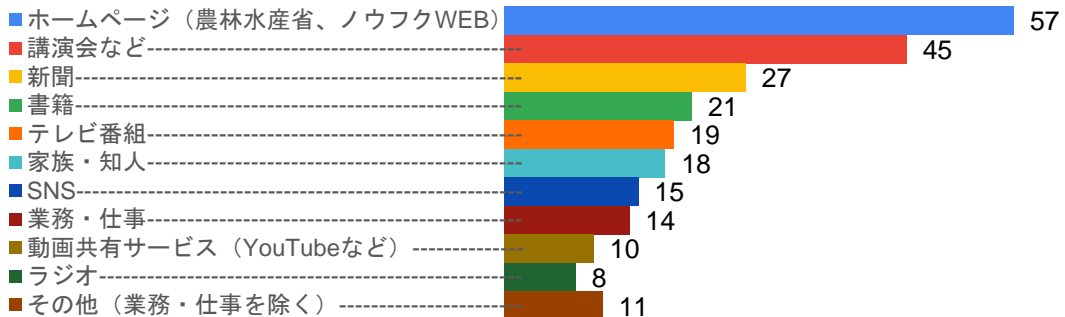
申込者の職業 (回答106人)



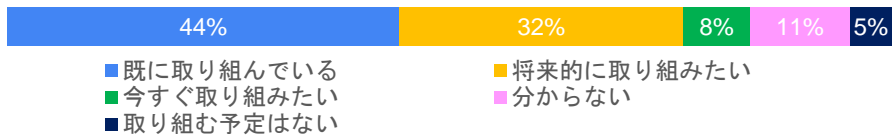
あなたは「農福連携」を知っていますか？ (回答106人)



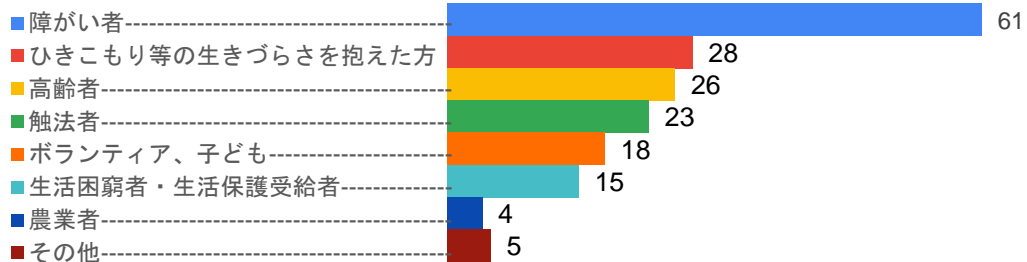
農福連携を何で知りましたか (回答100人、複数選択)



農福連携取り組み状況 (回答106人)



あなたの身近に農福連携に取り組んでほしい方は？ (回答84人)



登壇者発言の要点 アーカイブ動画 https://youtu.be/i85SbTUK_Qg?si=IAjzmjq7t91E-e_

【講演】「南高愛隣会が問う真の「共生社会」とは～未来を耕す農福連携の実践～」

社会福祉法人南高愛隣会（長崎県諫早市）（ノウフク・アワード 2020 審査員特別賞「人を耕す」）
管理者 宇野光央氏

社会福祉法人南高愛隣会では、最後は人生楽しかったと思えるように、という想いから、『生きる誇りへの、挑戦』を理念に掲げた。ロゴマークの意味は、字をひっくり返すと左側の人と右側の人とがどんどん前に進み、壁にぶち当たる。それもオッケーだよということ。どのように人はチャレンジしていくかが大切である。

取り組みの工夫としては、収穫に追われる時期は地域の高齢者を雇用したり、対馬どりについて保健所や島原振興局から助言をもらったり、地域のコミュニティを大切にしている。牛の餌は、稲刈りが終わった藁を農家から購入し、自分たちで藁を集めている。福祉側は安く牛の餌を仕入れ、農家も藁を片付けなくて済むという相互にメリットのある農福連携が実現した。

今後補助金が整備され、キャンピングカー等を購入する所が増えると良いと思う。農業に従事する皆さんが、トイレすら楽しめるような空間になれば面白いと思う。誰もが「人生楽しかった」と感じられる社会にしたい。

【パネルディスカッション】「九州の地域資源とつながりを活かした農福連携」

社会福祉法人みやこ福祉会（沖縄県宮古島市）（ノウフク・アワード 2022 チャレンジ賞）
理事長 総合施設長 伊志嶺博司氏

社会福祉法人みやこ福祉会のロゴマークの草花は障害者、両手は親、兄弟、地域の人々、社会全体で支えていくことを表している。無認可は誰の許可もいらないが、援助金や補助金はもらえない。元はトマトランドであったが、コロナで販売先を失ったことから、単価が高いメロンの栽培に挑戦した。水耕栽培は15日サイクルで収穫できるため、回転の速さで収益を上げている。コロナが収束し、観光客が徐々に戻っているため、メロンは島内消費がほとんど。レストランまでの道にパン工房を作り、あえて作業工程をガラス越しに見えるように設計した。これを見て、地域の人たちがどう感じるか？を大切にしたい。今後も、障害者を持つ親や本人が宮古島で生まれてよかったと思える環境を整備したい。

大隅半島ノウフクコンソーシアム（鹿児島県南大隅町）（ノウフク・アワード 2022 チャレンジ賞）
理事 今村和也氏、理事 結城康文氏

大隅半島は農業が盛んな地域である。コンソーシアムでは、農福連携を通じて多様な人たちが、自己実現やチャレンジができる場所となるように取り組んでいる。また、コンソーシアムを通して、農福連携を実践している団体を結びつける、プラットフォームになりたい。コンソーシアムならではの課題は「マッチング」への対応。大隅半島は広いので、どう農福連携を普及させていくかが大事である。製茶では、生産するお茶すべてに「価値」を与え、「三方よし」皆を豊かにする持続可能な茶業を！という理念で活動している。慢性的な人手不足から、施設の方に年に1度、畑のお手伝いをお願いしたことから、農福連携が始まった。農福連携は、1度に多人数を動員できること、そして短時間にスポット的に人数をかけられること、が強みである。

社会福祉法人出島福祉村（長崎県長崎市）（ノウフク・アワード 2022 優秀賞）
理事長 池田賢一氏

元々、長崎で長く建築設計に携わっていたが、20数年前、障害を持った人たちの施設の設計を委託され、障害者や職員の葛藤を目の当たりにした。社会に何か貢献したいと思い、社会福祉法人を立ち上げた。社会全体で福祉を支えるモデルケースを作り、長崎から日本中に広めたい。障害者が自立するためには、自分たちで最後まで売れるものを作るべきだと考え、日本で1番のびわの生産地域に設立し、びわ茶の製造を始めた。カフェ KIZUNA では、障害者の施設は「汚い、臭い、暗い」というイメージを変えたかった。夢は、このホールを結婚式場にする。職場を作るだけでなく、夢のある場所にしたい。

【ディスカッション】（コーディネーター）九州大学大学院農学研究院農業資源経済学部門准教授 渡部岳陽氏

渡部：非農家から農業技術を取得し、利用者に指導できるまでに至ったプロセスは？

伊志嶺：知り合いから農地を借りたことが始まりだった。トマト・メロンの施設整備は、行政に頼むと5,6年かかると言われ、自腹で行った。今の人たちを大切にしたいから。今は長い目で見るのではなく、今必要なものを解決したい。

渡部：農家側から福祉側へ理解を深める際に、受け入れられる人とそうでない人の違いは何か？

今村：家族に障害のある方がいらっしゃる場合などは比較的理解してもらいやすいと感じる。また、本当に困っている農家は、作業してもらえただけありがたいという考えなので理解してもらいやすいが、あまり困っていない農家は、安い工賃で雇ってあげているという考えの方もいるので、理解されにくい部分もある。

今村：マッチングの際に、農家側と福祉側で相違が生まれる。その原因は時間軸のズレにある。農家は天候を配慮して作業するが、福祉側は作業する時間が決まっている。前提としての理解を深めてほしい。

【法務省からの情報共有】「再犯防止のための出所者等の居場所と出番づくり～農福連携の活用～」

法務省福岡矯正管区更生支援企画課 課長 福原健悟氏

現在、国は再犯防止推進計画を行っている。犯罪認知件数は減少傾向にあるが、犯罪の繰り返しは増加している。再犯者の特徴は住居や仕事がない人が多く、障害を抱える人が2割～3割いる。出所者を受け入れる不安や矯正施設への理解を深めるために、法務省や他企業とのマッチングを活用してほしい。受刑者の中には本当にやり直したいと思っている者はいる。このような人が地域づくりに貢献し、安心安全なまちづくりに繋げていきたい。

九州フォーラム実施後アンケート

宮崎県	2	長崎県	12	熊本県	4	鹿児島県	2	大分県	2	福岡県	2	宮城県	1	広島県	1	佐賀県	1	三重県	1	静岡県	1	福島県	1	北海道	1
■人数																									

回答者所在地 (回答31人)

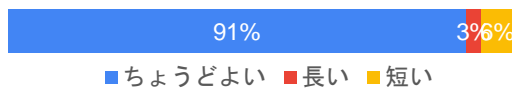
開催済みフォーラムの参加(回答29人)



フォーラム参加方法(回答32人)



フォーラムの時間(回答32人)



フォーラム理解度(回答32人)



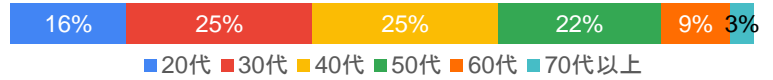
フォーラム内容の満足度(回答32人)



職種(回答総数32人)



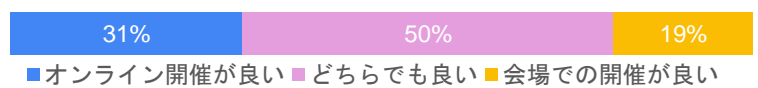
年齢(回答32人)



性別(回答32人)



開催方法について(回答32人)



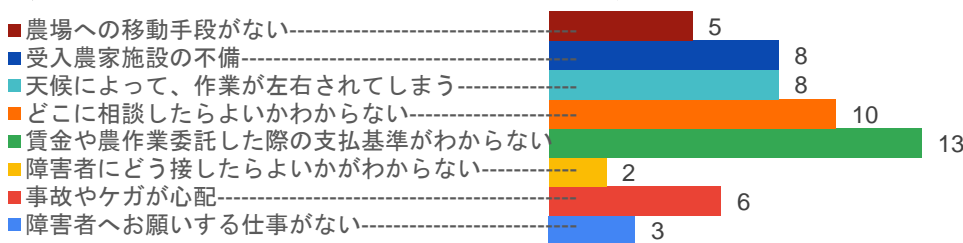
農福連携の取組状況(回答32人)



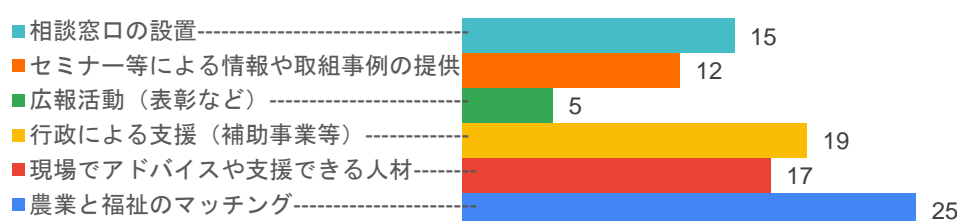
農福連携の取組意欲(回答31人)



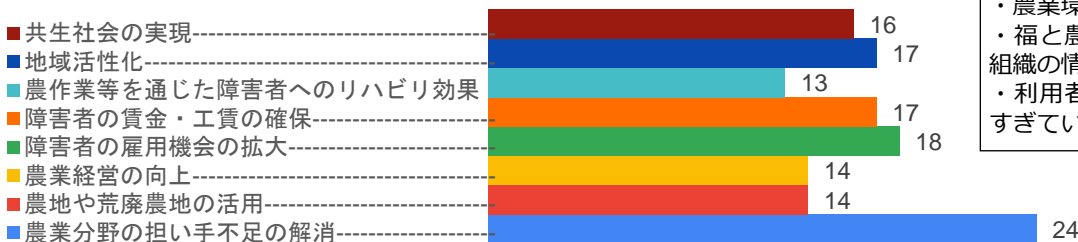
農福連携に取り組むに当たって、主な課題(回答29人複数選択)



農福連携に取り組むのに必要なこと(回答31人、複数選択)



農福連携に期待すること(回答31人、複数選択)



その他の課題(自由記述)

・継続的な仲介指導者の確保、農家側の依頼する作業の選別化、障害特性への理解、就労継続支援事業職員の従事負担、A型・B型における均衡性のある工賃設定、要求される作業時間へのミスマッチなど。

・障害をもたれる方々と長く農業を続けてゆくために、とくに農業参入初期には機械の購入やハウスの建設など設備整備が必要ですが、それを補う十分な補助金が望まれます。補助が十分とは言えない現在、農業参入すれば必ず大きな赤字を抱えることとなります。時間と労力を費やし、さらに大きな赤字を抱える事業に参入する選択ができる事業所は殆んど無いと思います。

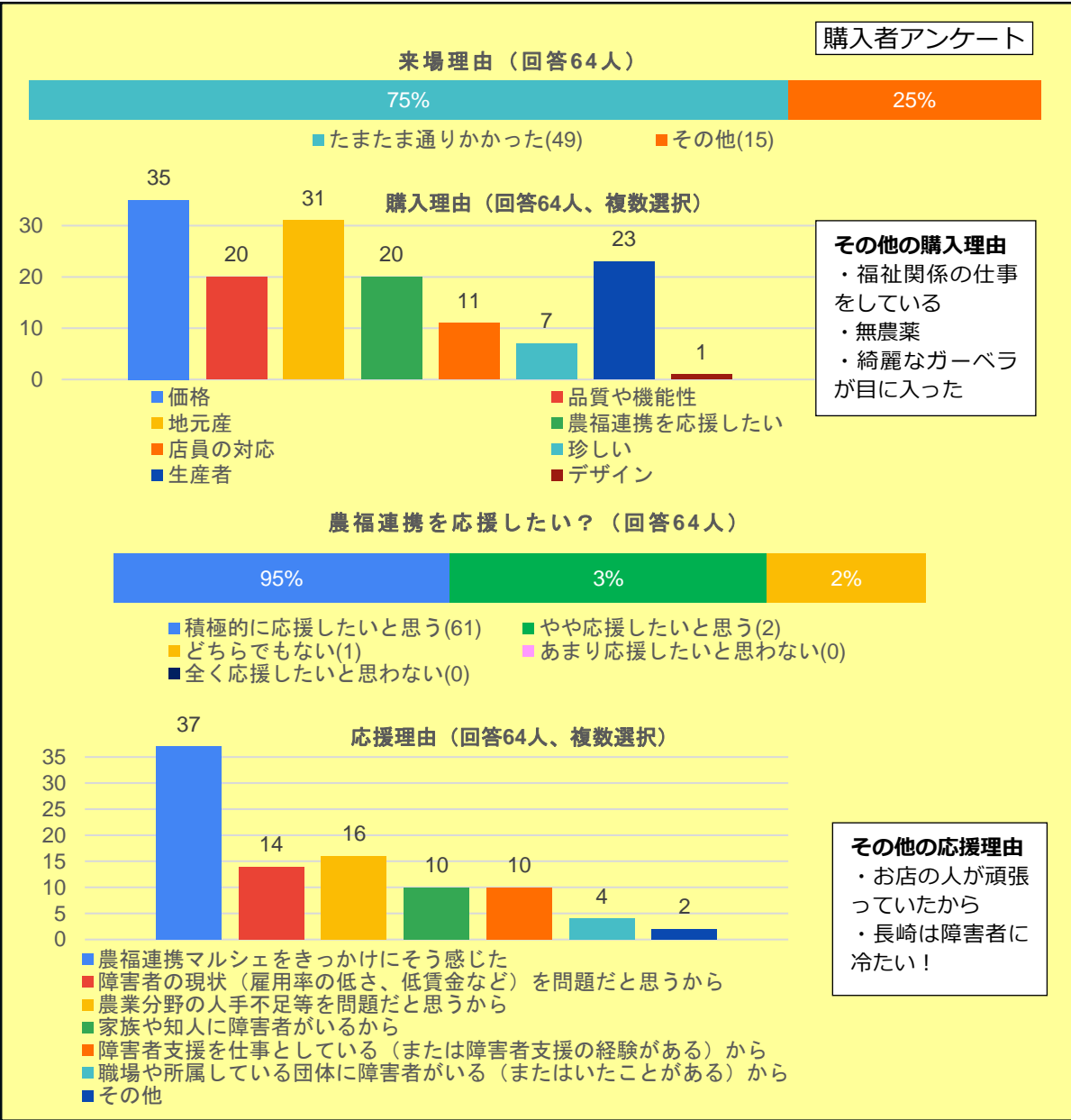
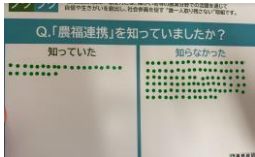
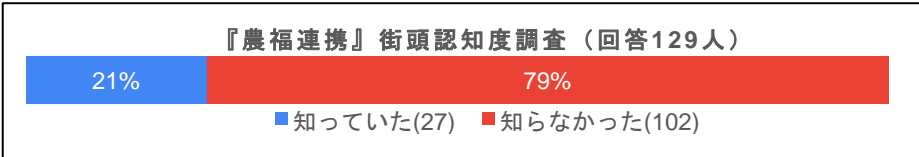
・触法障害者に対する理解

・人材不足の農家の情報収集と障害者施設の施設外就労の取り組み

・農業環境が少ない(長崎市)

・福と農とを公正な立場で仲介する組織の情報が少ない

・利用者さんの居住地と農村が離れすぎている。



農林水産省 令和5年度農山漁村振興交付金事業

農福連携 マルシェ in 関東

東京開催

2024 1/30 (火) 11:00~19:30

2024 1/30 (火) 13:00~16:30

参加費 無料

「ほすくまが来るよ!」

農福連携の魅力が満載!農業と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味しい加工品が関東・甲信各地から大集合!!皆様のご来場を心よりお待ちしております。

農福連携の魅力物語

農福連携の魅力が満載!農業と福祉がつながって、人も地域も元気になる。そんな農福連携の現場で丁寧に育てられた農産物等と、それらを活用した美味しい加工品が関東・甲信各地から大集合!!皆様のご来場を心よりお待ちしております。

農福連携フォーラムも同時開催!

KITTE4階 JPタワーホール&カンパレンス カンパレンスルームA

東京都千代田区丸の内2丁目7番2号

13時~16時半まで開催しています! (農福連携)

東京駅より地下道で直結

会場 東京都千代田区丸の内2丁目7番2号

※写真はイメージです。

参加事業者と商品(予定)

- 1 社会福祉法人 ゆずりは会 菜の花(群馬県) ほうれん草、長ネギ、ブロッコリー、キャベツ、乾の甘藷、干し芋
- 2 社会福祉法人 パステル(栃木県) 菜の花製品(ゆずりん、ゆずりん、ゆずりん)、ゆずりん、ゆずりん、ゆずりん
- 3 有限会社昭沼園(茨城県) ハンサムグリーン、ハンサムレッド、ニレナス、ペビーリーフ
- 4 株式会社ウイズファーム(長野県) ぶどう、ぶどう、ぶどう
- 5 埼玉福興株式会社(埼玉県) 水耕野菜、藍染ストール、藍のお茶、藍の焼き菓子
- 6 社会福祉法人 主婦会 ビア富敷(千葉県) 食用パン、いすみ百花梅、ごま油、ブルー、ごま油、ごま油
- 7 就労継続支援A型事業所 アスタネ(埼玉県) ショウガ、乾燥ショウガ、漬物栽培セット
- 8 社会福祉法人 くりのみ園(長野県) 平鍋いも、有樹園下じんじゅース、カステラ、マフィン
- 9 社会福祉法人 かしのみ福祉会(山梨県) 山梨産産物、山梨産産物、山梨産産物
- 10 一般社団法人 都市農福を推進する会 エシカルベジタブルス八王子(東京都) カラアロニンジン、ピーズ、カラフルざつまいも、カラフル焼き芋
- 11 就労継続支援B型事業所 みんなの広場「風」(千葉県) りんご、りんご、りんご
- 12 有限会社ココファームワイナリー(栃木県) 各種ワイン、加工品、乾燥スープ
- 13 社会福祉法人 光友会(神奈川県) 米(はるま)、野菜(トマト、ほうれん草、さつまいも、きゅうり)、菓子パン各種、かわら糖、ミックスクッキー
- 14 一般社団法人 日本農福連携協会(東京都) 農福連携イベント、老農アップフロント、米粉ビスコッティ、ほうじ茶ティーバッグ、干し芋、焼き菓子、乾燥くらげ、きくらげ佃煮
- 15 特定非営利活動法人 たしざん(東京都) 米粉ハンシヨウケーキキット
- 16 社会福祉法人 進和学園(神奈川県) とまじゅー、みかんじゅー、パン(南あみかん、など)、クッキー

主催：株式会社農都共生総合研究所 協力：一般社団法人日本農福連携協会

農林水産省 令和5年度農山漁村振興交付金事業

農福連携フォーラム

2024 1/30 (火) 13:00~16:30

参加費 無料

「農福連携の魅力とは?」

障がい者等の就労の場の創出だけでなく、農従事者の減少等の課題を抱える農業にとっても、人手の確保や地域農家の維持・活性化が期待でき、「農業」と「福祉」双方の課題解決につながる取組として、様々な形で全国的な広がりを見せています。

農福連携の現場には、いきいきと農業に取り組みする人々や、人と人とのつながり、そして丹精込めて育てられた農産物やそれらの付加価値を高める加工品など、多様な魅力があふれています。この機会に是非、関東・甲信の地域資源を活用した農福連携の取組について学んでみませんか。

特別講演 「ノウフク」の夢

一般社団法人 日本農福連携協会 会長理事 菅川 秀嗣氏

農福連携フォーラム

開催形式 ハイブリッド開催 (現地参加 + オンライン参加)

会場 KITTE4階 JPタワーホール&カンパレンス カンパレンスルームA 東京都千代田区丸の内2丁目7番2号

農福連携マルシェも同時開催!

KITTE4階 1F JPタワーホール&カンパレンス カンパレンスルームA 東京都千代田区丸の内2丁目7番2号

13時~19時半まで開催しています! (農福連携)

農福連携フォーラムの概要

講演 農福連携を地域資源に~ゆずりは会 菜の花による高工賃の実現~

講演者 社会福祉法人 ゆずりは会 菜の花 理事長 サービスマネージャー 小瀬 久徳氏

パネルディスカッション 関東の地域資源とつながりを活かした農福連携

講演者 社会福祉法人 パステル 理事長 CSWおよび管理員 石橋 須見江氏

講演者 株式会社ウイズファーム 社長 山崎 幸人氏

講演者 有限会社昭沼園 代表取締役 昭沼 洋平氏

コーディネーター 東京農大 教授 町田 柁子氏

お問い合わせ 株式会社農都共生総合研究所 noufuku@notosoken.jp

お申込みはこちら

主催：株式会社農都共生総合研究所 協力：一般社団法人日本農福連携協会

農福連携 魅力物語 MAP in 関東

「農福連携フォーラムin関東」では、魅力ある様々な取組が大集合!関東・甲信・静岡のさまざまな地域で、農業を通じて障がい者などが働く場所や居場所をつくらせている取組をご紹介します。

農福連携の魅力ある取組の詳細は右のQRコードからご覧ください。

社会福祉法人 くりのみ園

所在地: 長野県小布施町

農福連携マルシェ

社会福祉法人 ゆずりは会 菜の花

所在地: 群馬県前橋市

農福連携フォーラム講演者

農福連携マルシェ

有限会社昭沼園

所在地: 茨城県水戸市

農福連携フォーラムパネリスト

農福連携マルシェ

社会福祉法人 パステル

所在地: 栃木県小山市

農福連携フォーラムパネリスト

農福連携マルシェ

就労継続支援A型事業所 アスタネ

所在地: 埼玉県さいたま市

農福連携マルシェ

就労継続支援B型事業所 みんなの広場「風」

所在地: 千葉県松戸市

農福連携マルシェ

株式会社ウイズファーム

所在地: 長野県松川町

農福連携マルシェ

株式会社サンファーマーズ

所在地: 静岡県静岡市

農福連携フォーラムパネリスト

社会福祉法人 光友会

所在地: 神奈川県横浜市

農福連携マルシェ

社会福祉法人 進和学園

所在地: 神奈川県平塚市

農福連携マルシェ

特定非営利活動法人 たしざん

所在地: 東京都葛飾区

農福連携マルシェ

一般社団法人 日本農福連携協会

所在地: 東京都千代田区

農福連携マルシェ

農福連携マルシェの出店者は予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。(2024年1月22日時点)



左から、町田氏、小淵氏、石橋氏、山崎氏、照沼氏

農福連携フォーラム in 関東

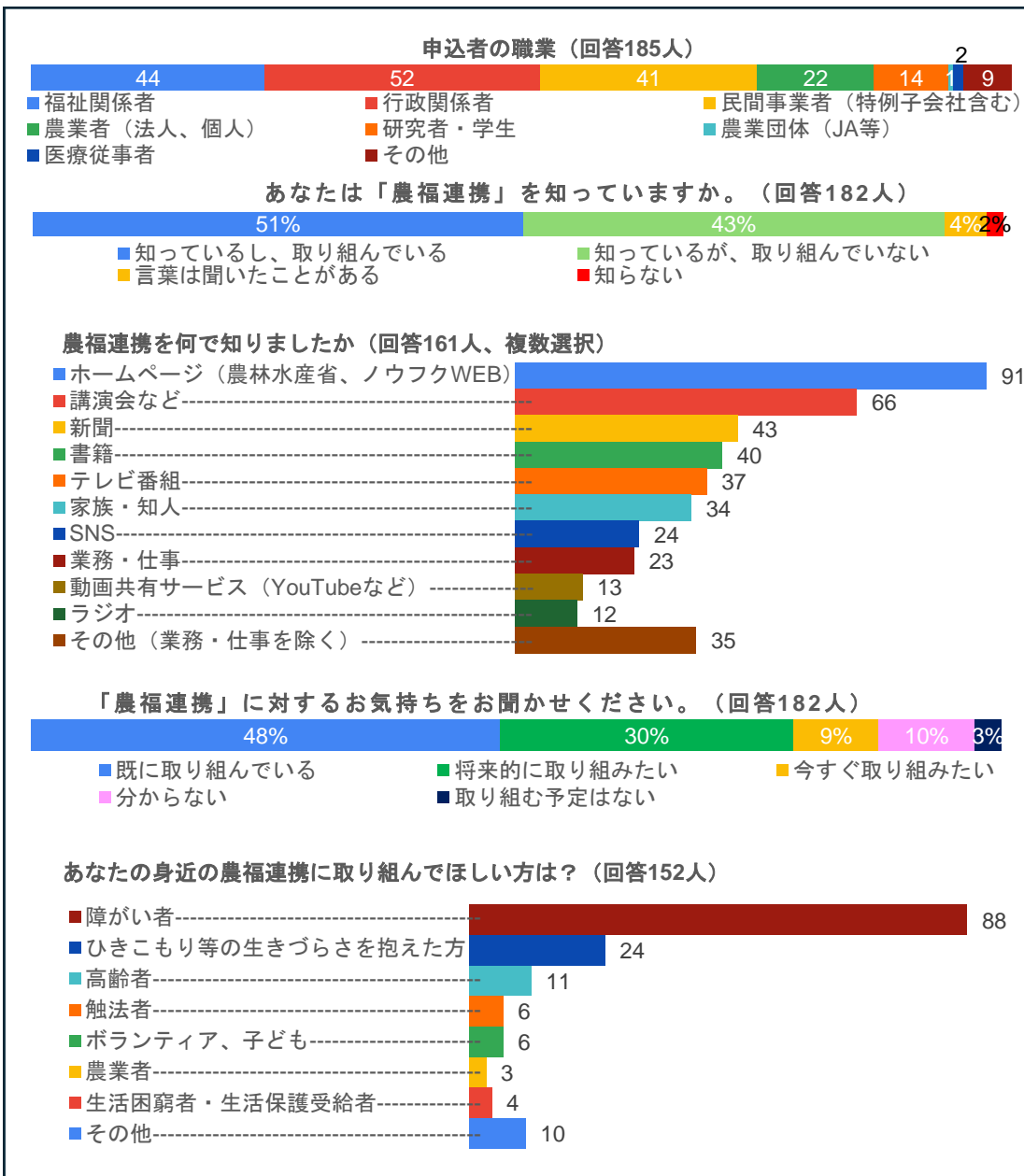
【会場】KITTE4 階 JP タワーホール&カンファレンス
 (東京都千代田区丸の内二丁目7番2号)
 【日時】2024/1/30(火)13:00~16:30
 【申込】現地：74人 オンライン：118人
 【当日】オンライン：86人



高橋政務官（挨拶）



皆川氏（特別講演）



登壇者発言の要点

アーカイブ動画 <https://youtu.be/aGUrh9NoDxs?si=It4AlMsdXJgcw8ip>

【講演】「農福連携を地域資源に～ゆずりは会菜の花による高工賃の実現～」

社会福祉法人ゆずりは会 菜の花（群馬県前橋市）（ノウフク・アワード 2022 グランプリ）
管理者 サービス管理責任者 小淵久徳氏

菜の花では、自身で田畑を借りるという、自己完結的な農福連携に取り組んでいる。委託ではなく自前で農業を行っているため、コロナの影響を受けず、工賃を上げることができている。想いを間違えると、自分たちでできることだけをやろうと、閉じこもりになりがち。どれだけの人と繋がる機会を持てるかがテーマ。就労支援としての農業ではなく、産業として成り立つ農業をしないと高工賃には繋がらない。以前は手作業で行っていたが、効率化を図るために現在は多くの場面で機械を導入している。機械化で空いた労力を、利用者の支援に回し、事業の安定に努めている。菜の花では、失敗していいからチャレンジすること、を大切にしている。「ハッピーファースト」という言葉が好き。「〇〇ファースト」という言葉がよくあるが、楽しい、幸せが第一であれば「誰か」は関係ないと思う。利用者さんが幸せであれば我々も嬉しいと感じる。

【パネルディスカッション】「関東の地域資源とつながりを活かした農福連携」

社会福祉法人パステル（栃木県小山市）（ノウフク・アワード 2022 準グランプリ 「地域を耕す」）
理事長 石橋須見江氏 「小山の宝「桑」を活かした自立への道」

CSW おとめでは、楽しく働く、元気に遊ぶ、豊かに住む、の3つを通して、人格を高めて自立していくことを目標にしている。本当は、もっと高い工賃を払い、生き甲斐を見出したいと思っている。桑のミクスプロジェクト構想は、アベノミクスに似せて作った。伝統産業・労働・地域の3本柱で生き甲斐を見出し、生き甲斐が自立に繋がると考えた。小山市は結城紬の原点であるため、人間が食べられる桑をテーマにしようと考えた。1次産業～3次産業の中で、利用者の方々にはどの仕事かを見出すことを大切にしている。利用者の方も目標を持って仕事に来るので、出席率も高い。1人1人が生き甲斐を感じているのは、6次産業という多様な仕事を用意できたからだと思っている。

株式会社サンファーマーズ（静岡県静岡市）（ノウフク・アワード 2022 優秀賞）福祉農業部長 山崎隼人氏

株式会社サンファーマーズのハウスは、温室栽培、周年栽培、低段密植栽培の3つの特徴を持つ。天候に左右されない点、仕事の計画が立てられる点、作業を繰り返し行える点から、農福連携に向いているとアドバイスを頂き、農福連携に取り組むきっかけとなった。法定雇用義務のためではなく、障害者の方を農場への戦力として捉え、最低賃金以上の雇用を行っている。何よりも、一緒に働き、共に成長することを大切にしている。課題として、繁忙期と閑散期の差の激しさが仕事量を左右してしまうことである。今は閑散期に新しい職域への挑戦や、ハウスのメンテナンスをお願いしている状況である。また、新しい福祉事業所と連絡を取りたくても連絡先が分からないことが多いため、新規連携時の相談先がほしいと感じている。

有限会社照沼農園（茨城県水戸市）（ノウフク・アワード 2022 フレッシュ賞）代表取締役 照沼洋平氏

有限会社照沼農園では、作業の効率を上げるために、地元のIT企業と連携し、作業を見える化するためのアプリを開発して導入した。ハカリマスターIの導入により、農作物などの計量結果を「O」「X」で表示し、音が鳴るので、誰がどこで間違ったか分かるようになった。利用者に合わせて作業方法を取り入れた結果、職員の熱中症対策にもなり、作業効率が上がったと感じた。工賃を上げる工夫として、今までは野菜だけの取り組みだったが、酒蔵に対して栽培していた山田錦を利用しようと考えた。息子さんたちが作ったお米でできたお酒を、親御さんが飲めるというのはすごく嬉しいのではないかなと思った。去年は稲刈りと田植えしかできなかったため、今年はさらに挑戦していきたいと思っている。

【ディスカッション】（コーディネーター）東京農業大学地域環境科学部地域創成科学科教授 町田怜子氏

町田：地域との連携が広まった秘訣は？

小淵：6、7年前ぐらいまでは、お前たちにどんな農業ができるのだと実際に言われたこともある。今でもそういう目で皆さん見ているからこそ、いい加減な農業はできないと思い、ここまで続けてこられたと思っている。

石橋：地域の中には、福祉の対象にはならないが在宅している方もいる。そのような方も農福の中に一緒に入れないだろうか。例えば、70代でも、早起きで朝6時から9時まで働ける、みんなと働くのは嫌だけど、1人だけなら働ける、と言うような方が働ける企業はできないだろうか。お金を出さないといけないという大変さはあるが、そのような中間企業を作ったら面白いのではないかなと思う。

町田：現在の困りごとは？

山崎：コーディネーターは僕の中では一番重要ななと思っている。近くに福祉事業所があるよ、農業があるよって言うても、実際その農業とか福祉が何を求めているのかまでは分からないので、情報の発信的な、1歩目の取りかかりが非常に重要なかなと考えている。

町田：農業未経験者から、どのようなプランを立てて農業を進めたか？

小淵：4月以降の作付けをどうするかを、全事業所で表にするようにし、いくらのお金を出したいから、という逆算で作付けを考えてる。結果払いではなく、毎月5万円払うと決めたら、年度当初に決めた金額を4月から払うようにしている。

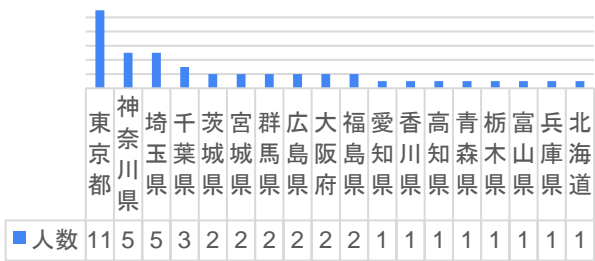
照沼：福祉の方も、農業者も農福連携をしたいと思っても、まず何からやればいいかわからない。それぞれの事業所さんのやり方YouTubeなどのプラットフォームを使って、農福連携のやりやすさを広範囲に広めていければなどは思っている。

【特別講演】「ノウフクの夢」

一般社団法人日本農福連携協会（東京都千代田区）会長理事 皆川芳嗣氏

農福連携の広がりはかなり出てきたというのが今の状況だと思っている。この5年間を通じて、農業と福祉それぞれにかなり変化が出てきた。課題としては、食料生産を持続可能に保てるか、そして労働力不足。それをもう1度強化しなければいけない。食料農業農村基本法という農政の基本的な考え方を定めた法律の中に、農福連携に関して言及がなされている。これはとても嬉しいことである。法定雇用率を達成しないとデメリットが生ずるので、そこをかなり意識した取り組みが社会の中に出てきている。ただ一方で、雇用率を意識しすぎたビジネスモデルになってないかっていう問題意識を持っている。農福連携のいいところは、作業領域の広さである。接客が好きな人など障害や性格にマッチした、様々な仕事を準備できることに可能性を感じている。また、機械化も進んでいるので、幅がさらに広がると思っている。日本は、イタリアのような障害者も犯罪歴のある人も一緒に市民と働く社会を見習うべきだと思う。

関東フォーラム実施後アンケート



回答者の所在地 (50人)

開催済みフォーラムの参加 (回答45人)



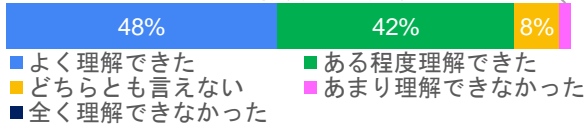
フォーラム参加方法 (回答49人)



フォーラムの時間 (回答50人)



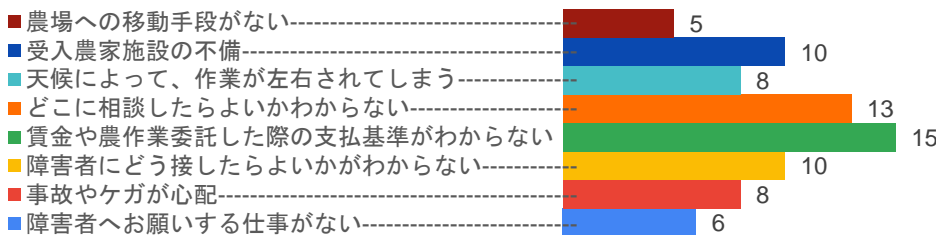
フォーラム理解度 (回答数50人)



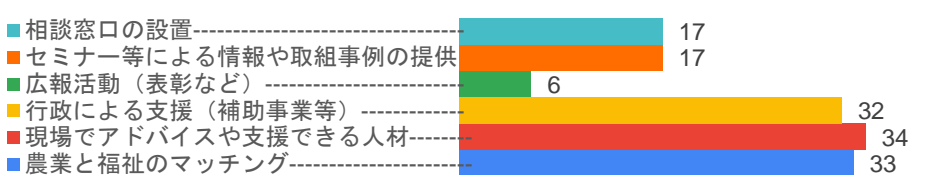
フォーラム内容満足度 (回答49人)



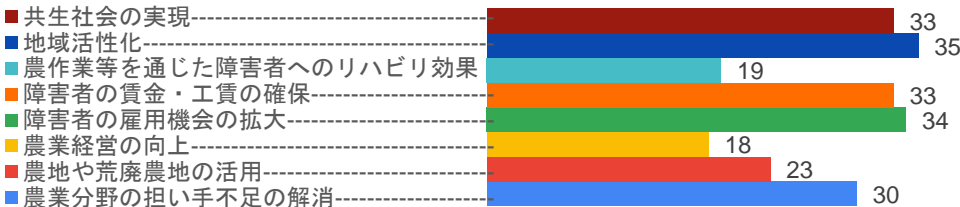
農福連携に取り組むに当たって、主な課題 (回答43人複数選択)



農福連携に取り組むのに必要なこと (回答48人、複数選択)



農福連携に期待すること (回答49人、複数選択)



職種 (回答50人)



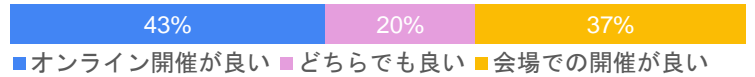
年齢 (回答50人)



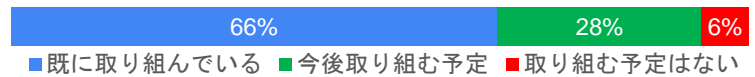
性別 (50人)



開催方法について (回答49人)



農福連携の取組状況 (回答47人)



取組意欲 (回答数49人)



その他の課題 (自由記述)

- ・6次化に向けた企業との連携、販路拡大
- ・コーディネーターの存在
- ・就業時間 早朝の作業委託(夏場の野菜類の収穫)
- ・障害をもたれる方々と長く農業を続けてゆくために、とくに農業参入初期には機械の購入やハウスの建設など設備整備が必要ですが、それを補う十分な補助金が望まれます。補助が十分とは言えない現在、農業参入すれば必ず大きな赤字を抱えることとなります。時間と労力を費やし、さらに大きな赤字を抱える事業に参入する選択ができる事業所は殆んど無いと思います。
- ・農業に携わる福祉事業所の掘り起し
- ・農業経営者の参画が少ない
- ・農福双方の理解
- ・農福連携に関する情報は多くなっているが、障害特性に関する情報が雇業者に浸透していない。
- ・福祉施設等他への資産活用
- ・理想と現実が乖離している。財政力のある所だけしか、携われない。

<マルシェ感想>

- ・賑わっていてよかった。楽しめました。
- ・直接お客さまや出展者同士の声を聞ける機会は大変貴重です。「農福」の横のつながりが生まれる契機となることを期待しています。
- ・全体のスペースが狭かったと感じた。
- ・充実していたと思います。
- ・決済方法が現金だけだと不便を感じる方も居ると思います。
- ・場所柄、その場から送れる用意もあると良いと思います。
- ・農家側も福祉スキルを学べる場または福祉スキル保有者による現場フォローの体制も必要だと感じた。

- ・活況でした。障害のある方が販売により多く携わり、障害のある方の保護者の目に触れて、農業を子供の職業の選択肢に入れてくれる工夫があると良い。
- ・活気があり良かった
- ・各地の農福連携の様子がわかり良かった。
- ・とても勉強になり、登壇者の方々の困り事も思い当たる節があり、ヒントをいただきました。
- ・いろいろな事例が知れてよかったです。
- ・KITTE 内に常設農福マルシェが欲しいです
- ・良い商品が多いと思います。ストーリーやブランディングが分かりやすくなればもっと可能性が広がると感じました。



農福連携 マルシェ in 関東 東京開催

～農福連携魅力物語～

2024年1月30日(火)

11:00～19:30

場所 KITTE 地下1階 東京シアティア
パフォーマンスゾーン
東京都千代田区丸の内2丁目7番2号

**社会福祉法人 ゆずりは会
菜の花(群馬県)**

自然栽培で育てた亀の尾を地元群馬のおいしい水で仕立てました。ノンアルコール・ノンシュガー。糯の甘酒は、飲む点滴とも言われ、腸内環境を整えてくれます。

**糯の甘酒 自然栽培
亀の尾 1,200円**

**社会福祉法人
パステル(栃木県)**

「門外不出」の酒粕を使用し、地元産小麦「いわいのだいち」を使用したパウンドケーキです。パウンドケーキの封を開け、カットすると酒粕の良い香りが漂います!

酒粕パウンドケーキ 700円

有限会社昭照農園(茨城県)

地下数十メートルからミネラルたっぷりの綺麗な地下水を使用し水耕栽培にて生産しています。鮮やかな濃緑色で、歯ごたえ抜群なシャキシャキなレタスです。サラダ、ハンバーガーなどに最適です。

ハンサムグリーン 198円

**ウィズファーム
(長野県)**

「幻のふじ」と言われている長野県松川町のサンふじを使用したりんごジュース。

**ノウフクリんごで作った
りんごジュース 1L 1,000円**

埼玉福興株式会社(埼玉県)

ピリッと辛みのきいたルッコラや、サラダに彩りを添えるスイスチャード、みずみずしいカラシ菜に、えぐみの少ないサラダホウレン草。「味が濃くておいしい!」と評判の埼玉福興の水耕野菜シリーズです。

水耕野菜 各200円

**社会福祉法人土穂会
ピア宮敷(千葉県)**

温暖な気候に恵まれた千葉県いすみ市産の百花はちみつ。養蜂家とピア宮敷が連携をした、いすみ地域の天然はちみつです。

はちみつ 200g 1,200円

就労継続支援A型事業所 アスタネ(埼玉県)

さいたま市の浦和で育てた、新鮮な無農薬しいたけです。みずみずしさやプリッとした食感が特徴。浦和、大宮、川口を中心に40店舗ほどのスーパーさんに販売しています。

特選しいたけ 6個入り 300円

社会福祉法人 くりのみ園(長野県)

北信濃の田園環境の中で平飼しい、澄み切った空気のおかげで、四季の野菜を食べたのびのび育った鶏の卵です。抗生物質を使わず、自家配合の厳選飼料を食べて育った安心・安全な卵は鮮やかなタンポポ色をしています。卵本来の色と香り、味わいをぜひ体感してください。

おぶせのたまご 6玉入り 500円

**社会福祉法人
かしのみ福祉会
(山梨県)**

山梨県産ドライフルーツを詰込んだパウンドケーキ。

パウンドケーキ 240g 1,404円

**一般社団法人 都市農福を推進する会
エシカルベジタブルス八王子(東京都)**

栽培期間中農薬・化学肥料不使用で栽培したさつまいも3種(シルクスweet、パープルsweetロード、ハロウィンsweet)を冷やし焼き芋にしました。甘くとろける焼き芋を是非食べ比べてみてください。

カラフル焼き芋 1個 700円

**就労継続支援B型事業所
みんなの広場「風」
(千葉県)**

利用者の皆さんと栽培・収穫・加工まで取り組んでいます。一粒一粒、丁寧に皮をむいています!

**甘酢らっきょう
1,200円(大) 700円(小)**

**有限会社
ココ・ファーム・ワイナリー
(栃木県)**

こころみ学園の葡萄畑で、大切に育てられたリースリング・リオン種を中心に造られた、ビン内二次発酵によるスパークリングワイン。長い熟成期間を経て生まれた、きめ細やかな泡、上品な酸や豊かな味わいをお楽しみください。

**ワイン「NOVO」
8,800円**

**社会福祉法人
光友会(神奈川県)**

神奈川県の奨励品種。湘南の温暖な気候で減農薬栽培で育ったお米です。一般市場では入手できない希少米です。

お米「はるみ」2kg 1,000円

一般社団法人 日本農福連携協会

**特定非営利活動法人
たしざん(東京都)**

農耕班で収穫した無農薬野菜を厨房班で乾燥パウダーにして米粉パンに練りこんでいます。

米粉パン 350円

**社会福祉法人
進和学園(神奈川県)**

湘南の海風に頬をなでられて、太陽をいっぱい浴びた美味しいみかん。パンなのにジュシー＆爽やかな酸味の効いた新触感の美味しさです。皮はむかずにそのまま召し上がり!

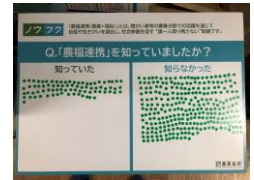
湘南みかんぱん 200円

主催：株式会社農都共生総合研究所 協力：一般社団法人日本農福連携協会

お問い合わせは ▶ 株式会社農都共生総合研究所
noufuku@notosoken.jp



「農福連携」街頭認知度調査（回答361人）

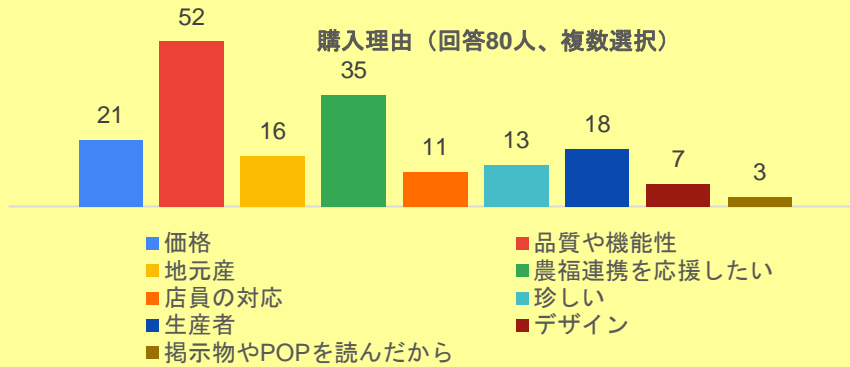


来場理由（回答80人）



購入者アンケート

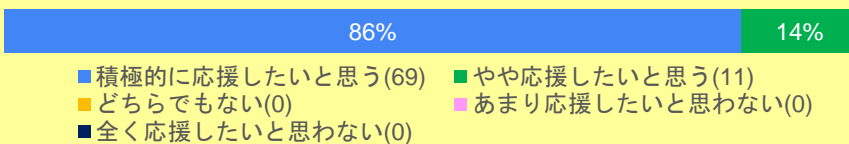
購入理由（回答80人、複数選択）



その他の購入理由

- ・懐かしかった
- ・新鮮

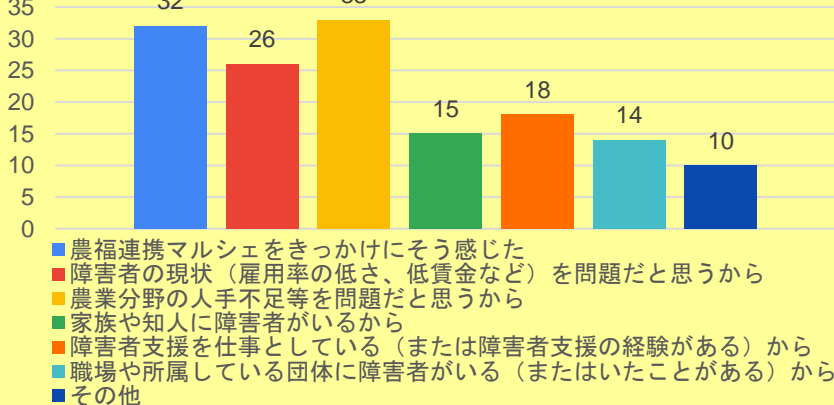
農福連携を応援したい？（回答80人）



その他の応援理由

- ・地域の繋がりやコミュニティの1つとして大事だと思うから
- ・福祉に関心があったから
- ・取引先に支援施設があるのと、いいものを使って美味しいものを作っている所が多いから
- ・土地の活用、自給自足の必要性
- ・近くに福祉施設があるため
- ・SDGSの取り組みを応援しているから
- ・家族に介護士がいるから
- ・いいイメージがあるから
- ・全ての人にとって働きがいのある仕事がある社会になってほしいと思うから
- ・特に大きな理由はないが、需要に沿うなら応援したい。

応援理由（回答80人、複数選択）



農福連携技術支援者の集い

～農福連携技術支援者と農福連携研究者のクロストーク～

2023年12月22日(金) 13:00~16:00

千葉大学教授 吉田 行郷

兵庫県立大学教授 豊田 正博



Crosstalk



福社事業者

社会福祉法人ゆずりは会エール
管理者補佐・職業指導員

峯岸 勝(4期生)

農業者

株式会社ボタジェ
ハーブ農園ベザン 代表取締役社長

澤邊 友彦(1期生)

企業

帝人ソレイユ株式会社
取締役社長補佐

鈴木 崇之(1期生)

行政

佐賀県農林水産部農業経営課
農福連携コーディネーター

藤戸 小百合(6期生)



農福連携
技術支援者

NPO法人
たがやす理事/
大隅半島
ノフクコンソーシアム
プロジェクト
マネージャー/
ノフクJAS検査員・
ASIAGAP指導員

進行役 天野 雄一郎 (2期生)



ファシリテーター(総合司会)
農都共生総合研究所 川辺 亮

お申し込みはこちらから



<https://forms.gle/kz43Cye8HE27pVAJ7>
mail : noufuku@notosoken.jp

場所

千葉大学松戸キャンパス
100周年記念
戸定ヶ丘ホール
(現地とオンライン併用による開催)



参加者

会場参加申込定員: 50名程度
オンライン参加定員: 100名程度

内容

- 1 吉田教授・豊田教授の対談
(情報提供: 吉田教授「マッピングから見た農福連携」、豊田教授「福祉事業所作業分析による難易度一覧表の実証へ向けて」)
- 2 農林水産省 農福連携推進室からの情報提供等
- 3 農福連携技術支援者の今①
(福祉事業所の視点から)
- 4 農福連携技術支援者の今②
(農業者の視点から)
- 5 農福連携技術支援者の今③
(企業の視点から)
- 6 農福連携技術支援者の今④
(コーディネーターの視点から)
- 7 パネルディスカッション
- 8 質疑応答等

応募締切: 12月15日(金)

【主催】農都共生総合研究所 【協力】国立大学法人 千葉大学



上段左から農都（川辺）、峯岸氏、天野氏、吉田氏 下段左から豊田氏、澤邊氏、鈴木氏、藤戸氏

農福連携技術支援者の集い

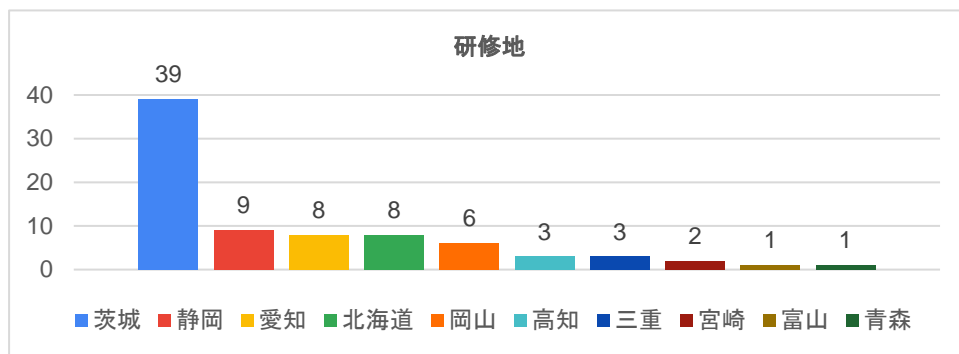
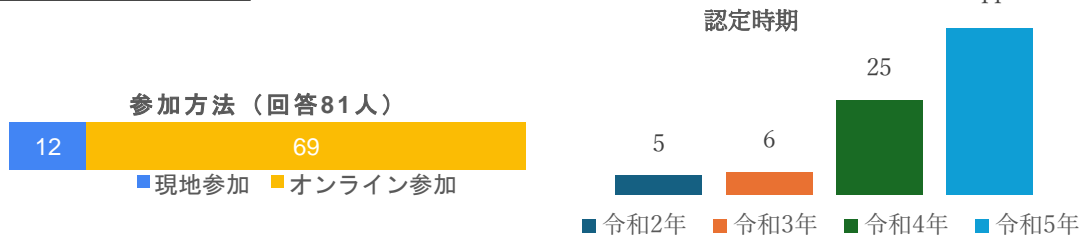
【会場】 千葉大学 100 周年記念戸定ヶ丘ホール（千葉県松戸市）

【日時】 2023 年 12 月 22 日（金） 13:00~16:00

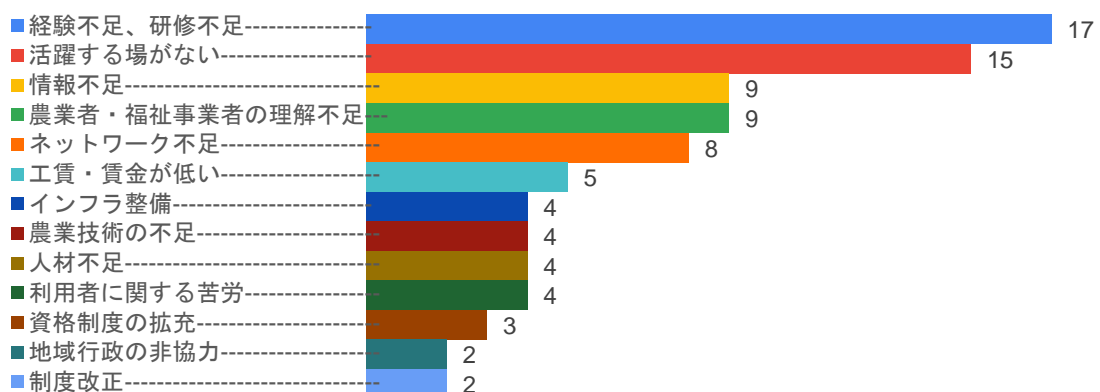
【申込】 現地：12 件、オンライン：69 件

【当日】 オンライン：97 人

申込アンケート



農福連携技術支援者として感じている課題（回答73人、自由記述を分類、複数選択）



登壇者発言の要点 アーカイブ動画 https://youtu.be/m0H6rgxJpEI?si=UnE6cuvTtWrZ2_25

講演

千葉大学園芸学研究院食と緑の健康創成学講座教授 吉田行郷氏「マッピングから見た農福連携」

農福連携の取り組みは増えているが、地域によって取り組みの差が激しいのが現状である。農福連携の取り組みを可視化する取り組みの1つとして、農家・農業法人と福祉事業所のマッピング状況を地図情報化する研究を行った。

新潟県の地図情報による可視化で分かったことは、農福連携のマッチングは農業が盛んなところではなく、県庁所在地を中心に広がっている。また、福祉事務所から手伝いに行く農家・農業法人までの距離は比較的短く、車で30分が限界。こうした状況を踏まえると、都市部や都市近郊で、障害者にやってもらう作業がなくて困っている福祉系の事業所が、手伝いに行ける距離にある農家・農業法人の中から人手不足のところを探して、マッピングすることが効果的かつ効果的と考えられる。

マッチングの成功事例では、農家側がなかなかアウトソーシングできなかった単純作業を福祉事業所に引き受けてもらえるようになったことで、営業や高度な作業に時間を割けるようになり、お互いがウィンウィンの関係になった。また、A型もB型も組み合わせているところも出てきており、例えば、難しい仕事はA型、簡単な仕事はB型に願っているなどしている。また、利用者に占める精神障害者と知的障害者の比率の違いで、得意な作業が異なる。このように作業毎に臨機応変に対応することで、農作業の質を向上させている農家・農業法人も増えている。

兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科園芸療法課程教授 豊田正博氏 「福祉事業所の作業難易度一覧表から利用者のできそうな農作業を考える」

淡路式農作業分析表を使うと、利用者が福祉事務所で行う作業難易度の分析から、利用者ができそうな農作業の目安が分かる。ポイントは①作業負担度②両手の使用③巧緻性④最多注意配分数の4つ。タオルたたみを例に考えると、まず作業姿勢は立位又は座位であり、作業負担度は1（負担最も軽度）に分類される。次に、手や指の力加減が少し必要であることから、巧緻性は5段階で2（標準よりやや易しい）に分類される。そして、最多注意配分数は右手、左手、タオルで3になる。就労継続B型事業所で行われる作業には最多注意配分3、巧緻性3以下の作業が多く、事業所に作業委託される農作業にも同様の難易度の作業が多い。そのため、体力をつけていけば、できる農作業も多くなる。

【農福連携技術支援者と農福連携研究者のクロストーク】

【福祉事業所の視点から】社会福祉法人ゆずりは会 エール 管理者補佐・職業指導員 峯岸勝氏（4期生）

エールでは、障害者の方が自分の住む地域で、工賃と年金で自立した生活が送れること、一般就労にチャレンジできることを目標に支援している。できないことをできるようにするのではなく、できること、得意なことを伸ばす。成功体験を重ねることでステップアップできると考え、個別に合わせた作業選択と作業配置を行っている。利用者さんに直接作業の効率化を求めるのではなく、設備や環境の整備を行うことで効率化に繋げたい。また、作業の機械化により、作業時間の短縮や作付面積の拡大が実現した。今年からラジコンの除草機を導入し、機械作業を目標とする利用者もいる。さらに、職員に対しても研修を行うことで、的確な指示と情報共有を可能にした。施設内の取り組みは豊富だが、施設外がほとんどない。

【農業者の視点から】株式会社ポタジェ・ハーブ農園ペザン 社長 澤邊友彦氏（1期生）

ハーブ農園ペザンでは、人にとっても自然にとっても心地よい空間を追求している。現場では、利用者さんや福祉事業所のマッピングに進む前に農家さんと話し合い、利用者さんに合わせた作業現場に変えられないか相談している。農家さんから作業年間スケジュールをもらい、できそうなところをピックアップする。今後は、障害者雇用を前提としたお店づくりをしていきたい。ハーブの摘み取り体験の案内を、利用者の方にやってもらえたら面白いと思う。ゆくゆくは、利用者の方が職人になれるようにしていきたい。利用者さんの本当の価値とは？働く幸せとは？というところを相談しながら、ゴールを共有しながら取り組みたいと思っている。

【企業・特例子会社の視点から】帝人ソレイコ株式会社 取締役社長補佐 鈴木崇之氏（1期生）

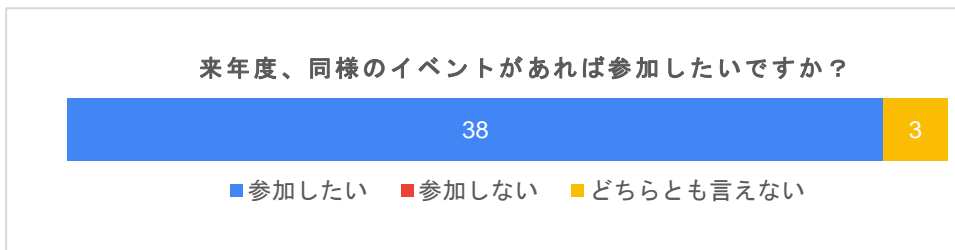
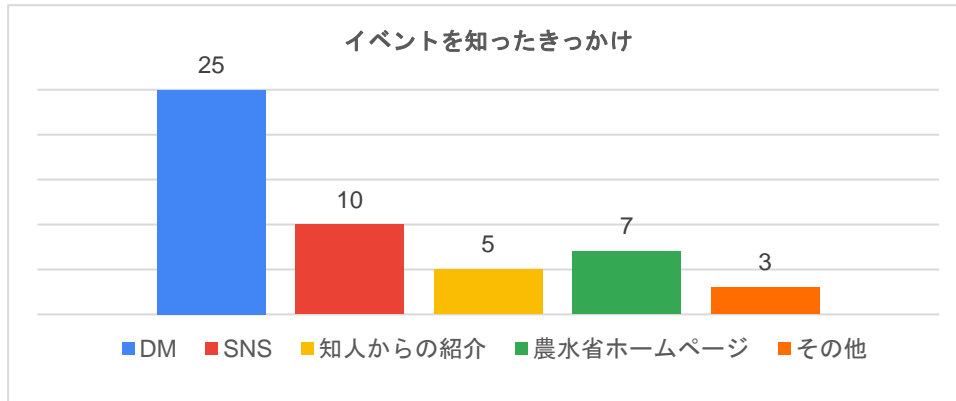
帝人ソレイコ株式会社では、オーガニックの野菜、食べられるバラ、胡蝶蘭の生産に取り組み、毎年130%ずつ売り上げが伸びている。主力の胡蝶蘭では、感度の高い不安症の社員が作成した出荷判定基準表にもとづき良品しか出荷しないため、高品質と評価されている。体制面では、知的・精神・発達障がいのある多様な社員がいるが、能力主義で採用し、作業を分解して個々の特性に合わせ、チームとして作業分担する。精神障がいの生産リーダーが重度知的障がい2名の指導も兼ねて現場を回すことで、品質・生産性の向上のみならず、自律的な働き方が実現し、結果的に支援員が不要となっている。今後実現したいことは、やりがいと働く楽しさ、そして黒字化の両立である。

【行政コーディネーターの視点から】佐賀県農林水産部農業経営課普及・担い手担当 農福連携コーディネーター 藤戸小百合氏（6期生）

食糧危機が叫ばれている中、農福連携によって未来に農地を残したいという想いから活動している。中間支援者なので中立であることを心掛けている。マッチングの際には、行政の方の担当者が変わってもスムーズに進められるように、中間支援者のための農福連携受委託マニュアルを作成した。令和5年佐賀県農福連携プロジェクトでは、新たに中間支援者の資質向上のための研修会に力を入れた。例えば、福祉事務所を「使う」ではなく「依頼する」という言葉に変えることで、農家と事業所が対等になり、農福連携に対する農家さんの印象が大きく変わる。苦労していることは、農家や中間支援者の中に、まだ障害者は安い労働力だと思っている人がいること。派遣としての一般雇用のニーズが高まっているので、シングルマザーや外国人などをコーディネートできる人材がほしい。

農福連携技術支援者の集い実施後アンケート

アンケート回答者数 41 人



参加者の感想（一部）

A さん

現在、地域における農業には、農家の高齢化や人手不足、耕作放棄地の増加といった課題が数多くあります。これらの課題解決や生産力向上のため、農福連携の推進に加えスマート農業を推進し、農地や経営の統合・大規模化、農作物のブランド化などが有効で、農福連携技術支援者やコーディネーターの活躍が期待されているようです。

しかしながら、パネラーの方が「資格があれば大丈夫ではなく、人それぞれのコミュニケーション力や積極性に左右される」とおっしゃられていたように、地域に必要とされる仕事をしなければならないということを感じました。

B さん

色んなお立場の方々のお話、課題や解決策として行われていることがお聞きできて、大変有意義でした。特に藤戸さんのお話は、同じコーディネーターの立場として、とても参考になるお話でした。「中間支援者の育成」について、マニュアルやセミナーの内容について、ぜひ今後参考にさせていただきたく思いました。

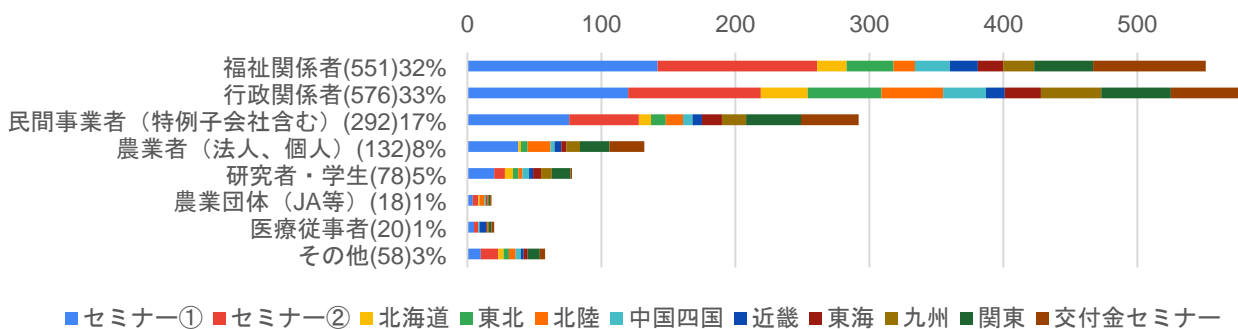
富山県も農家さんのニーズの方が上回り、今後は福祉事業所に、どう農作業に参加いただくかが課題となっており、吉田先生のお話にもあった新潟県さんの事例がとてもすごいことだと感じました。豊田先生のおっしゃった「つながる農福から育てる農福へ」の変化も、とても腑に落ちました。皆さんのお話を参考に、今後私自身はどう動くべきか…農業を残したい、色んな方が自分らしく生きることができる社会にしたいという目標の為に、考え実行していきたいと思えます。

アンケート分析

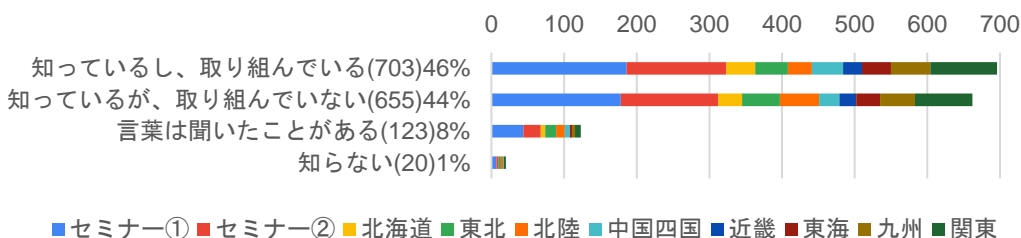
- ・セミナー・フォーラム申込者アンケート合算 (p67)
- ・セミナー・フォーラム実施後アンケート会場比較 (p68)
- ・セミナー・フォーラム実施後アンケート合算 (p69)
 - ・マルシェ購入者アンケート全会場合算 (p70)
 - ・マルシェ出店者実施後一斉アンケート (p71)

セミナー・フォーラム申込者アンケート合算

申込者の職業（回答総数1725）

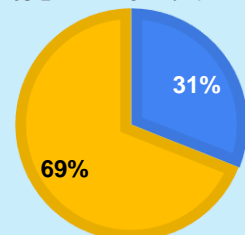


あなたは「農福連携」を知っていますか。（回答総数1501）



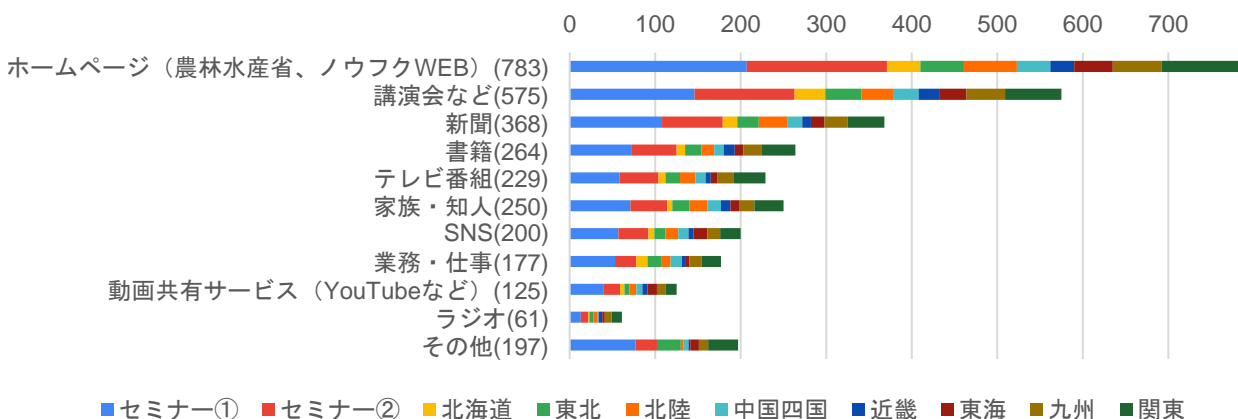
フォーラムの参加方法

■現地253 ■オンライン563

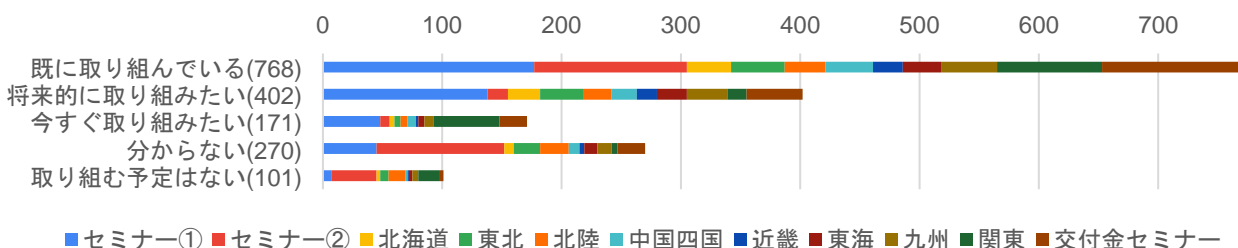


注：セミナーは全てオンライン

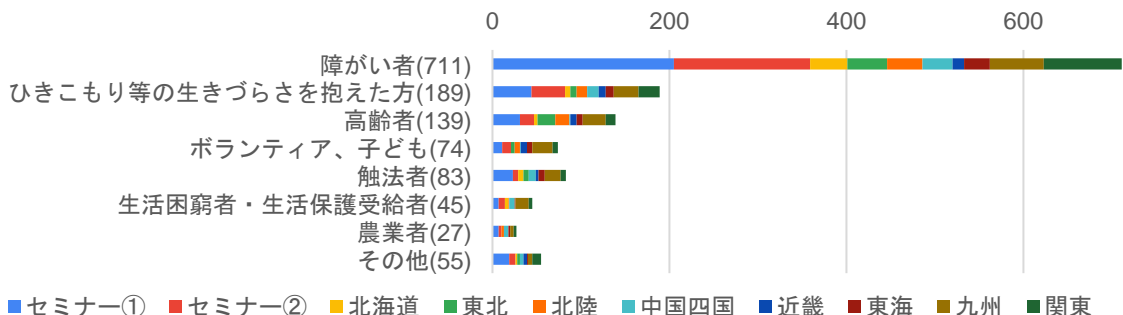
農福連携を何で知りましたか？（回答総数1364、複数選択）



農福連携の取組状況（回答総数1712）

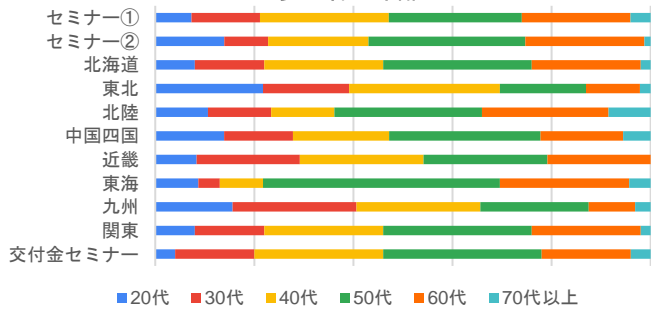


身近な農福連携に取り組んでほしい対象（回答総数1225、九州のみ複数選択）

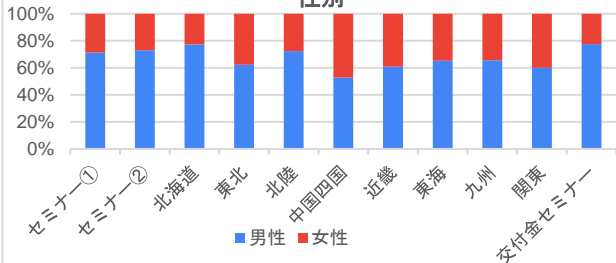


セミナー・フォーラム実施後アンケート会場比較

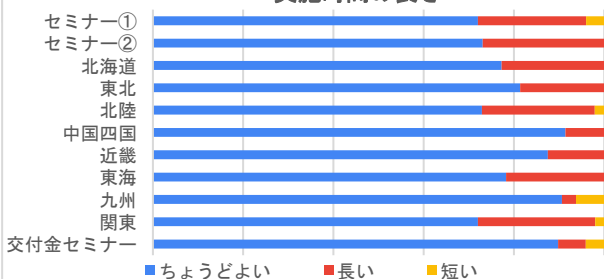
参加者の年齢



性別

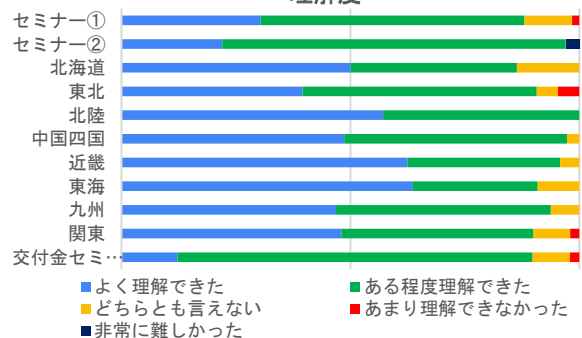


実施時間の長さ

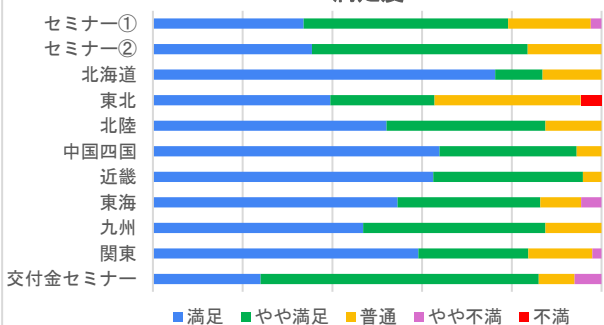


注：セミナー②は初参加者のみ

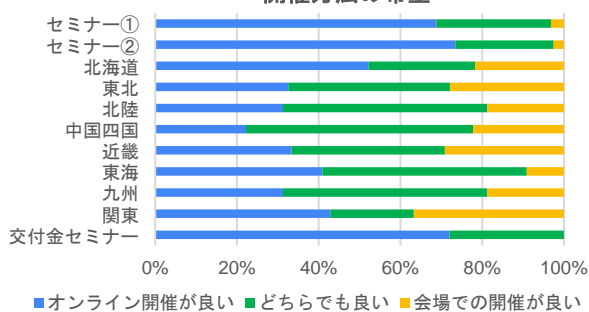
理解度



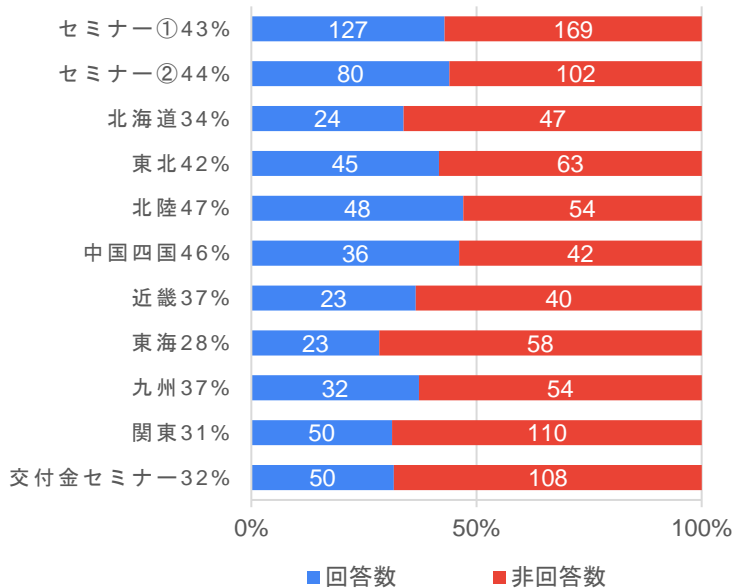
満足度



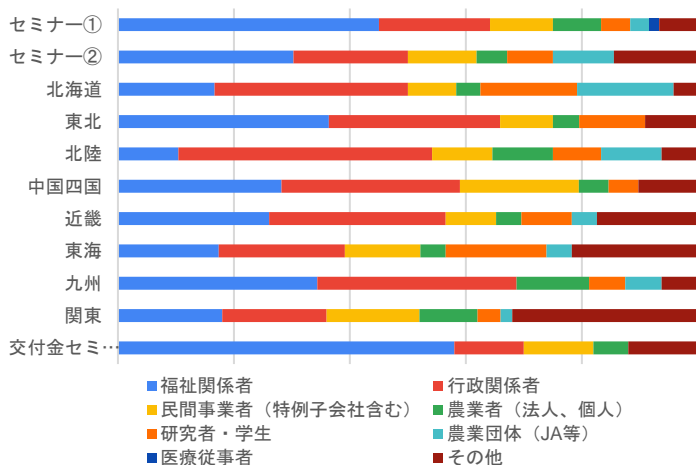
開催方法の希望



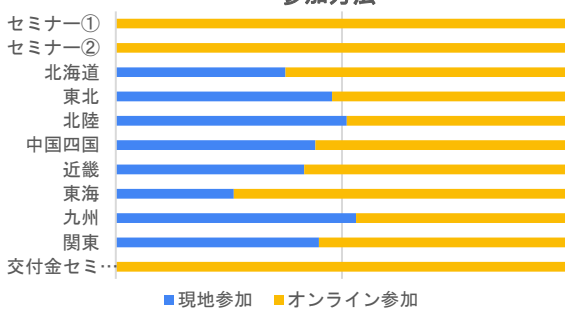
アンケート回答率39% (総参加者数1385人、回答総数538人)



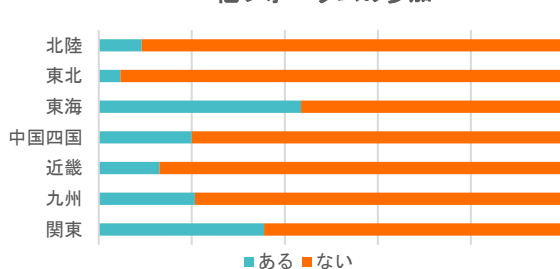
職種割合

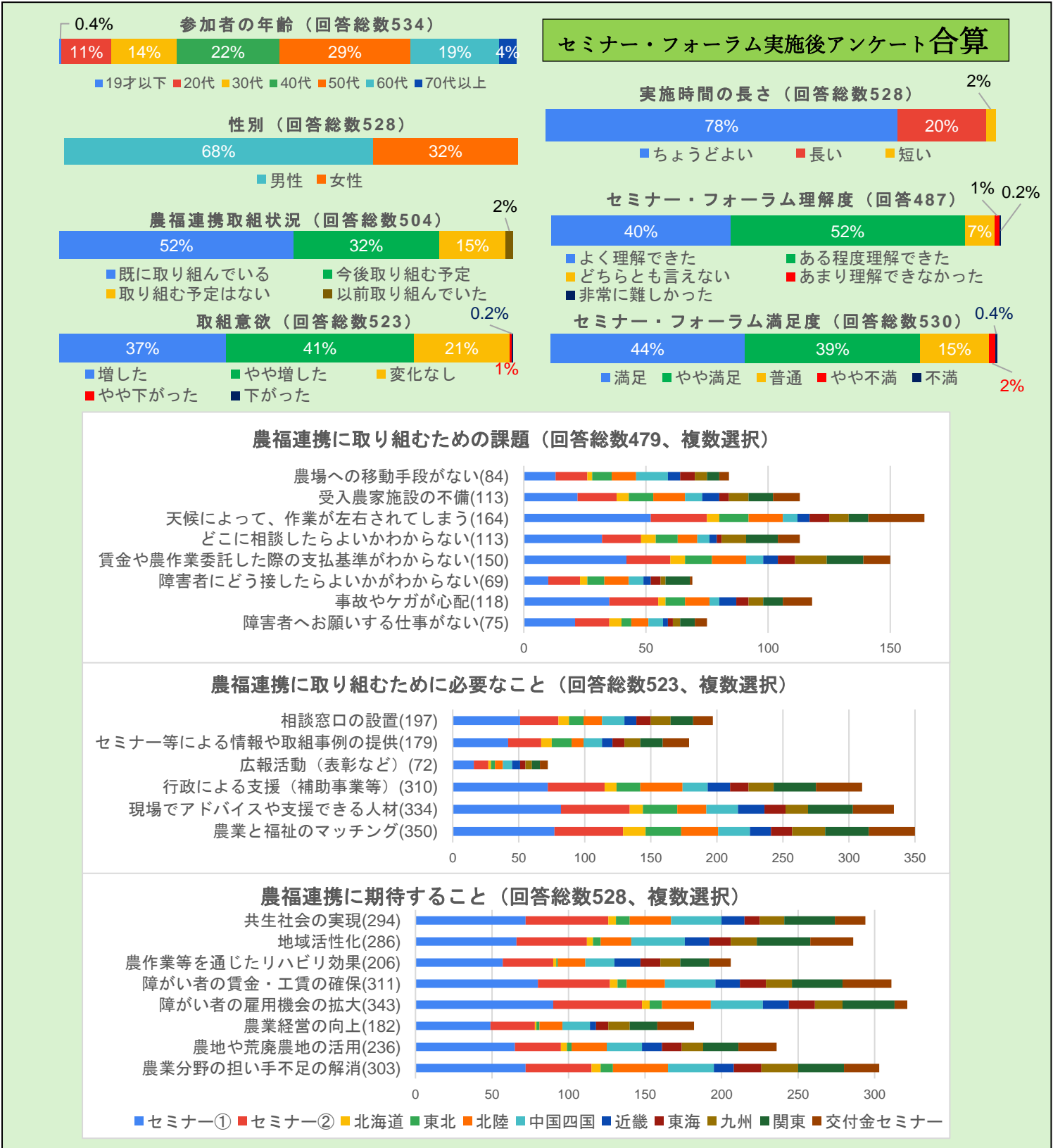
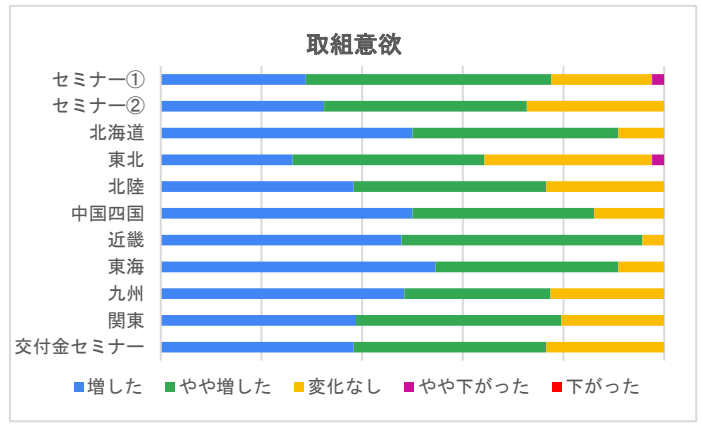
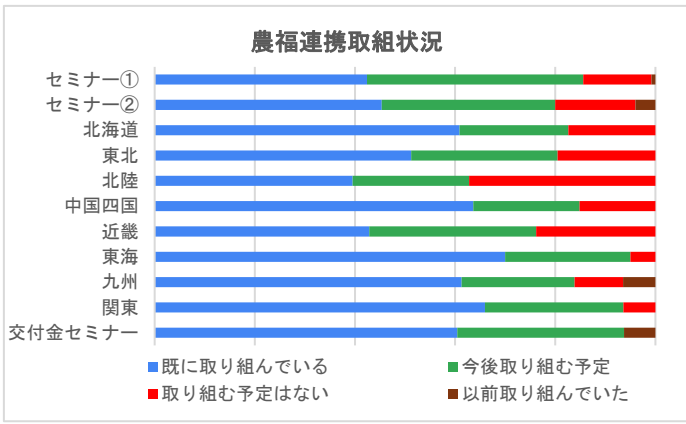


参加方法

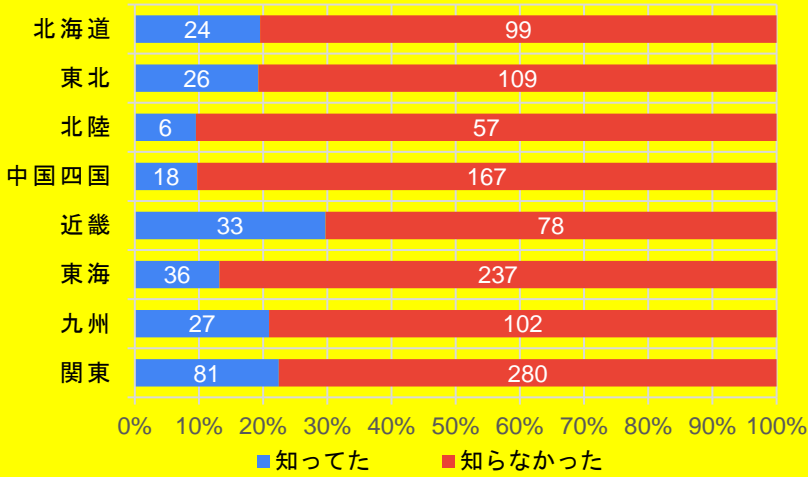


他フォーラムの参加

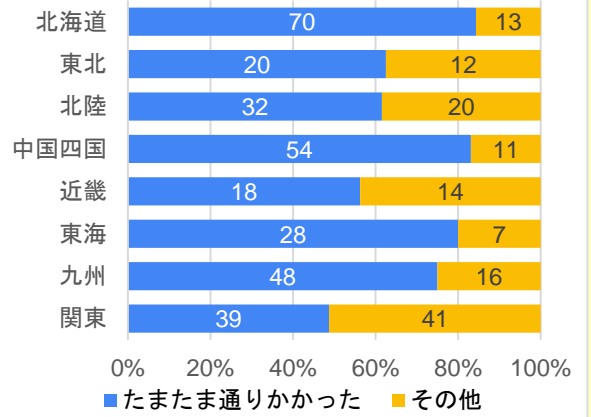




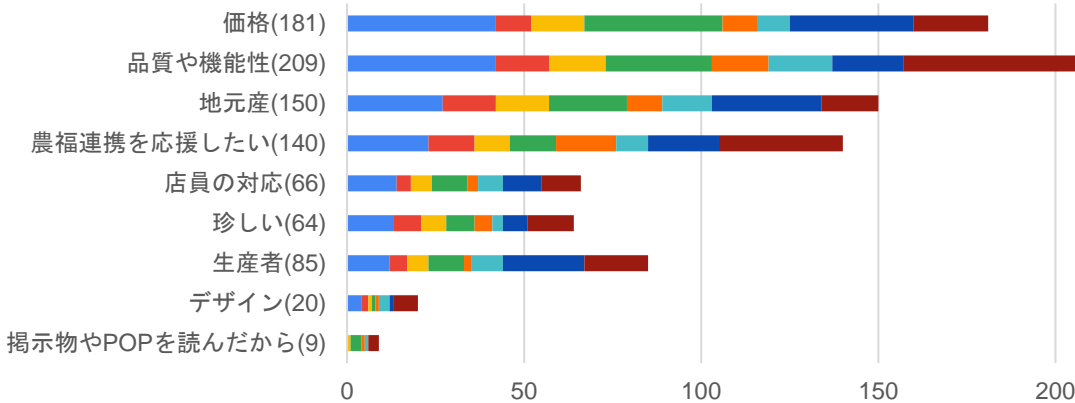
「農福連携」街頭認知度調査（総数1380人）



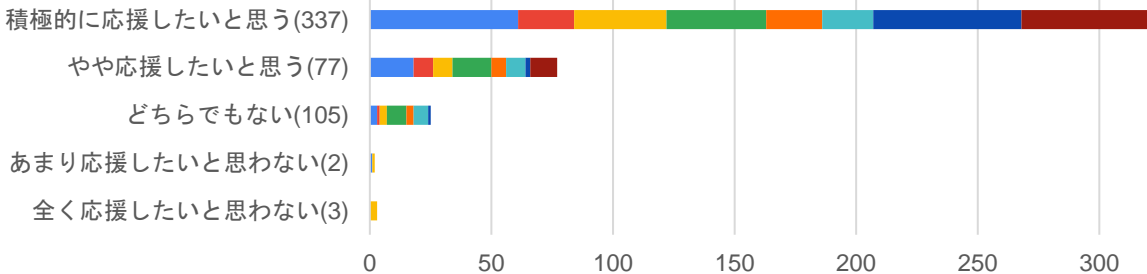
マルシェ来場理由（回答総数443）



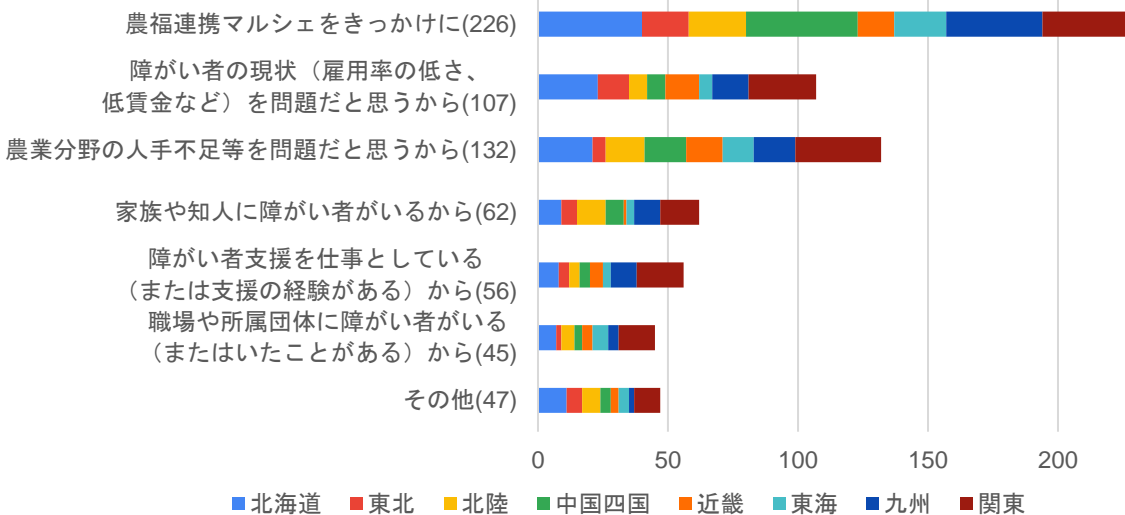
購入理由（回答444人、複数選択）



「農福連携」応援度合い（回答444人）



「農福連携」を応援する理由（回答439人、複数選択）

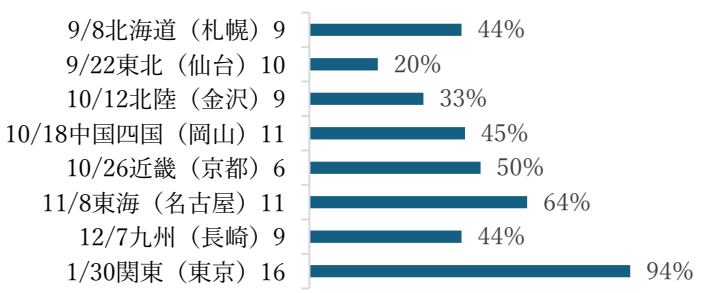


マルシェ購入者アンケート全会場合算

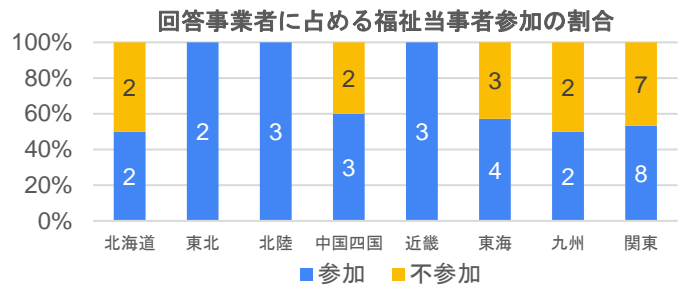
マルシェ出店者実施後一斉アンケート

開催日・開催地・出店数

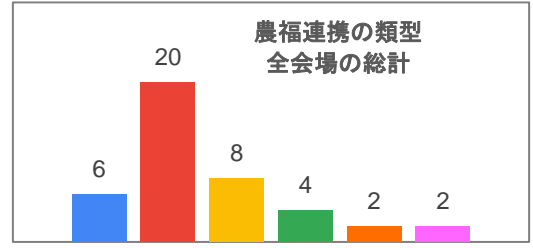
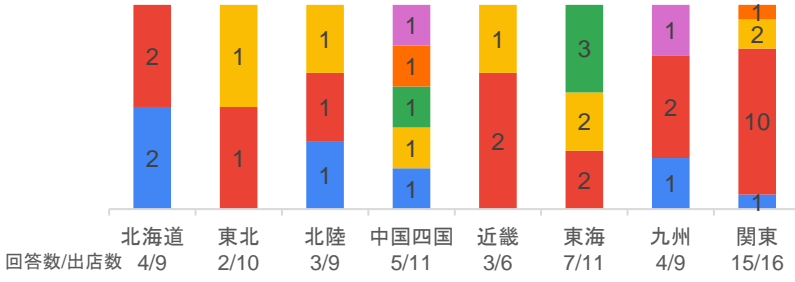
アンケート回答率



総出店数 81
アンケート回答数 43 (回答率 53%)



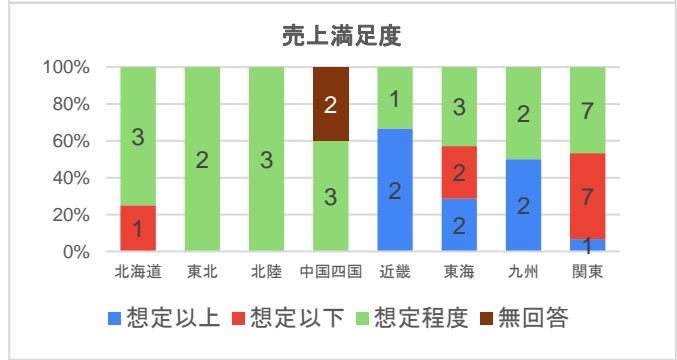
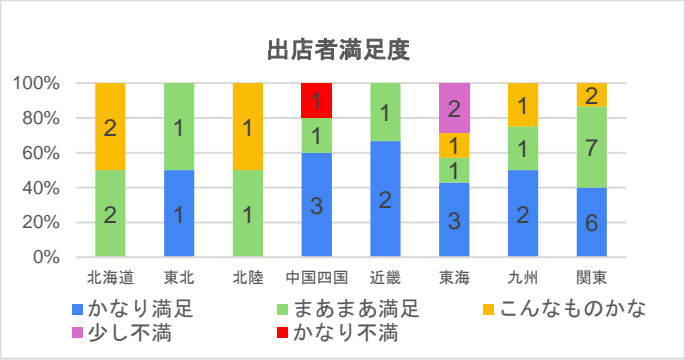
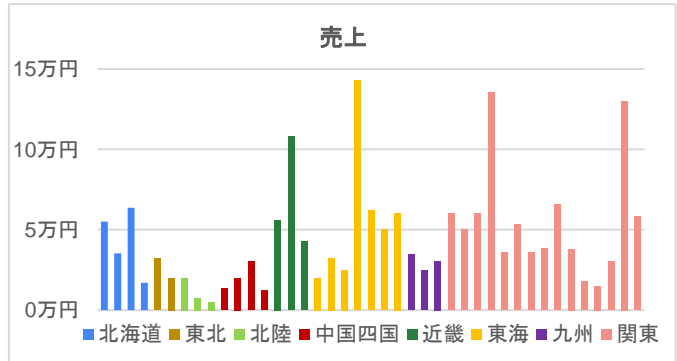
アンケート回答事業者の農福連携の類型



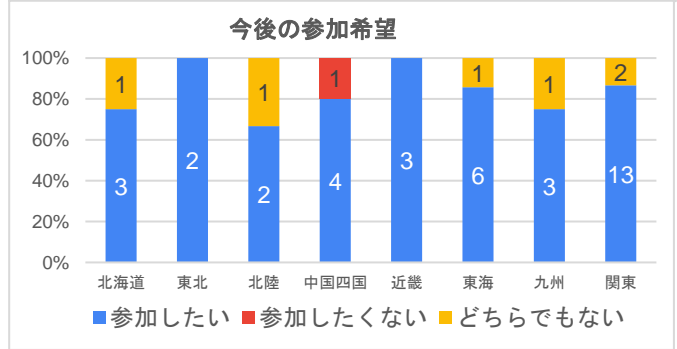
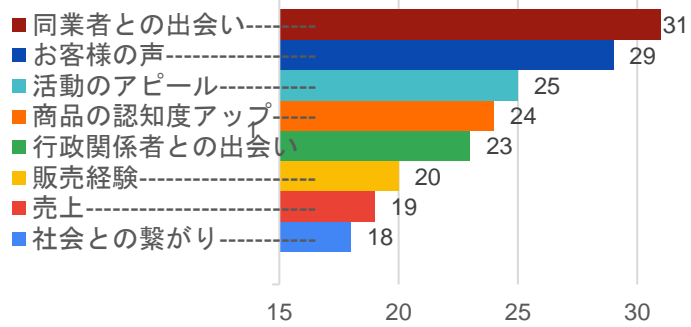
■ 類型① ■ 類型② ■ 類型③ ■ 類型④ ■ 類型⑤ ■ 類型⑥

- 類型①**：社会福祉法人等から施設外就労の形で障害者が農家で農作業の手伝いをする。
- 類型②**：社会福祉法人等が自ら農作業を行ったり、農業法人を別途立ち上げ併設させる。
- 類型③**：農家や農業法人が障害者を雇用したり、障害者就労支援施設を別途立ち上げ併設させる。
- 類型④**：企業が子会社を設立して障害者就労の場を確保する。
- 類型⑤**：病院やNPO法人等が障害者に農作業に取り組んでもらうことで身体や精神の状態を良くして、いこうとする園芸療法の取り組み。
- 類型⑥**：その他

参考文献：吉田行郷「農福連携が農業と地域をおもしろくする」(2020)



農福連携マルシェ参加で得たいもの (複数選択)



農福連携マルシェ出店者の感想や印象	意見、要望、提案等	次回参加希望の理由
<p>北海道</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取り組みを紹介できる良い機会を頂きました。岩見沢という地域も宣伝できたと感じています。 ・農福連携がまだまだ世間に知られていない。人通りの多い場所のおかげでそこそこ売上げたが通りすがりの人がほとんどだった。 ・他店と同じ野菜でも価格差が大きかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・何をやっているのかわかりにくかったので、看板の作りからなど工夫が必要と感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他の事業所の製品も知れる、良い機会を頂けるため。 ・当農場の認知度をあげたい。
<p>東北</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい者が地域の中で活躍できる場があり、また、地域企業、経済に関わっていく様々な形の紹介ができたと思います。今後も、今回の様なマルシェを通じ、広く地域の方々や消費者へ PR 出来る機会があれば参加したいです。 ・宮城大学の学生さんに協力してもらったこと、平日の時間帯ということもあり、会社員の方が多く、販売という部分までは至らなかったこともあった。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・限られた期間やスペースなど様々な制限がある中で、ノフクの形の伝え方を出展者個々に今後発展させていければより良いマルシェになるのではないかと思います。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自社の商品の PR、障害者の地域とのかかわり方を考えるきっかけになればと思います。 ・将来的には全国的に発表などもしたい。(野望！)
<p>北陸</p> <ul style="list-style-type: none"> ・横のつながり(ノフクに限らない)が増えた。 ・北陸管内の農福連携に携わっている方々との意見交換ができて良かった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マルシェのPRの時間を増やしてほしい。 ・ご準備を頂きました関係者の皆様に感謝します。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自社商品の営業に力を入れているため ・ノフク関係商品を多くの皆様に周知したい。
<p>中国四国</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人的に初めて参加したので、もっといろんな事を勉強して行けば良かったと思う。 ・岡山県で出品させて頂ける機会を頂いて大変ありがたかったです。 ・他県の参加機関と話が来て、後日、研修会で一緒なれたこと。 ・搬入で何も運搬するものを貸してもらえなかった。アンケートが著しく販売の邪魔と感じた。 ・完売できてよかったです。 	<ul style="list-style-type: none"> ・試飲や試食が出来る会場が多いと良いと思う。 ・もう少し近い距離(四国)での開催でしたら参加しやすそうです。 ・また、近隣でマルシェがあれば声を掛けてください。 ・時間(平日より土日)、や場所を変更したほうがよいのではと思います。 ・地元でやってほしい。(香川県) 	<ul style="list-style-type: none"> ・商品のアピールをする為に良い機会となる場所なので参加していきたい。 ・ノフク JAS やは一本ふるトマトを多くの方に認知して頂きたい。 ・他の機関と情報交換が出来る。 ・他の事業者と触れ合える。
<p>近畿</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予想以上に売れました！ ・自分たちの商品を一生懸命PRする姿に感動しました。平素は見られない力を発揮し、貴重な体験となりました。 ・特別支援学校や就労移行支援事業所からの実習生も参加したが、販売業務での得意不得意がよくわかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・別会場で同時開催されていたシンポジウムに中継は斬新でした。 ・もう1週間早ければ、黒枝豆の最盛期(10/15~10/20)でさらによかったです。(私事ですみません！) 	<ul style="list-style-type: none"> ・とても良い取り組みだと思つので。 ・利用者さんの元気な姿が見られること、大きな収益。 ・まだまだノフクを上げていきたいから。
<p>東海</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集客できるようにチラシ等の告知をしっかりとされていた。 ・運営スタッフの方が販売や紹介を積極的にやっていたので嬉しかったです。ありがとうございました！  <ul style="list-style-type: none"> ・名古屋市の中心街のマルシェに出店するのは初めての試みでした。通りすがりの方にも立ち寄ってもらえて良かったです。 ・お客様が少なかった。ご高齢の方が多く、財布の紐が固い印象だった。 ・スタッフの方の運営が素晴らしく、とてもスムーズに出店ができました。 ・他の事業所を見て加工や売り方などが参考になった。イベント関係者の皆さんの熱意が伝わってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・開催場所でのどのくらいの集客が見込めるのかが事前にわかると良い。 ・試食が自由にできるように、事前に申請するべきでした。 ・このような農福を広めるイベントをぜひ続けて下さい。 ・講演とマルシェ会場が同じであるとよい。 ・「農福連携」という取り組み自体を評価して、商品を買っていただける方は、特にご高齢の消費者には少ないので、なるべく現役の社会意識の高い顧客層(多様性やSDGSなどに関心の高い層)をターゲットングしてマルシェを開催していただきたい。開催場所としては、単に人通りが多い繁華街という選択ではなく、そのような顧客層が参加するような他の機会(例えば、野外フェス、観光地スポット、アートなど)と協賛できるようなセッティングをしていただくとよいと思う。 ・搬入出の時間や導線にゆとりがあると良いと思いました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他事業所との関わりが増えることや事業所のことを知ってもらうため。 ・ノフクが存在や意義を社会に周知したいため。 ・農福連携の取り組みを知っていただく良い機会であるので、協力したい。 ・都市部での出店、活動PRなど。 販売や商品、活動アピールのチャンスとして。 

農福連携マルシェ出店者の 感想や印象

意見、要望、提案等

次回参加希望の理由

九州

- ・少年院で栽培した野菜ということで、購入いただけるか不安があったが多くのの方に購入いただくことができ、また、少年院在院者に対する応援メッセージのような言葉をかけてくださった方もいらっしゃったことで大変ありがたかった。
- ・主催スタッフ様が浜町アーケードを歩いている方を集客してくださり予想を超える売り上げでした。また、メディアにも取り上げられた為良い PR 活動ができたと思いました。
- ・他事業所でつくられた商品も見ることができとても良い経験となりました。
- ・遠方でのマルシェ参加は初めてでしたが、職員、利用者共に良い経験となりました。
- ・農福連携を知らない人が多くいた印象です。



- ・法務省の機関であるため、一般の農福事業者さんとは異なる立ち位置からの出店になることから、ご面倒をお掛けすることになりますが、引き続き出店させていただけるとありがたいと思います。
- ・今回は、試食も提供することでより売上げに貢献することができるかなと感じました。
- ・スープ付き商品の試食の提供方法(今回は冬に開催されたため)を考えたいと思います。
- ・マルシェもいいですが、10 年先に繋がるような取組を期待しています。

- ・矯正施設の広報になるため。
- ・県内での商品の認知度拡大と販売スキル向上の為。
- ・普段活動している県内だけでなく、他の県の事業さんとの交流もできるのでまた、機会があれば参加させていただきたいです。



関東

- ・非常に活気のあるイベントだった。
- ・出店者同士も協力しあい、楽しい雰囲気でした。当日まで事務局さんがマメに連絡くださっていたので安心して参加できました。ありがとうございます。東京だったので知り合いに声掛け、都内在住の方が数名来ていただきました。
- ・場所が奥まっていたので、人の流れがつかみ難い印象を受けました。学生さん始め、たくさんのスタッフの方々には呼び込みをしていただき、お世話になりました。はじめて参加させていただいたので、他の出展者の方々と交流や商品、ディスプレイを参考にさせて頂くことができ、大変勉強になりました。また、同時開催の講演会にも交代で参加することができ、今までの農福連携のやり方を振り返り、モヤモヤしていた部分クリアになりました。事務的なことになりましたが、ポスターやチラシについてはもう少し早めにお送りくださると配布等に余裕があったかなと思います。会場に着いては、KITTE というだけあってご存じの方も多く、良かったと思いました。チラシを我孫子市(千葉県)の広報課に持参しましたが、KITTE という場所もあり、前日に市内の LINE に情報を流してくれるなどの対応をしてくださいましたので、うまく宣伝ツールを使って地域に農福連携を浸透させていきたいと思いました。
- ・まだまだな認知度。もっと自分達も農福連携を広めていかないといけない。
- ・りんごジュース(1 リットル)は重いからあまり売れないと思っていたが、売れてびっくりしました。
- ・他のイベントと比べ、弊事業所の取り組みに関心を持ってくださる方が多かった。
- ・今回参加させて頂いたことで、お客様や他の団体の方へ作業内容や商品についてお伝えすることができ、大変嬉しかったです。他の団体の方ともお話することができ、大変参考となりました。
- ・東京での開催のためお客様の客層が読めず、野菜が売れるのか不安な面もあったが幅広い客層の方が来店され、野菜にも興味を持っていただき大変ありがたかったです。学生さんの呼び込みにも大変感謝しております。
- ・普段会えない事業所の方と交流できる機会になり良かったと思う。東京のど真ん中での開催だったので、たくさんの方に足を運んでいただいた印象がある。
- ・法人を宣伝する意味で、よかったと思います。
- ・丸の内の消費者の傾向が良くわかった。
- ・お客様はやさしい方が多かった。
- ・大変活気があったが、関係者が多かった。一般の方にたくさん寄っていただけるとなおよいと感じる。



- ・今回の会場は人通りが多かったので、知らない人も多く来ていただいた印象があります。今後そのような会場でできたら良いと思います。3 万円の補助がもらえるだけありがたいが、要望を言えるのであれば、地域ごとに金額を設定してほしいです。近い団体は自己負担額が少なくなるので、会場が遠いと参加をためらう材料となります。
- ・一般の方が買い物に入りにくい? 農産物が販売されていることがわからなかったとお声ありがとうございました
- ・チラシ等の配布を早めにしてほしいです。
- ・当日までのスケジュールが把握できるとありがたいと思いました。
- ・マニュアルが細かく、提出資料も若干見難いところがありましたので、ポイントをかいつまんでざっくりとした点をまずは教えて頂けるとスムーズかなと思いました。
- ・早めのマニュアルの確定、資料の校正等の期間が短すぎると感じました。
- ・出店者同士の交流があってもよかったのかもしれない
- ・昼どきの集客に力を入れられるとよい。
- ・時期を考慮してほしい。夏野菜、秋野菜。
- ・期間を多少伸ばしてほしい。
- ・難しいのですが、暑すぎず寒すぎない場所であれば、生鮮野菜たちが元気でいられます。

- ・出店者のレベルが高かったので学びが多かった。出店経費を出していただけるのでありがたい。
- ・販路の一つとして活用したい。横連携で情報交換の場としたい。
- ・農福連携商品を売り、農福連携の認知度を上げていきたい。
- ・思ったより売れたから。
- ・売上げもそうだが、活動の意義を感じてくださる方が多く、よい広報の場になる。
- ・ノウフクについてお話する機会が持てた為。
- ・農福活動を多くの人に知ってもらいたい。
- ・今回の反省点を次回につなげたい。
- ・販売会を通して取り組みを知って頂ける機会と捉えています。
- ・全国の事業所等の活動内容が理解でき、情報交換等も行っていくことが出来るから。
- ・丸の内のマルシェに出れることは、ノウフクにまっとうに取り組んでいる証になると思うので。



まとめ

分析と課題

令和5年度に本事業で行ったセミナー3回とフォーラム&マルシェ8回における申込時及び実施後に行ったアンケートの分析と考察を通して課題を抽出する。

1 セミナー・フォーラム申込者アンケート¹

<分析>

1-(1)職種

全体で見ると福祉関係者と行政関係者の割合が同じ程度に多く、合わせると約3分の2を占めた。農業関係者は1割弱だった。

1-(2)認知度

農福連携を「聞いたことがある」や「知らない」という程度の認知度である申込者も約9.5%存在した。

1-(3)認知経路

農福連携を知ったのはホームページ（農林水産省、ノウフクWEB）や講演会と答えた申込者が圧倒的に多かった。

1-(4)意欲

農福連携の取り組み意欲は「わからない」「取り組む予定はない」が約22%あり、農福連携の取り組みに積極的ではない申込者も存在した。

1-(5)対象

農福連携に取り組んでほしい対象としては約60%が障害者と答えた。

1-(6)農福連携技術支援者の課題

「農福連携技術支援者の集い申込者」が同支援者として感じている課題は「経験不足、研修不足」と「活躍する場がない」といった回答が多く、次いで「情報不足」や「農業者・福祉事業者の理解不足」「ネットワーク不足」が多かった。

<考察>

1-①申込者の属性の偏りと周知活動の不足について

セミナー・フォーラムの全体を通して農業関係者の参加が少なく、農業関連団体等への周知活動が不十分だった。福祉・農業・行政の関係者以外の参加者はさらに少なかった。誰もが参加できるように、専門的過ぎない内容としていたにもかかわらず、周知手段や活動量が足りていなかった。

主要な周知手段として、農業者や農業志望者が多く集う国内最大級の農業情報サイト「マイナビ農業」に特設サイトを設けて情報発信に努めたが、2023年06月01日～2024年02月18日のトップページへのアクセス数は累計8,179人程度と、効果は限定的だった。

しかしながら、同サイト及び当研究所HPに集約した当事業に関する全国の先進事例等の情報やアーカイブ動画は、事業の後も農福連携の普及啓発に役立つ有益な情報となるように企図した。

1-②認知度とその段階に応じた支援の必要について

セミナー・フォーラムの申込者の中には、農福連携を「これまで知らなかった」または「聞いたことがある」程度の認知度である者が1割ほど存在した。こうした人たちが段階を追って農福連携への理解を深め、取組にまでつながりうるサポートや企画が必要である。

申込者が農福連携を知った媒体は、ホームページやイベントにおける関係機関の直接発信の力が大きいことがわかるが、他の媒体による発信が足りていないと解釈することもできる。

¹ 総計はp67、個別の結果は各イベントの項を参照

現状は、既存の農福連携関係者の内輪イベントの枠を出ていない、との厳しい見方もできる。

取組の濃淡は様々あって良く、「関心があるけれども取組むことができない」という人に向き合い、その第一歩を踏み出す切っ掛けとなるような環境整備を行うことが、農福連携の裾野を広げるためには必要である。

1-③対象者イメージの偏りについて

農福連携に取り組んでほしい対象は「障害者」が一番多かったが、他の選択肢である「ひきこもり等の生きづらさを抱えた方」や「高齢者」「ボランティアや子ども」「触法者」「生活困窮者」が農福連携の対象となることの認識が薄い可能性もあり、そうした取組にもフォーカスを当てながら、農福連携の可能性や多様性、有効性を共有していくことが必要である。

1-④農福連携技術支援者のネットワーク強化について

農福連携技術支援者は2023年5月12月時点で489名が認定されているが、12月22日に開催した「集い」の申込者は81人と、約17%に過ぎない。常設のネットワークとしては2022年12月30日に作成されたフェイスブックグループがあり、現在（2024年3月）の登録者数は108人となっている。しかし、十分に活用されているとは言い難い。農福連携技術支援者への期待や役割は大きい但未だ模索段階であるため、情報や課題の共有ニーズは高い。同グループの拡大や活発化を図り、年に一度の「集い」の在り方もさらに有意義なものへと変えていかなくてはならない。

2 セミナー・フォーラム実施後アンケート²

<分析>

2-(1)アンケートの回答率³

セミナー3回とフォーラム8回の実施後アンケートの総回収率は約39%だった。フォーラムのみでは、申込者の約31%が現地参加だが、実施後アンケートの回答者に占める現地参加者の割合は45%で、現地参加者はオンライン参加者よりも回答率が高い。

2-(2)年齢構成

アンケート回答者は40代50代が比較的多いものの、次いで60代、30代、20代と、会場毎のばらつきはあるが、比較的多様な世代の参加が見られた。

2-(3)男女比

全回答者の男女比は男性68%女性32%だった。

2-(4)満足度と取組意欲

総計では、「満足」44%と「やや満足」39%を合計した83%がおおむね満足だったと答えている。「取組意欲」については「増した」37%、「やや増した」41%を合わせると78%が意欲を増していた。一方で会場比較を見ると、東北会場は「満足」「やや満足」の合計が53%で、他の会場では約80%以上であるのに比して特段に低い。取組意欲の「変化なし」の比率も他会場より大きく、「やや下がった」という回答も1名いた。さらに他ではほとんどいなかった「あまり理解できなかった」が2名いた。また、「実施時間が長い」が8名（5%）いた。

2-(5)開催方法の希望

開催方法は、フォーラムに関してはオンライン開催と会場開催の希望が同じ程度であり、北海道はとりわけオンライン開催の希望が多かった。オンラインで開催した3つのセミナーはいずれもオンライン開催の希望が多かった。

² セミナー・フォーラム実施後アンケートの会場比較は p68、総計は p69、個別の結果は各イベントの項を参照

³ 参加者数は、現地参加者数は申込数、オンラインはZoomに記録されたアクセス者総数である。

2-(6)農福連携に取り組むための課題

「天候によって作業が左右されてしまう」が一番多く、次いで「賃金の支払い基準がわからない」だった。

2-(7)農福連携に取り組むために必要なこと

「農業と福祉のマッチング」が一番多く、「現場でアドバイスや支援できる人材」「行政による支援（補助事業等）」を含めた3点が特に多かった。

2-(8)農福連携に期待すること

「障害者の雇用機会の拡大」が最も多く、僅差で「障害者の賃金・工賃の確保」「農業分野の担い手不足の解消」が続いた。

<考察>

2-①アンケート調査の重要性について

当事業のアンケートは全てオンラインであるため、オンライン参加者の方がアクセスしやすいはずである。必要な情報だけを得て終了前に退席する参加者も一定数見られるため、アンケートを早めに促すなどの工夫が必要である。しかし、アンケートはアーカイブ動画を案内する際にも受け付けており、それでも約4割程度の回収率であるのは、アンケートの意義が共有されていなかったためだと思われる。

実際に、アンケートのフィードバックや活用ができていたとは言い難い。また、アンケートの設計自体が甘かったことは否めず、当事業におけるアンケートは予備調査の域を出ていない。

農福連携事業はまだ発展途上にあることから、アンケート等によるその時々の実態把握が極めて重要である。

2-②参加者の属性について

セミナー・フォーラムの申込時アンケートには年齢の項目を設けていなかったため、参加者全体の年齢構成は不明であるが、2020年の基幹的農業従事者は65歳以上が70%、49歳以下の割合は11%である⁴ことからすれば、少なくとも実施後アンケートの回答者の77%は50代以下（20代～50代）であり、比較的若いと言える。ここに農福連携の大きな可能性がある。また、農福連携を学んでいる学生や研究者の参加も少数ながら見られ、将来の農福連携を担う人材育成の側面もあった。

参加者の男女比についても申込アンケートの項目にはなかったが、実施後アンケートの男女比は現場感覚に近い。なぜ女性参加者が少ないのかについては調査する必要がある。農福連携には多様な担い手の参入が望まれ、こうしたセミナー・フォーラムに女性が参加しにくい要因は、福祉当事者等が抱える課題と共通項がある可能性もある。

2-③参加者の満足度について

満足度については、総じて高水準だった。しかし、東北会場は「満足」40%「やや満足」23%の合計が63%で、他会場の約8割以上に比して特に低かった。「普通」33%と「不満」5%の回答者の中には「あまり理解できなかった」との回答者はなく、「普通」の中に実施時間が「長い」との回答者はいたが、「不満」と回答した人は実施時間については「ちょうどよい」と答えていた。実施時間の長さや理解度とは別の要因によって満足度が低かったものと思われる。

2-④開催方法について

開催方法の希望には地政的な要因もあると考えられる。

リアルタイムで参加するメリットは、他の参加者との交流や質疑、議論への直接参加ができる点にあり、オンラインでも現地参加でもそうしたメリットを享受できるのであれば、ハイブリッド開催はより多くの参加希望者の希望に応えられる。一方、参加したくてもできなかった人のニーズは、アーカイブ動画を用意はしているものの、参加していない人を対象に調査しなければわからないことは多い。当事業のイベン

トを平日に開催したことにメリットもあればデメリットもある。開催日やその時間帯、長さについても、事業効果を最大化するための検討が必要である。

2-⑤農福連携に取り組むための課題について

「農福連携に取り組むための課題」として多く選択された天候や労働環境は、農業者にとっても厳しい側面であるが、体調管理を必要とする福祉当事者にとっては特に厳しい要素である。労働環境の過酷さが農業離れの一因であり、農業者にとっても改善が望まれる。農福連携を推進することが農業者自身の環境改善に本腰を入れる契機となりうる。

「賃金の支払い基準がわからないことが課題」との回答も少なくないが、農福連携の普及にとって、一定の基準を設けることの必要性など、その在り方についても更なる調査研究が必要である。

また、6次産業化等による労務の多様化や賃金体系の情報提供等、事例検証と発信・共有という課題もある。

「農福連携に期待すること」には地域の社会的課題との親和性が高く、成功要因と失敗要因の検証・分析が必要である。

2-⑥中間支援者の重要性について

「農業と福祉のマッチング」も農福連携に取り組むために必要なこととして多くの回答者が選択した。両者の接点づくりが大きな課題となっており、マッチングをコーディネートする機関・人の必要性が浮き彫りになっている。つなぐ役割を担う農福連携技術支援者、農福連携コーディネーターなどの中間支援者の役割は大きい。

3街頭認知度調査⁵

<分析>

3-(1)回答総数は1380人「知っていた」251人（18%）「知らなかった」1129人（82%）だった。

3-(2)認知度が一番高かったのは近畿で30%、一番低かったのは中国四国会場と北陸会場の10%だった。

<考察>

これはマルシェ会場の来場者とその周辺の通行人を対象にシール投票を行ったものである。

マルシェ会場への来場を目的として訪れた人も含まれるため、地域の実態よりは高い結果となっていると考えられる。にもかかわらず「知っている」と答えた人の割合が、調査した全国8か所のどの地域でも3割に満たないということは、国全体として「農福連携」という言葉ですら認知している人が少ないことを示唆している。

4マルシェ購入者アンケート⁶

<分析>

4-(1)来場理由

「たまたま通りかかった」のではない「その他」の割合が一番多かったのは関東で51%、次いで近畿44%、北陸・東北38%、一番低かった（すなわち「たまたま通りかかった人」が多かった）のは北海道16%、次いで中国四国17%、東海20%、九州25%だった。全体では「たまたま通りかかった」62%「その他」38%だった。

4-(2)購入理由

「品質や機能性」が一番多く、次いで「価格」だった。

4-(3)農福連携の応援度合

「積極的に応援したいと思う」が圧倒的に多かった。

4-(4)応援する理由

「農福連携マルシェをきっかけに」が一番多く、次いで

⁵ P70 参照

⁶ P70 参照

⁴ 令和3年度食料・農業・農村白書（令和4年5月27日公表）

「農業分野の人出不足等を問題だと思うから」、「障害者の現状（雇用率の低さ、低賃金など）を問題だと思うから」が続いた。

<考察>

4-①普及啓発におけるマルシェの有効性について

マルシェ開催は、単に関係者が集うのではなく、知らなかった人が事前の周知活動によって知る、たまたま通り掛かって知る機会を得る、出店者と直接話して直接買う、そして味わい体感する、といった重層的なアプローチや多様な欲求に応えるイベントであり、普及啓発事業としての有効性がとても高い。

4-②マルシェ会場における主催者の役割について

マルシェ会場を商業施設内や広場の人の流れの中に設置すれば、通行人が自ずと立ち寄る可能性は高いが、奥まった場所や人通りが少ないところでは、頑張ってお客寄せをする必要がある。当マルシェは1日限定での開催だったため、当然ながら定期開催しているイベントのような信用力はない。待っていても通行人との関係は縮まらないため、積極的にアピールしなければならない。マルシェ出店に慣れていない事業者が少なくはなかったから、主催者には通行人と出店者との間を取り持つ役割が大きかった。主催スタッフは農福連携マルシェであることを声高にアピールし、道行く人々にその社会的意義を投げかけ続けた。結果、話を聞いて立ち止まり、立ち寄ってくれた人も多かった。

4-③マルシェ販売に必要な説得力について

立ち寄って見て回ったとしても購入に至るためには、さらに一段と高いハードルがある。消費者の多くは安いものを買わないし、特段に安価であればまだしも高価なものであれば衝動買いはしない。本当に欲しいもの、不安がなく納得できるものであると判断できればこそ購入に至るものである。そのためには一定の説得材料（物語）が必要である。価格に見合う価値と品質があることは大前提であり、それを説明するためのストーリーづくりが必要である。

一般的な消費者にとっての「マルシェ」は、生産者直売ならではの品質の高さと、比較的安価であること、対面販売の信用力に魅力がある。しかしながら、マルシェ出店者の多くが6次産業化による収益性の向上を図っているため、マルシェ会場まで出張して売るのであるから、通常よりも高く売りたいという事業者も一定数いた。普段は買えないものが出張販売されていれば通常価格だとしても十分にお値打ちではあるが、そうした背景を十分に説明できなければ量販店の安価な類似商品と比較されてなかなか購入には至らない。

4-④普及啓発効果の高さについて

回答者全体の62%が「たまたま通りかかった」購入者であるにもかかわらず、応援度合いでは「積極的に応援したいと思う」が約76%で圧倒的に多かった。一方で購入理由に「農福連携を応援したい」を選択したのは約36%で、「品質や機能性」（約47%）や「価格」（約41%）は「応援」を上回っていた。

たまたま通りがかった人が、農福連携商品の品質や機能性、価格の良さを評価して購入した上で、農福連携を取り巻く問題を理解し応援するに至るのが、普及啓発としての農福連携マルシェの理想である。

当事業のマルシェ会場は、そうした一期一会の出会いに多く恵まれていた。

5 マルシェ実施後出店者アンケート⁷

<分析>

5-(1)回答率

アンケートは全てのイベントが終了した令和6年2月に行ったため、最後に開催した関東会場への出店者の回答率が最も高かった。

5-(2)総出店数

総出店数は81でアンケートの回収数は43、回答率53%だった。

5-(3)福祉当事者の参加

回答した43事業者の内16事業者（37%）で福祉当事者の参加があった。

5-(4)出店者の類型

出店者の農福連携の類型は「類型②社会福祉法人等が自ら農作業を行ったり、農業法人を別途立ち上げ併設させる。」が一番多かったが、全体としてはすべての類型があった。

5-(5)売上

売上には出店者間でかなりの差があった。売り上げの最高額は東海会場の142,900円だった。

5-(6)売上想定

売上は16%が想定以上、56%が想定程度、23%が想定以下だったと回答した。中でも関東会場の約半数が想定以下の売り上げだったと回答した。東海会場の2店と北海道会場の1店も想定以下と答えた。一方、近畿会場2店や九州会場2店、東海会場2店、関東会場1店は想定以上だったと答えた。

5-(7) 出店満足度

「当マルシェへ参加したことへの満足度」は「かなり満足」40%「まあまあ満足」36%で7割以上が満足と回答した。一方で「少し不満」2店「かなり不満」も1店あった。

5-(8) 次回参加希望

同様なマルシェを開催する場合の参加を希望したのは84%だったが、上記で「かなり不満」と答えた中国四国会場の1事業者は「もう参加したくない」と回答した。

5-(9)「マルシェ参加で得たいもの」

「マルシェ参加で得たいもの」は、「同業者との出会い」が最多で、次に「お客様の声」、「活動のアピール」と続いた。

<考察>

5-①出店者満足度について

農福連携マルシェへ参加した出店者の7割以上が満足（「かなり満足」40%「まあまあ満足」36%）と回答した。一方、「少し不満」が2店、「かなり不満」も1店あった。「少し不満」と答えた2店は共に東海会場で、売上げが少なく売れ残りが多く出たことが主要因とみられる。「かなり不満」は中国四国会場で搬入の不便さが主要因とみられる。会場が商業施設内で、台車の使用が出来なかった上、搬入口から会場までが遠かったためかなりの負担が生じた。そうした状況に備えることのできなかった主催者の不手際は反省しなければならない。

5-②売上満足度と東京会場の特殊性について

売上に関しては16%が想定以上だったと回答した⁸。想定程度を含めると、想定程度以上が72%だった。

一方、23%が想定以下で、特に関東会場は約半数が想定以

⁷ P71 参照

⁸ 近畿会場に出店した「たすきファーム」は、日本農業遺産に認定された丹波篠山の黒豆の枝豆を、値下げせずに完売し、過去最高売り上げを達成した。

下だったと回答した。このことは会場が東京駅の目の前で有名商業施設内だったために期待が大きかったものと思われる。とりわけ関東会場は奥まった空間であったため、通路に面した入り口から奥へと客寄せしなければならなかった。事前の視察で難易度の高さがわかっていたため、各出店者にも協力を仰ぎ、所在地の関係機関へのチラシ配布やポスター掲示を依頼するなど、他会場よりも事前の周知に力を入れた。そうした事前周知が伝わって来場した農福連携に理解のある客が購入者アンケートに答えた率も高いことが容易に想像でき、来場理由の「たまたま通った」以外の「その他」の割合が関東会場が一番高かった要因であると推察できる。⁹

5-③マルシェ主催者の責任について

普及啓発事業であったとしても、生産者にとっては売れた量が一番の成果である。客がいたとしても実際に売れるかどうかは出店者次第ではあるが、マルシェを開催する主催者には客が溢れる会場にする責任がある。たまたま通りがかる人には限りがある。事前の周知活動でたまたまイベントを知る確率を高める努力が必須である。そうした活動そのものが普及啓発活動なのであり、出店者満足度は総じて高かったが、事前活動が不十分だったことは否めない。

5-④当事業における農福連携マルシェの特徴について

自治体単位や有名どころが集まる全国単位の農福連携マルシェは少なくないが、都道府県を跨いだ地方農政局の管轄地域といった規模で各地の先進事業者が集まって開催するマルシェは珍しい。出店者の大部分は大手流通網で販売している事業規模ではないから、来場者にとっては、各地の事業者の元へ行かなければ入手できない個性的な商品と一度に多く出会うことができるのと同時に、様々な農福連携の取組を知ることのできる、とてもユニークなイベントだった。また、出店者同士にとっても、各地に点在している先進事業者が集うことにより、互いに知り合い高め合う貴重な機会となった。

事業成果

<認知度向上セミナー>

・実施後アンケート回答者の8割以上が一定の理解度と満足度を示し、取組意欲が増していた。

<農福連携フォーラム>

・実施後アンケート回答者の8割程度が一定の理解度と満足度を示し、取組意欲を増していた。

<農福連携マルシェ>

・アンケート回答した出店者の約7割が想定程度以上の売上げを得て、満足感を得ていた。
・購入者アンケート回答者の約6割が「たまたま通りかかった」購入者だったが、7割以上が「積極的に応援したいと思う」と答え、来場者の認知度及び理解度の向上に貢献した。

<農福連携技術支援者の集い>

・実施後アンケートで「来年度も参加したい。」が約9割で、満足度の高いイベントとなった。

<メディア露出>

東海、九州、関東の各会場の様子が報道された。
・スターキャット・ケーブルネットワーク「農福連携マルシェ【StarCatウィークリー】」2023年11月16日放送
・テレビ長崎「マルっと」注目 農業×福祉の互いの課題解決へ 長崎市で「農福連携」のイベント 2023年12月7日放映
・日本農業新聞「農福連携活動を共有 東京でフォーラム 販路拡大し工賃増」2024年1月31日首都圏版13面掲載

⁹ 関東会場の管理会社からの情報によると、イベントスペースと隣接する観光案内所とカフェを合わせたイベント開催時の平均的な来場者数は約2700人（非開催時は約2000人）であるところ、農福連携マルシェ開催日の来場者数は4,137人だった（マルシェ来場者数は約2000人と推定される）。

事業統括（所感）

■WEBセミナー：農福連携に取り組もうとしている、あるいは始めたばかりの方々へ向けた「一歩め」や「次なるステップ」の「きっかけづくり」を主目的として開催し、有識者と実践者（農・福・企業）に登壇いただき、それぞれの立場で理論的かつ実践的な内容をお話いただいた。オンライン配信ではあるものの、ありがたいことに会場に赴いてくださった登壇者が半数以上であり、おかげで登壇者同士の活発な議論へとつながったのではないかと思います。参加者においても、一定の理解や満足度を得られたとともに、取組の初期段階にいる実践者・実践者候補の方々がどのような課題と直面しているかについて、改めて表出化できたと考えられる。交付金活用セミナーについては、実際の活用者と農水省・厚労省からの具体的な情報提供があり、具体的な制度活用方法のヒントを得られたのではなからうか。

■農福連携技術支援者の集い：当日は、関係者を含めると150名程度の参加があり、千葉大学吉田教授の御縁で、農福連携に関わる千葉県庁やJAの担当者の方々にも参加・発言いただいた。アンケート結果等にもあるように「技術支援者にはなったが、どのように活動すべきか」というアクションプランに悩む方々が一定数見られるため、技術支援者としての学びやネットワークをどう構築し活かすかについて定期的な議論の場づくりの必要性が改めて表出化された。

■フォーラム・マルシェ：北海道・東北・中国四国・北陸・近畿・東海・九州・関東と、全国8箇所において、フォーラムとマルシェを徒歩15分以内で移動できることを基本として、相乗効果を図りながらの開催であったが、主目的は「それぞれの地域の農福連携の魅力を伝えること」であった。フォーラムを通じ、その取組の背景にどんなライフストーリーや理念そしてネットワークが生じたかなどについての議論が交わされ、マルシェにおいては、取組の成果と言える農産物や加工品等を通じて、農福連携の魅力を各地域の方々へ伝えるとともに、登壇者同士、来場者、出店者同士など、幅広い交流機会にもなったのではないかと拝察する。このような「交流機会」や「魅力発信」をより深めかつ掘り下げたかったという後悔もあるが、上記セミナー含め、映像や本報告書等の多くのアーカイブを残せたことはひとつの成果と考えている。そして、そこに満足することなく、このアーカイブスや抽出された課題、生じたネットワークなどを活かし、いかに実践的醸成を図れるかが今後の大きな課題であり、当研究所としても、実践研究及び実践支援の取組を今後も継続し深めていきたいと考える次第である。

<事業実績報告書>

令和5年度農山漁村振興交付金
農山漁村発イノベーション推進事業
(農福連携型のうち普及啓発・専門人材育成推進対策事業)

報告者-----株式会社農都共生総合研究所
東京都文京区湯島1-8-4 山川ビル7F
noufuku@notosoken.jp
提出日-----2024年3月31日